

# 第1章 游の奇絶の始まり——郷里から都へ

[第1章その一]

嘉祐4年 [1059年]、蘇軾24歳。

## ■ 【01-1-001】 郭綸

【解説】 中国の宋の時代は、都が東京開封府 [汴京] に置かれた北宋 [960～1127年] と、臨安府 [杭州] に置かれた南宋 [1127～1276年] に二分され、蘇軾 [1036～1101年] は北宋が後半期に入ろうとするところに生まれた。最初に見るこの詩は、嘉祐4年 [1059年] の作品で、当時の皇帝は4代目の仁宗であった。仁宗皇帝は、儒学が最も重んじる「仁」の文字が廟号 [天子の霊を祀るときに贈られる名で、亡くなった後の皇帝は廟号で呼ばれることが多い] として選ばれていることから推測できるように、北宋の人々からは非常に優れた天子であったとして敬われ、実際に仁宗皇帝のもとで北宋は最盛期を迎えた。仁宗皇帝は温厚で生真面目であったが、決断力と忍耐力に欠けていたようで、国勢が最盛期から徐々に下り坂に向かい始めたなかで、国政改革の大きなチャンスを逃し、国力の衰退と民衆の疲弊の進行に歯止めをかけることができなかった。嘉祐4年は、42年間に及んだ仁宗皇帝の治世の38年目で、最晩年に至った皇帝は、2年前に風眩 [恐らく脳血管障害] を病んだこともあって、国家の抱える諸矛盾の解決に取り組もうとする意欲はもはや失っていた。この年の10月上旬、蘇軾は父・蘇洵、弟・蘇轍とともに郷里の眉州眉山県 [現在の四川省眉山市] を船で発ち、都に向かった。軾と轍の兄弟は2年前の春に高級官僚の登用試験である科挙に合格していて、いよいよ官職に就くための上京であった。船は長江の支流の岷江 [蜀江] を下り、嘉州の嘉樹という町に停泊したところで、退役軍人の郭綸と

出会い、この詩を詠んだ。この詩には、蘇軾自身の注で、「郭綸はもとは河西の弓箭<sup>か せい きゅうせん</sup>手で、しばしば戦<sup>いさお</sup>って功があったのだが、賞されなかった。黎州都監<sup>れいしゅう と かん</sup>の任期が満ち、しかし貧しくて帰ることができなかったので、いまは仮に嘉州監税<sup>か しゅう かんぜい</sup>となっている」と書き添えられている。河西は当時の北西側の国境地帯で、隣国の夏国としばしば軍事衝突があり、郭綸はそこで兵士として戦い、その後、前線を離れて黎州で都監という低い官職に就き、さらにそこから100キロほど東の嘉州にきて、通行税を徴収する仕事に就いていたのである。なお、この詩よりも前に蘇軾が過ごした歲月については船旅が一段落したところで見ることにする。

【補足】[一行には、父子3人のほかに、兄弟のそれぞれの妻 [王氏<sup>おう</sup>と史氏<sup>し</sup>]、それぞれの乳母 [任採蓮<sup>にんさいれん</sup>と楊金蟬<sup>ようきんせん</sup>]、そして軾の生まれたばかりの長男の邁<sup>まい</sup>がいた。この時代に朝廷の高官が移動する際に使った船でも、せいぜい現在の屋形船くらいの大きさで、収容人員は多くても20人くらいであったようだ。蘇軾一行に上記の家族の他に使用人が付いていたとしても2、3人くらいであったのだろう。船員とともに船上でどのような日常を送ったのかといった些事を記録することは旧中国の文人の関心外であったようで、以下の詩にもほとんど詠み込まれていない]

【注記】[この自由訳では、2種類の括弧を、次のようにおおまかに使い分けている。①カギ括弧 [ ] は、その中に簡単な補足説明を記す。②丸括弧 ( ) は、訳文中において、原詩にはそれに対応する語句はないけれど訳文につなげて読むことで意味が通じやすくなる語句をその中に記す。ただし、この自由訳は逐語的な訳ではないので、特に括弧を使わずに原詩にはない語句を記すことはむしろ普通に行っている。括弧を明示するかしないかは、訳者のちょっとした感覚に左右される]

## 【訳文】

老いた郭<sup>かくりん</sup>綸<sup>か</sup>が河西の勇猛な戦士であったのを知る人は、  
いまこの町にはいない。

郭綸は日が暮れるまで船着き場<sup>か</sup>にいて、  
通過する船を調べている。

この町の人は、  
郭綸の乗る馬がひどく瘦せ細っているのをいつも見ているだけで、  
仮のやどりのぼろ小屋に、  
巨大な鉄の槊<sup>さく</sup>[柄の長いホコ]が置かれているのを見た者はいない。  
郭綸はいう。

「あの槊を振りまわして、  
わしは三日間の猛攻に耐え抜いた。  
それで敵は引き揚げたのだ。  
だが敵は亡び去ったわけではない。  
だから、わしはずっと一つのことを願っている。  
いつかこの髪を切って誓いを立て、  
必ず一万の騎兵の先頭に立って、  
今度は敵地へと攻め入るのである」

私はいう。

「そのときがきたならば、  
私も戦場に出て、  
あなた方の放つ矢が敵陣に雨のように注がれるありさまを、  
必ず見させてもらおうと約束しよう」

【補足】〔(1) この船旅で、父も弟も数々の詩を詠んでいる。郭<sup>かくりん</sup>綸については弟も詩

に詠んでいて、その事績を詳しく叙述している。蘇軾はそれとの重複を避けたのだろう、簡潔過ぎてわかりにくいところがあるので、この訳文では弟の詩から一部を引いて補足している。(2) 郭綸とはこのとき初めて会ったようだ。恐らく、父の蘇洵そじゆんが郭綸から身の上話を聞き出したのだろう。父は強い独立心に満ちた性格である一方で、不思議と人を引き付ける魅力にあふれ、2人の息子の目の前でたちまち郭綸の心を開かせてみせたのだろう。そのような才はより多く兄の方に受け継がれたようだ。(3) 郭綸が戦ったのはこれより19年前のことであったと推測される。宋国そうの北西にはチベット系のタングート族が建てた夏国かがあり、特に李元昊りげんこうが宝元元年〔1038年〕に皇帝位に就いてからは宋国と激しく対立するようになり、宋国が不用意に挑発したことで、慶曆元年〔1041年〕に夏国との戦争が始まった。宋国は気位の高い大国であったが、その軍備は張子の虎で、夏国側の機動力を駆使した果敢な攻撃によって重要な軍地拠点を次々に失い、たちまち苦境に陥った。そのときに、防御態勢の立て直しに力を尽くしたのが韓琦かんきと范仲淹はんちゆうえんで、後に見るように、蘇軾が特に尊敬する4人の先輩のうちの2人である。前線での実情は正しくは中央に伝わらず、郭綸は活躍に見合う処遇を与えられなかつただろう]

## ■ 【01-1-002】初発嘉州

【解題】嘉州かを過ぎると岷江びんこうは二つの川を合わせて水量がぐっと豊かになる。その流れに乗ったときの詩。この詩には、蘇軾自身の注で、「この日、郷里の僧である宗一そういちと、釣魚台ちようぎょたいの下で会って別れを言う約束をしていた」と、添え書きがある。

### 【訳文】

朝、にぎやかな太鼓に送られて船は嘉州かを発った。

折よく西風に送られ、帆柱の先で旗が軽やかにほためく。

故郷はすでに遠く、

気持ちは船に先んじて遙か前へと飛んで行こうとする。

ともに下ってきた岷江の水はもはやそれだと見定めることはできず、

新たに加わった水はまことに清らかである。

川の勢いのままに、

高さ三百六十尺の石仏の足元を瞬間に通過したかと思うと、

今度は川幅が広がって悠然と平地を行くかのようになる。

ある禅僧と、

小さな町の釣魚台で会おうと約束しているのに、

船の歩みは少しも速くならない。

川面から夕靄が湧き立つところになっても、

まだまだ先は遠い。

さらさら流れる水のほとりにずっと立ち続けて、

僧はいまも待っていてくれるだろうか。

【解題】〔(1) 蘇軾の友人には、仏教の僧侶や道教の道士が数多くいた。上の詩に詠まれていた僧のほかにも、嘉州の嘉樹で数日間滞在する間に、惟簡という僧と会おうとした。しかし、惟簡はついに現れなかったので、残念な思いを抱いて嘉州を去るとい手紙を、蘇軾は惟簡に送っている。惟簡は蘇軾と同じ眉山県の蘇族の出身で、蘇軾と同世代のやや兄貴分に当たる。蘇軾は蘇族の同世代の男子のなかで93番目であったという説があり、蘇族の規模がおぼろげながらに推測できる。惟簡は宝月大師の号を贈られるほどの名高い僧となり、蘇軾との交遊は長く続く。(2) 惟簡への手紙には10月12日の日付が記されていて、それによって最初に眉山を出発したのは10月

4日ないし5日であったと推測されている。蘇軾がいつどこで何をしたのかということを知る一番の資料は蘇軾自身が書き残したもので、それらを綿密に突き合わせることで蘇軾の詳しい年譜が編まれている。この自由訳は、孔凡礼撰『蘇軾年譜』（1998年）に全面的に依拠し、ごく希に他の書物に拠ることもある]

## ■ 【01-1-003】 榿為王氏書楼

【**解題**】<sup>けんい</sup>榿為という町で父の知人<sup>おうせいゆ</sup>の王斉愈の書楼を訪ねた。あいにくと王斉愈は遠方に出ていて留守であった。

【**補足**】<sup>び</sup>眉州から<sup>か</sup>嘉州までは百二十里、<sup>けんい</sup>嘉州から榿為までは百五十六里であるという。この自由訳で使う「里」は中国の単位で、一里は約600メートルである]

### 【訳文】

木々が谷を埋めるその先に、  
 高くそびえる楼観がある。  
 昔から知られる書庫で、  
 今も万卷の書物が塵をかぶっている。  
 朝日に赤く染められていた川べりの霧が消え、  
 書楼のもとへと上って行くと、  
 趣のある青い楼閣の美しい飾りのついた窓が見てくる。  
 山の風に乗って窓辺に鳥が飛びかい、  
 水のせせらぎにまじって猿の声がする。  
 私たちは尋ねた。  
 「書楼のご主人はいまどちらなのでしょうか」

「こしばらく遠くの地で辛苦に耐えています。

ときには、頭に甲かぶたを載せて敵陣に突っ込み、

首を斬り合うようなことも覚悟しなければならないようです。

読書三昧の暮らしはもうできなくなってしまいました」

「書物を友としていた者でも、

戦陣たけしに臨んだ例はたくさんあります。

諸葛孔明しよかつこうめいがまさにそうだったではありませんか」

そのように私はいったものの、

閑雅と思えたこのあたりの風景が、

まるで違ったものに見え、

この世界に生きる悲しみを覚えた。

【補足】〔(1) 王齊愈おうせいゆの家は立派な書楼を建てられるほどに裕福であったのだが、何らかの事情で経済的に苦しくなり、やむなく西北での危険な仕事に携わっていたようだ。その後、王齊愈はますます窮乏して書楼を手放し、長江を下つての留寓生活を余儀なくされ、21年後に思いがけない場所で蘇軾と出会うことになる。(2) 諸葛孔明しよかつこうめい [諸葛亮しよかつりやう] を引いて相手を励ましているのは、諸葛孔明が三国時代の蜀しよくの国の宰相で、眉州も犍為も蜀の地に含まれ、郷里の偉大な先人だからである。蘇軾はしばしば蜀の先人の事績を詩文に引用する。なお、地域名としての蜀は、四川盆地を中心とする現在の四川省のあたりを指す]

## ■ 【01-1-004】 過宜賓見夷中乱山

【解題】犍為けんいから川を下つて宜賓ぎひんを過ぎると、左右は山また山のいわゆる「夷中いちちゆうの乱山」となる。

## 【訳文】

山々にはさまれた谷の底は天から遠く離れ、  
 空が晴れているのかどうかもわからなかった。  
 明け方はことのほか寒く、  
 立ち昇る靄によって、高い峰はすっかり包み込まれていた。  
 やがて湧き出るようにして岩の壁に光が射してくると、  
 雲の動きとともに、  
 崖の木々の一本一本がまざまざと見えてくるようになった。  
 ついに谷の底にまで日の光が落ちてきた——  
 私はそれを手ですくい取ろうとした。  
 そのとき谷の底から鳥が飛び上がり、  
 深い青空の中へと吸い込まれて行った。  
ばんい  
 蛮夷の地であるこの風光を愛する者はいない。  
 心に適うものなどどこにもない。  
 だから、世を避ける人であるのなら、  
 心の鍛錬をするのにここをよしとしないとも限らない。  
 そのような人を尋ねてみたいと思っても、  
 山中の道には狼や虎の足跡ばかりがあって行くことができない。

## ■ 【01-1-005】夜泊牛口

【解題】ぎゅうこう 牛口の岸辺に船を繋いで一晩過ごした。

【訳文】

川から上り立つ薄い霧が、  
落ち行く夕日によってほんのり赤く染められるようになったところに、  
ようやく船を岸辺に繋いだ。  
古びた柳の下にたむろしていた三、四人が立ちあがり、  
そろりそろりとこちらに寄ってきて、  
「薪はいらんか」  
と、売り始めた。  
あたりには茅葺の小屋がばらばらと建っている。  
船から上がり、その小屋を見に行くと、  
壁の間から星がのぞくような粗末な作りで、  
夕食に煮ているものはといえば、  
せいぜい野菜があるだけだ。  
肉らしいものなどはなく、おろん酒もない。  
それでも、子供たちの声は楽しげで、  
わびしさを感じさせるものは一切ない。  
もしかしたら、  
人生とは本来このようなものなのではあるまいか。  
何か事があるわけでもないのに、  
世の中のあれやこれやに誘われて、  
苦しみが生じてしまうのだらう。  
富貴の輝きが目の前にちらつけば、  
貧賤を守り通そうとするのは難しい。

ここに生きる子供らは自然の友であろうとしている。

深い山の中の、いわゆる夷えみしの地に身を置きながらも、

その姿にみにくさを感じさせるものは何もない。

あくせく世間を走り回るこの私は、

いったい何をしようとする者なのだろうか。

【補足】〔(1)「人生とは本来……」以下に、若い蘇軾の人生観が端的に示されているといえるだろう。蘇軾が合格した科挙かきよは、まさしく「富貴の輝き」を目の前に見せるものであった。宋の時代に入って科挙の制度が整備され、朝廷の高官は概ね科挙の合格者が占めるようになり、高位に昇ればもしもその気になるなら自ずと蓄財の道も開けた。蘇軾は決して富を得ようとの欲望に駆られて都に上ったわけではなく、別の志があったことは後に見ることになる。〕(2) 終わりの部分で「夷えみしの地」と訳した原文は「蛮ばん荒こう」[野蛮で未開なところの意味]である。ひとつ前の詩にも「蛮夷ばんいの地」という表現があった。蜀しよくの南部の山岳地帯から南は、漢民族以外の異民族が入り混じって住む土地で、異民族に対しては差別意識に基づく語句を何ら躊躇なく用いるのが普通であった。漢民族と異民族は支配者と被支配者の関係になることが多く、蜀の南方でしばしば戦乱が生じ、古くは諸葛孔明しよかつこうめいが蜀の国を固めるために、まずは南方の諸族を平定しなければならず、そのことが『三国演義』でも一つの見せ場となっている]

## ■ 【01-1-006】 牛口見月

【解題】牛口ぎゆうこうで泊まった夜に月を見て詠んだ詩。

### 【訳文】

人々が静かな眠りにつくと、

閉じられた船の窓の細いすき間から、  
ひそやかに月の光が忍び込んでくる。  
私はそっと衣をまとって外に歩み出る。  
すぐに夜露が降りてきて裾をぬらす。  
山と川がひとつの色に染まっている。  
大空をひろびろと渡って行くような気分になって、  
あたりをあてもなくさまよう——  
いつしか私は都にきていて、  
「川が切れたぞ」  
との叫び声に驚かされる。  
見ると、すでに都の半分はすっかり水びたして、  
さっきまで馬や車が行き来していた道は、  
いかたでなければ渡れないありさまになっている。  
一度水の出た町が、  
きらきら輝く真夏の太陽に照らされると、  
むっとする臭気でいっぱいになる。  
今度は、どこからともなくさわやかな秋の風が吹いてきて、  
「竜津橋りゅうしんきょうのあたりで夜市が開かれるぞ」  
という声がる。  
ふらふらとそちらに行ってみると、  
無数の燈火が真昼のように煌々こうこうと輝き、  
ものすごい人の多さだ。  
あまりの喧騒に、逃げるようにして光の輪の外に出ると——

私は再びもとの川べりに立っている。

月の光に乗じて、

三年前の都に帰っていたのだろうか。

これからはるばる旅路を重ね、

世間の塵を浴びるためにわざわざまた都に行こうとしているのは、

いったいどうしてなのだろうか。

【補足】 [この詩の終わりに、「三年前の都」 [原詩では「丙申へいしんの年」と記されている] とあるのは科挙の受験のために上京したときのこと。科挙は地方で受ける一次試験から、都で受ける二次試験、皇帝の面前で受ける三次試験まであり、蘇軾兄弟は地方出身者であるにもかかわらず一次試験から都で受けた。多くの人が憧れ、当時世界第一の繁華を誇った宋そうの都も、蘇軾にはあまり好ましい印象を与えなかったようだ。受験のときのごことはまた後で詳しく見ることにする]

## ■ 【01-1-007】 戎州

【解題】 犍けん為いから百五十里じゅうの戎州じゅうで詠んだ詩。ここでは少数民族との交易のための市いちが定期的に開かれていた。

### 【訳文】

古くからのこの町は無数の山に囲まれている。

山は痩せ、耕す土地はわずかしかない。

それでもここに町があるのは、諸民族との境目であるからだ。

かつては異変の報せに、

軍馬があわただしく出て行き、

そのまま帰らぬこともあったと聞く。

いまは夜ものどかに時の鐘が響きわたるだけだ。

我が宋<sup>そう</sup>の文化が広く浸透したのたろう、

あちこちから人々が宋の物品を求めてさかんにやってくる。

ただし金の耳飾りのようなものには関心がなく、

それぞれの民族特有の装飾品で満足しているようだ。

諸民族が互いに強弱を争って何の意味があろうか。

いまやすべては等しく宋の民であって、

見れば皆がそれぞれにいい表情をしているではないか。

【補足】[この訳詩では「諸民族」という穏やかな表現にしているが、原詩では

「群蛮<sup>ぐんぼん</sup>」で、伝統的な中華意識が顕著な言葉である。蘇軾のみならず旧中国の文化人にとって、高度に進んだ中華文明の圏外にいる人々を野蛮な「夷、狄、戎、胡<sup>い てき じゅう こ</sup>」とみなすことは不道德であるとは考えられておらず、「群蛮」を教化して文明圏に招き入れられないことが不道德なのだった。ここで「宋の文化が広く浸透した」と訳した原文は「従化<sup>じゅう か</sup>」[化<sup>か</sup>に従<sup>したが</sup>う]で、高いところから低い所へと水が流れるように、低い文明社会が高い文明社会に自然と従うことを意味する。たとえそこに支配・被支配の関係が入り込もうとも、「従化」が善であることに疑念の余地はなかった。前に触れたように、蜀<sup>しよく</sup>の南部以南は諸民族との紛争がしばしば生じる地であったが、もしも諸民族が同じ文明圏に順化するならば、もはや争う意味のない同じ国の一員になると、若い蘇軾はこの詩で歌っている。蘇軾といえども時代による制約は免れなかったと我々は感じるのだが、当時の支配者層の多数はもっと狭量<sup>しよく</sup>で、蜀の出身者<sup>ちゅうげん</sup>でさえも中原[都<sup>かいほう</sup>開封や洛陽<sup>らくよう</sup>など国の中心地域]出身者からは差別視されることが少なくなかった]

## ■ 【01-1-008】舟中聴大人弾琴

【解題】父の蘇洵そじゆんが船上で奏でる琴を聴いて詠んだ詩。表題にある「大人」は父を意味する。

## 【訳文】

川岸につないだ船の上、  
 父が奏でる琴の音に、襟を正して耳を傾ける。  
 夜が更けるにつれ、  
 我が心のうちが次第に高ぶってくる。  
 琴の音は、  
 松を吹く風、あるいは山にかかる滝、  
 清らかさを窮めるかと思えば、  
 宝ほうぎょく玉が当たるように、からころと愛すべき音を響かせもする。  
 遠い昔に生まれたつつましく雅みやびな音楽が、  
 いつしか快感を呼び起こす淫らな楽曲にとって代わられて、  
 太古の楽器の数々がすたれてしまった。  
 幾千年を経て琴だけが残り、  
 老いた仙人が世の興亡を聞しつついまも生きるかのようだ。  
 世間の人々は昔に返るのを好まず、  
 新しい曲を作っては、  
 琴に無理強いをして演奏してきたので、  
 本来のひそやかな音はことごとく崩されてしまった。  
 それでも非情の存在である琴はいまなおここにある。

古いにしへの人々の心はすでに遠く彼方おに墮ちてしまったのか。

川の上に広がる廣大無辺の空に月が昇り、

人々の暮らしが立てる音がすっかり途絶えた真夜中に至って、

父は太古の音楽をその当時さながらに奏でるのであった。

【補足】[ここでは、大意が見えやすいようにさらにと訳したが、原詩には幾つかの含意がある。その前提として、遠い昔に理想の世があり、政治制度も文物も完全なものが整っていたとする尚古主義しやうこがある。それは儒学を中核とする古い中国の伝統的価値観であった。理想の世のことをいまに伝える象徴的存在として、この詩では、古い琴と古い音楽が詠まれている。同時に、琴を演奏している父蘇洵そじゆんが「古いにしへの人々の心」[原詩では「古意」]を伝える人として詠まれている。蘇洵は後に見るように、独学で当時の学問の潮流の最前線に立った人で、最後の句に「太古の音楽をその当時さながらに奏でた」[原詩は「夜闌更請弾文王」[夜闌よるたけなわにして更に文王ぶんおうを弾だんじるを請こう]とあるのは、父こそが学問の正道を行く人であって、自分はその教えを直に受けているのだということを高らかに宣言するものである。なお、文王しゅうちやうは周朝を開いた人で、儒学が伝統的に尊んできた古代の理想の聖天子の一人である]

## ■ 【01-1-009】 泊南井口期任遵聖長官到晚不及見復来

【解題】南井口なんせいこうに船を泊め、父の知人にんしの任孜あざな [字は遵聖じゆんせい] と会おうとした。しかし、任孜は約束の場に現れなかった。日暮れにもう一度行ってみると、ようやく任孜がやってきた。

### 【訳文】

川のほとりに始まる一本の細い道。

深く草が茂ったその道は雨に煙っている。

山路の険しい道の先で貴君に別れを告げようとした。

貴君は現れなかった……。

そして、夕暮れ遅くにまた行ってみると、

貴君はやって来た。

貴君はひらりと馬から降り、

誰もがまだ口をきかないうちに、

長く抱いていた思いはすでに慰められた。

貴君は言う――

「どこまでも長い川、

どこまでも広い大地、

そのどこへ行くとも知れぬ身。

いついかなるときであつても、

あなた方と一緒にいられる、

というわけではないのです」

貴君はそのまま去って行った。

【補足】〔(1) 任孜は蘇軾と同じ眉州眉山県の人で、弟の任佖とともに科挙に合格して官職に就いていた。任孜、任佖は郷里の誉れとして「大任、小任」と呼ばれ、今後、蘇軾の詩文にしばしば登場する。(2) 旧中国の人々は本名〔諱〕の他に字があり、諱を直接呼ぶのは非礼とされ、字を用いた。それでこの詩の題も「任遵聖」と字で記されている。この自由訳では煩瑣になるのを避け、原則として諱を用いる。なお、諱や字の他に「号」もあり、これには自称も他称もある。さらに、国家に大きな貢献のあった者には死後に皇帝から特別に諡が贈られることもある。ちなみに、蘇

軾の諱は軾、字は子瞻<sup>し せん</sup>で、号は東坡<sup>とう ぽ</sup>を始めとして多数あり、諡は文忠<sup>ぶん ちゆう</sup>で、そのほかに、蘇翰林<sup>そ かんりん</sup>、蘇学士<sup>そ がくし</sup>、蘇密州<sup>そ みつしゆう</sup>、蘇徐州<sup>そ じょしゆう</sup>などその時の地位や任地による呼び方もある]

## ■【01-1-010】過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符云此山乃張道陵所寓二首

【解題】安樂山<sup>あんらくざん</sup>で詠んだ詩。安樂山にはかつて道教の教派の一つ五斗米道<sup>ご と べい どう</sup>の始祖である張道陵<sup>ちやう どう りやう</sup>が住んでいたことにちなみ、道教の寺院〔道観<sup>どう かん</sup>〕があった。詩題によると、安樂山に生える木には、葉の裏に文字のように見える模様があり、それは道士<sup>どう し</sup>〔道教の修行者〕が重んじる篆符<sup>てん ぶ</sup>〔天の意向を表わす符〕であるいわれていた。篆符が現れるのは張道陵の靈威がいまも残るからである。

### 【訳文】

#### 其の一

天師<sup>てん し</sup>と崇められた張道陵<sup>ちやう どう りやう</sup>は不老不死の仙人になったとか、  
ならば、いまどこかにいるのか。  
天師の刻んだありがたい玉印<sup>ぎよくいん</sup>が、  
それからずっと子孫に伝わってきているらしいが、  
肝心の不老不死の術は伝えられなかったのだらう、  
子孫はこれまで一人残らずみんな死を免れなかった。  
どうして山に満ちる秋の葉に、  
特別な神の力が宿っているといえるのか。

【補足】〔この詩では、安樂山<sup>あんらくざん</sup>の道観<sup>どう かん</sup>において、張道陵<sup>ちやう どう りやう</sup>が自ら刻んだとする玉印<sup>ぎよくいん</sup>なるものの印章を押した符を頂けば病気が治ると喧伝していることを冷ややかに詠んでい

る。蘇軾は道教にも仏教にも深く通じ、実践もしたのだが、道士や僧侶が摩訶不思議な霊力があるとして庶民をたぶらかすようなやり方は厳しく非難した]



## 其の二

天師[張道陵]だけが生死の境を抜けて、

この世界の外に出て行ったのなら、

それはそれで結構であろけれど、

なぜかよい評判を得ることにいまますこぶる熱心で、

ひと山に万本もある木の億兆もの葉の裏に、

せっせと文字を書き続けていなさるとは、

なんとご苦勞千万ではあるまいか。

【補足】[原詩の表現はこの訳文よりは穏やかである]

## ■ 【01-1-011】 渝州寄王道矩

【解題】渝州で王道矩に寄せた詩。王道矩は蘇軾と同郷の人であろうと推測されているだけで詳しいことはわっていない。この詩によると、かつて王道矩は渝州に住んでいたのだろう。

### 【訳文】

かねて聞いていたのは、

五月に渝州に行く時、

駅亭の 砌 の下を拍つようして水が流れると。

これまではただ夢の中だけで遠く渝州へと行き、

貴君<sup>とう</sup>と唐の歴史をあれやこれやと論じていたのだった。  
いま舟で貴君にゆかりのここに来てみると、  
季節はすでに改まっていて、  
あたりには霜が落ち、寒々しい川には波も立たない。  
冬の夜は長く、  
我が故郷へと帰る夢も結ばれぬままに、  
舟の上で時を告げる声を疎ましく聞いているのである。

■ 【01-1-012】 江上看山

【解題】 江<sup>かわ</sup>から山<sup>み</sup>を看て詠んだ詩。

【訳文】

船から見る山は、  
まるで馬が駆け行くかのようだ。  
前方から山が現れ出ると、  
がらがらと馬に変身して、  
足音も高らかに私のかたわらに向かって走ってくる。  
山は次々に出てきて、  
たちまち数百頭の馬群となって私の横を駆け抜ける。  
振り返り見ると、  
馬の群れはひしめき合いながら遠くへと走り去り、  
がらがらと山に戻って消える。  
いましもまた走り行く馬の背に、

見れば、一人の男がまたがっているではないか。

船の上の私は手を挙げ、

その人に向かって叫んだ。

すると、その声とともに私は飛んで山の上に至り、

船はその間にたちまち流れ去った。

うねうねと続く崖の小道に私は一人残され、

馬上にいた彼の人はというと、

船とともにいずこかに行ってしまった。

【訳文】 [終わりの数行は、原詩の言外の余韻を露わにしてみたものである]

## ■ 【01-1-013】 涪州得山胡

【解題】 涪州<sup>ふう</sup>で山胡<sup>さんこ</sup>【鸚鵡<sup>おうむ</sup>】を得て詠んだ詩。

【補足】 [この作品は、最初に弟の蘇轍<sup>そてつ</sup>が詩を詠み、蘇軾<sup>じいん</sup>がそれに次韻したもの。「次韻」とは、もとの詩と同じ韻を用いて詩を作ることで、この詩の場合は、弟の詩の2句目、4句目、6句目、8句目の末尾にそれぞれ置かれていた「茸」「重」「峰」「容」の韻をそのまま同じ場所に置いて詩を構成している。弟の詩は、籠に囚われの身となった鸚鵡<sup>おうむ</sup>を憐れむというごく普通の発想で詠んでいるのに対して、蘇軾はひとひねり加え、おやつと思わせるところがあり、兄弟の詩風と力量の違いが知れる。とはいえ、都に着くまでの間に詠まれた一連の詩は、蘇軾としてはまだ習作段階であったとされ、一般的なアンソロジーでは多くても2、3首が選ばれるだけである]

【訳文】

一日中、竹籠<sup>とご</sup>に鎖<sup>とご</sup>されていて、

こづべ　　みどり  
頭を回らせつつ翠の羽を惜んでいるかのようである。

かくかく  
その嘯と鳴く声に、

どのような深い思いがあるのだろうか。

おうむ  
いま鸚鵡は、

夜は霧の生じる浦辺に宿り、

朝は峰に日が上ると歌い出す。

そなた、もとの巢などはもはや恋するまでもない、

鷹や隼はこの竹籠には入ってこないのだから。

【補足】 [「もとの巢など恋するまでもない」 [原文は「故巢何足恋」 [故巢何んぞ恋するに足らん]] というところに、故郷を離れた蘇軾の思いが込められていると見ても大きな間違いではないだろう]

## ■ 【01-1-014】 留題仙都観

【解題】 ふう　　ちゅう　　へいとざん　　せんとかん  
船は涪州から忠州に入り、平都山にある道教の寺院、仙都観に立ち寄り、この詩を詠んだ。おうえん　　いんちようせい  
平都山には、王遠、陰長生の2人が仙人 [真人] になってここから天に昇ったという伝説があった。

### 【訳文】

山の前には川が広々と流れ、

山の上には木が高々と茂っている。

旅人は船を置いてそそくさと坂を登る。

路傍の秋の草が冬を迎えてたちまち枯れて行くように、

千年という歳月もそそくさと過ぎ去った。

そびえたつ仙都観せんとかんに至ると、  
 この頂いただきから、竜の曳く車、虎のかつぐ駕籠に乗って、  
 二人の真人しんじんが遙かな仙界に飛び去ったという。  
 真人はもはやこの世間を顧みることはなく、  
 人が生まれたり死んだりするのは、  
 せいぜい朝と夕の入れ替わりくらいにしか思っていないのだろう。  
 仙術を獲得しようとして、  
 米粒を断ち霞を食らう苦行に耐える人がいまもいる。  
 私が望むのは、  
 無も有もないという哲理を会得して、  
 風に乗り雲に乗り、  
 世を超越した境地に至ることだ。

## ■ 【01-1-015】仙都山鹿

【**解題**】仙都観せんとかんのある山にすむ鹿について詠んだ詩。同じときに父の蘇洵そじゆんも詩を詠み、それには次のような序文が添えられていた。「忠州ちゆうしゅうの豊都県ほうとに至り、仙都観に遊ぶと、県知事の李長官りに出会った。知事はこのように言った。『貴君がちょうど来られるとわかっておりました。この山にはひどく年老いた鹿がいます。猛獣も獵人も決してその鹿を害おうとはしません。客人の訪れがあるときには、前の夜にその鹿がきつと鳴きます。それで、鹿が鳴くと、いつもここで待ち受けるようにしているのですが、一度も誤りだったことはありません』。私はそれを聞いて不思議なことだと思ひ、この詩を作った」。その鹿はかつて仙人どうしになった道士と一緒暮らししていた白い鹿の子孫だという言い伝えもあった。

【訳文】

太陽と月があくせくと天空を走る下で、  
人は地上の塵の世にかちりとつながれている。  
仙人は跡形もなく飛び去り、  
山には鹿が遺された。  
鹿は霞の彼方に真人しんじんを追い求めて悲しみ、  
心が通じ合えそうな人がくると知ると、  
松を揺らす風とともにしきりに鳴くという。  
その鹿が夜の間に鳴いていたと聞いて、  
はたして私がそれに該当する人間なのか、  
鹿に尋ねてみたいと思っても、  
山は秋の草におおわれ、  
鹿の行方はどことも知れない。

【補足】〔(1) 季節は冬で、時に大雪が降ることもあり、この詩と同じころに、弟が雪を詩に詠んでいる。蘇軾はその詩に次韻しつつ、実験的な試みをした。当時の文学改革の指導者であった欧陽脩おうようしゅうは、かつて、雪を詩的に表現する常套句を一切使わないというルールを課して雪の詩を作ったことがあった。蘇軾は、そのルールに白を表現する語も使わないという制約も加えて作った。斬新な表現を求めるために敢えて手足を縛るようなことをしたのである。その詩は蘇軾の力量が並み並みならぬことを示すものであるのだろうが、内容的には我々の興味を引くようなものではないのでここでは割愛する。なお、欧陽脩は蘇軾父子にとっての最大の恩人で、都に着けば必ず会うことになるので、欧陽脩に見せる意図で蘇軾はその詩を作ったのだろう。(2) 同

じころにもう一つ実験的な詩を作っている。楚<sup>そ</sup>の地方に伝わる民謡に材を取って作られた『竹枝歌<sup>ちくしつか</sup>』という詩のジャンルがあり、蘇軾はまだ『竹枝歌』に歌われていない題材を集めて9章からなる詩を作った。これもまた蘇軾の力量を示す意欲作ではあるのだろうが、やはり内容的には我々の興味を引くようなものではないのでここでは割愛する]

## ■ 【01-1-016】 屈原塔

【**解題**】 屈原<sup>くつげん</sup>の塔を見て詠んだ詩。蘇軾自身の注で、「忠州<sup>ちゅう</sup>にはもとより屈原にちなむ塔などあるはずもない。それがここにあるのは、屈原のことを思う後の人の心によるものである。それでこの詩を作った」と、書き添えられている。屈原は蘇軾よりも1300年ほど昔の人で、当時の楚国<sup>そ</sup>の大臣として国のために尽くしたが、讒言によって遠くに流され、悲嘆の余り水に身を投じた。優れた文学作品も遺した節義ある人物で、蘇軾は一貫して見習うべき偉大な先人として極めて高く評価している。

### 【訳文】

楚<sup>そ</sup>の人々は屈原<sup>くつげん</sup>のことを悲しみ、  
その意は千年たってもやむことはない。  
屈原の魂はいまなおどこかをさまよっていると、  
心ある人々は泣き続け、  
屈原の魂が飢えぬようにと、  
五月五日には竹筒に飯を詰めて川に投げ入れている。  
屈原こそは古<sup>いにしえ</sup>の壮士で、  
死<sup>こころ</sup>に就いたときの意も甚だ壮烈であった。

屈原があくまでも楚王に忠義を尽くそうとしたことは、

世俗の人にはなかなか理解されない。

こちゆう忠州は旧くは楚の国に属したことがあるからなのか、

山の上に屈原を偲ぶ塔がある。

しかし、塔は仏教を奉ずる者が建てるものであって、

屈原のための塔であるとするのは根拠がないようではあるのだが、

屈原の事績が消えてしまうのを強く恐れての故なのだろう。

いにしえ古から死なない人はいないのであって、

短命であるか長寿であるかは問題ではない。

名声こそが無窮であって、

富貴などはしばしの熱狂でしかない。

屈原はこの理ことわりを知っていたから、

死んでまでも節義を守ったのであった。

## ■ 【01-1-017】 望夫台

【ちゆう解題】 忠州から南に数十里のところに望夫台ぼうふだいと呼ばれる岩があった。

### 【訳文】

川が曲がり、船が廻り行くと、

山の上に連なる岩の壁は、

屏風を折り曲げるように姿を変える。

中に一つ、とりわけ抜きん出た岩があって、

あたかも人が屹立しているかのようだ。

かつてここに一人の妻がいて、  
 旅に出たままの夫がいまに帰ってくるのではないかと、  
 山に立って川を見続けるうちに、  
 岩になってしまったという。  
 岩は千古の昔も、昨日も同じ形であるけれど、  
 船は来ては船は去り、いつまでもとどまることなく、  
 川は流れては川は去り、いつもまでもとどまることがない。  
 私たちは川に浮かぶ木の葉のように大海へと流れ下る。  
 ああ、できることなら、あの山にしばし残って、  
 月が昇るのを待ちたいものだ。  
 月光が岩に当たって、  
 気高い妻の姿を浮かび上がらせるのを見たいから——。

【補足】〔夫の帰りを待ち望む望夫台を仰ぎ見つつ、蘇軾は亡き母に想いを馳せたと想像してもたぶん間違いではないだろう。後に詳しく見るように、蘇軾の父はしばしば放浪の旅に出て、その間は母が2人の息子を教え導いた。その母は蘇軾兄弟が科挙に合格した直後に郷里で亡くなり、兄弟はそれから足掛け3年の喪に服した。その喪が明けたので、今回の旅に出たのである〕

## ■ 【01-1-018】巖顔碑

【解題】蘇軾は歴史好きで、しばしば歴史を論じ、歴史を詩に詠んだ。すでに屈原を詠んだ詩を見たが、これは後漢の末の巖顔を詠んだ詩。巖顔は、蜀の地を治める劉璋に仕えて巴郡を守っていた。そのころ、劉備〔三国志の英雄で、蜀国の皇帝になる〕は落ち着ける場所がなくて各地を転々としていたのだが、策略をもって劉璋から

蜀の地を奪い取ろうとした。劉璋はもとより人望がなく、劉璋に仕えていた者のほとんどがすんなり劉備に従ったのであるが、嚴顔だけは、「我が州には降將軍こうしょうぐん〔降伏する將軍〕はなく、ただ断頭將軍だんとうしょうぐん〔首を斬られる將軍〕がいるだけだ」と豪語して、劉備に従うことを拒絶した。そうした嚴顔の事績を称える碑が忠州にあったのを見て、蘇軾はこの詩を詠んだのである。

### 【訳文】

先主せんしゅ〔劉備のこと〕が劉璋りゅうしょうに反して戦争を仕掛けたのは、  
明確に不義であった。

〔劉備の軍師であった〕諸葛孔明は古の豪傑であるのに、  
どうしてこのようなことをしたのか。

劉璋はもとより凡庸な主であったから、  
ふた心を抱くまいとする者は誰もいなかった。

独り嚴顔げんがんだけが賢人であって、

刑具を前に置かれても笑って話をした。

国は亡び、もとの主君は囚われの身となり、  
嚴顔はいったい誰のために死のうとしたのか。

この岩に碑文を刻んだのは誰なのか。

それ見る我が眼からは涙がこぼれ落ちる。

吁嗟、断頭將軍よ、

その心意気は千年経っても人を悸かせるのだ。

【補足】〔三国時代の歴史を語る『三国志演義』などの書物は、劉備に正義があると  
して描くのがお定まりで、劉璋から蜀を奪うところでは、劉璋が暗愚であることを

もって劉備に正当性があるとしている。それでもモヤモヤとした感じが残るのは否めない。蘇軾のこの詩では「不義」であると断じている]

## ■【01-1-019】過木樞觀

【解題】<sup>ばん</sup> 万州<sup>ぶねい</sup>武寧<sup>ぼくれきさん</sup>県の木樞山にある<sup>ぼくれきかん</sup>道教の寺院の木樞觀の下を通過して詠んだ詩。

### 【訳文】

石の壁の高度は千尺、

細い道は遠く消え行き、

飛ぶ勢いの<sup>のき</sup>簷は剣を突き上げるかのよう、

柏<sup>はく</sup>[日本ていう<sup>かいわ</sup>柏とは異なる針葉樹]の古木が立ち並ぶありさまは仙界の都のよう。

そこは、<sup>しん</sup>晋の時代<sup>きよまい</sup>に許邁が<sup>きよまい</sup>高く飛び去ったところ。

いま悔いているのは、

我が行く舟をそこへと回らせなかったこと。

許邁<sup>いじん</sup>は異人から術を得て、

民に害を為す<sup>みづら</sup>蛟を斬って捨てた。

剣を<sup>ひさ</sup>掲げたそのときの<sup>いかめし</sup>崎嶇い姿を想像すべきである。

いまや棺が遺されているだけで、

許邁が修めた道術を崇める者はいない。

世から隠れることの意味も知らないままに、

許邁が仙人になったということにだけ感心している。

仙界は霧の彼方に遠く、

人間界にある我等は爪や髪がひたすら枯れて行くのをどうにもできない。

ひょうひょう

飄飄と夕陽に乗って去って行った許邁は、

俗界に遺した軀からだを顧みることはないのである。

【補足】 〔許邁きょまいはもとは地方の知事として民衆のための力を尽くし、後に「異人いじん」と出遇って道術を得て、山中に隠れた。蘇軾はそうした生き方を一つの理想として捉えていて、類似の人々をしばしば詩文で賞賛している。「異人」とは世間の規範とは何かしら異なる哲学に従って独自の生き方をしている人で、蘇軾は「異人」との交際を特に好んだ〕

## ■ 【01-1-020】 八陣磧

【解題】 夔州きにある八陣磧はちじんせきの遺跡を訪ねてこの詩を詠んだ。諸葛孔明しょかつこうめいは神のように戦術に長け、絶対に破れることのない最強の陣法である「八陣」を發明したとされる。諸葛孔明は河原に石を積んでその陣法を記録した「八陣図はちじんず」を作り、その遺構が八陣磧であると言い伝えられていた。

### 【訳文】

広い河原に、ごろごろと岩がころがっている。

あれとこれ、それとも、それとあれなのか、

ぼんやりと見えてくるものがある。

川に水がみなぎる季節がくると、

どの岩も流れの下に隠れてしまう。

しょかつこうめい

諸葛孔明は死んで久しく、

岩の並びを弁別することはもはや誰にもできない。

たとえ岩の並びがきちんと保たれていても、

諸葛孔明の神のような用兵をそれから会得できはしないだろう。

真に優れた人は自分で心に悟るのであって、

その要諦はかたちにして留めて置けるものではない。

後世の人々は何もわからぬままに自説を立てるだけだ。

かつて英雄が並び立って競い合ったとき、

わざわい  
禍が次から次へと長く続き、

民衆は戦にいくさ駆り出され、野に倒れ川に血を流し、

町からは人影が消え、炊事の煙が立たなくなった。

英雄が大勝負に出ると、

民衆の命は雪に湯を注ぐようにしてかき消されたのだった。

目の前の戦闘にひたすら追いまわれ、

遠く先を見通したはかりごとはどこにもなかった。

そこに諸葛孔明が現れ、群雄どもを一掃しようとした。

しよく  
蜀は小国であったから節制を旨とし、

困難に耐えに耐えてその日がくるのを待った。

諸葛孔明の志は立派だったが、

計画は壮大すぎて遠回りをし、

歳月は瞬間に流れ、

軍団が十分に整えられる前に、

英気は折れ、諸葛孔明は死んでしまった。

き 夔州の峡谷に八陣はちじんず図だけが残され、

千年にわたってその壮図が伝えられてきたのである。

【補足】〔(1) 諸葛孔明は蜀しよくの人々にとっては、何かにつけて語られることの多い

郷里の英雄であった。この詩で蘇軾が諸葛孔明に批判的であるように見えるのは、尊敬の念が極めて深いことの裏返しなのだろう。(2) この八陣図<sup>はちじんず</sup>について記した短文があり、それによると蘇軾は山の上からそれを見下ろし、石は百丈余りにわたって八列に並んでいたようである]

## ■ 【01-1-021】 諸葛塩井

【**解説**】八陣磧<sup>はちじんせき</sup>の近くに、塩を採るための井戸があり、諸葛塩井<sup>しょくわつえんせい</sup>と呼ばれていた。かつて漢<sup>かん</sup>の時代<sup>えんせい</sup>に、ここの塩井によって巨万の富を得た者がいた。この詩には、蘇軾自身の注で、「井は十四あり、山の下から山の上<sup>か</sup>にまである。そのうちの十三はいつもは空<sup>から</sup>で、盛夏<sup>かわ</sup>になって江に水が漲ると、いつもは江の水が及ばないところでも次第に井から水が出るようになる」と、書き添えられている。

### 【訳文】

五行<sup>ごぎょう</sup>の原理からして水は塩辛くなる。

江の水<sup>かわ</sup>であろうと井戸の水であろうとそれは変わらないはずだ。

しかし、塩井<sup>えんせい</sup>の水はどうして塩辛く、

江の水はどうしてそうではないのか。

人の心<sup>こころ</sup>というものはまことに満足させ難く、

物の理<sup>ことわり</sup>が人の欲をたくましくさせてしまうことがある。

いまも人々は利を得ることが少ないのを嫌うかのように、

塩井<sup>えんせい</sup>から汲み上げる繩に休むいとまはない。

【**補足**】[五行<sup>ごぎょう</sup>の原理とは、自然界を構成する木<sup>もく</sup>、火<sup>か</sup>、土<sup>ど</sup>、金<sup>ごん</sup>、水<sup>すい</sup>の五つ基本要素の相互作用によって諸現象を説明しようとするものである。その理論によると、我々に

は理解しがたい推論過程によって、水は自ずと塩辛くなると結論付けられる。蘇軾は当時としてはかなり合理的な思考をする方であったが、自然現象の説明原理としては旧来の素朴な自然哲学しか持ち合わせていなかったために、我々にとっては意味不明の不思議なことをしばしば口にする。蘇軾の言っていることを正確に捉えようと五行の原理を掘り下げてみたところでさほど得るものはないであろうから、この訳文は適当にごまかしている。五行の原理だけでなく、儒学、道学、仏教等についても同様のごまかしが今後多くなるので、それでは満足できないという方は、原文に当たっていただきたい]

## ■ 【01-1-022】 白帝廟

【解題】夔州きにある白帝廟はくていびじょうを訪れてこの詩を詠んだ。白帝廟はくていびじょうに祀られているのは公孫こうそん述じゆつで、前漢ぜんかんと後漢ごかんの間の混乱期こんらんきに活躍した群雄ぐんゆうの一人で、蜀しよくの地に拠って皇帝と号した。

### 【訳文】

北風に押されるようにして峡谷に入って来た。

憂いを帯びてどこに行くのか。

蒼い山あおの路を目指し、

白帝はくていの祠ほこらに詣でるのである。

荒れた城に秋の草が満ち、

古い樹から野の藤が垂れ下がっている。

ここから荊州けい [江陵府こうりょう]はまだ遙かに遠く、

蜀しよくから来た旅人は独り悲しみに沈む。

ぶらぶらとまわってこのあたりの風俗を問い、  
ここで繰り返された興亡を思っ涙をこぼす。  
公孫述こうそんじゆつが拠った地はいまそのままであるけれど、  
遺された民はもはや公孫述のことを知らない。  
公孫述は天子が出入するときの儀を具え、  
天子の旗を押し立てて、  
初めは天下を併呑する遠い計略があった。  
雄大な志はここ夔州きゆうしゅうのあたりだけに留まるものではなかったのである。  
とぼとぼこの野の廟に来て、  
当時を思い、黙って哀れを嘯みしめる。  
粗末こしきな甑で山の麦を蒸し、  
竹枝歌ちくし か [土地の民謡]をゆったりと唱える。  
公孫述こうそんじゆつに荊州けいしゅうを取ることを説いた荊邯けいかんは真の壮士であったが、  
天命を待つべきであると学者がくしやの呉柱ごちゆうに止められた。  
大計を失ってもはや公孫述の勢いは挫かれてしまったのだが、  
それでも、天命てんめいに拠る王道おうどうを採ろうとしたのは立派であった。  
だからこそいまなお廟がここにあり、  
その門にはくっきりと帝王の号が遺されているのである。

【補足】 [山地しやうくに囲まれた蜀しやくの地には、中央が乱れたときに、自立した地方政權が生まれることが多い。前漢ぜんかんと後漢ごかんの間の公孫述こうそんじゆつ、三国時代りゆうびの劉備りゆうび、五代十国時代おうの王氏もう、孟氏もうがその例である。蘇軾そしつは蜀の人であるから、そのような地方政權に肩入れする傾向があるようだ。公孫述は一般的には、地の利に頼って虚勢を張っただけの人物と見られているが、蘇軾そしつは、王道おうどう [倫理的に正しい政治] に拠ろうとしたとしてやや

肯定的に評価しようとしているかのようだ]

## ■ 【01-1-023】瀘瀘堆賦

【解題】船は長江最大の難所であり景勝地である三峡へと入って行く。白帝城から下流の200キロほどの間に、瞿塘峡、巫峡、西陵峡の三つの峡谷が連なることから三峡の名がある。瞿塘峡の入り口には、川を塞ぐようにして瀘瀘堆の巨石が立ちほだかり、蘇軾はそこで『瀘瀘堆の賦』を作った。「賦」は古くからある韻文の形式で、詩とは幾つかの違いがあるのだが、訳者の能力ではその差異を訳文で示すことはできない。序文が付いている。

### 【訳文】

序  
くとうきやう 瞿唐峡の口にあるえんよたい瀘瀘堆は天下で最も危険であるといわれている。ここで舟を覆した者は、その谷はこの巨石にあるときという。私は瀘瀘堆を見て、巨石はむしろ人にとって功績があるのではないかと考えた。しよくこう蜀江は百もの河川を合わせてき夔州に至り、水量は極めて大きく、水の勢いは極めて強い。大きな平野があれば、水は縦横に放たれるのだが、三峡の大きさは蜀江の十分の一もない。もしその勢いをあらかじめ挫いてくれるものがなかったならば、蜀江は遠くから速やかに奔り下って来た勢いのままに瞿塘峡の口に鋭く当たることになり、その危険の度合いはいまとは比べものにならないほどおそ畏るべきものになってしまうであろう。それでこの賦を作って、好事の者が試しに観てこのことについて考察してくれるのを待ちたいと思う。

天下において最もまこと信があるものといえば、きっと水であろう。

河川の大きさや海の深さは測ろうとすれば測れなくはないだろう。水は自分からは形を作らない

で、物に因って形を作る。だから、千変万化するそのありさまを計り知ることはできない。そこに必然こゝろの理がある。

水が奔騰して怒り狂うときには、万人といえどもそれに当たって進むことはできない。水を穏やかにさせ、言うことを聞かせることができるのは、ただ聖人だけである。

私は瞿唐峡の入り口に舟を泊め、灩澦けわしくごつごつ堆の岩が崔嵬けいとして見ると、峡谷が開けるすぐ近くにそれが存在するのは理由があることだと知った。

蜀江は遠く千里の彼方から来る間に、一度として何かに流れを阻まれたことがない。水はその意こころを驕おごらせ、くじることができないほどにふてぶてしくなっている。

峡谷の入り口に至ると、たちまち狭いところが迫って来て、万頃けい〔頃けいは面積の単位〕の水を一つの杯さかずきの口に入れなければならないようなことになる。

灩澦堆があることによって、水はその先に峡谷があるのをまだ知らないうちに、岩の下で轟音を響かせ、岩を震わせて、力の限り闘うことになる。まさに、一万騎の兵団が西からやって来て、突如として目の前に一つの城かきなわが現れ、鉤繩を懸け、車をぶつけて城壁の下で戦うようなものである。城は堅くてついに取ることができず、矢は尽き、剣は折れて、軍団はすごすご城の下をまわって東に去って行くのである。

このようにして滔滔汨汨とうとうべきべきとした大河の水も、安らかになって進んで峡谷へと入り、もはや敢えて怒るようなことはないのである。

ああ、物は、そもそも安らかなところから変化が生じ、また、危ういときには安らかなることを求めるのである。私のこの説を得て、推して考えるなら、自然界にはもとより道理が具わっているとわかるであろう。

【補足】〔この賦には、蘇軾のみならず宋の文人が理屈そを好んだことが如実に現れている。宋の文人は叙情にも叙景にも何かしら腑に落ちるような理屈を持ち込むと、言うべきことが言えたと満足するのだった〕

## ■ 【01-1-024】 入峽

【解題】 いよいよ瞿塘峽くとうきやうに入ってこの詩を詠んだ。

## 【訳文】

昔から三峡さんきやうの勝れた風光を想っていた。

今もそれをほしいままに見てとれるところにまできたのだ。

長江ちやうかうは蜀しよくと楚そを結び、

蜀の山から出てきた万本もの川がここで一本に束ねられ、

東南の楚の平地へと注ぎ込まれるのである。

北東からきた水は電光のようにすばやく走り、

西からきた水は藍に似た緑で、

その他のところからきた水はどれがどれだか見分けようもないけれど、

互いに勢いを競おうとここに集まってきたのである。

陸地に道らしきものがなくなって、

いよいよ深い峽谷のなかへと入る。

連なる山並みが一つの箱型の壁に変わり、

流れは、あるときは大きくゆるやかに巡り、

あるときはまっすぐに伸びて急流となり、

またあるときはぐっと縮んでどっと落ち込みもする。

風は呼吸をするように谷を行きかい、

あるいは雲の上へと吐き出され、あるいは下へと吸い込まれる。

迫りくる崖は、

垂れ下がる緑の蔓、懸命にしがみついた青い竹、ぽつんと生きる石楠花<sup>しゃくなげ</sup>、  
それらもとともに、大きな音を立てて倒れかかってくるかのようだ。  
滝となって落ちる水は吹雪のように宙を舞い、  
駆け下る馬のように岩が落ちかかる。  
不意に絶壁の高さが不揃いになると、  
忽然としてそのなかほどに子供の姿が現れ出る。  
岩にまわりついて人家の煙が流れ、  
山あいの小さな村の真下に船は着く。  
船をやっと繋げるだけの狭い岸边から、  
竹駕籠に乗ってその村へと登ってみる。  
このようなところにも人は住めるもので、  
粗末ながらも役所の建物がある。  
この地の名産という蜜柑を村の役人が勧めてくれるかたわらで、  
夕べの太鼓がドーンドーンと鳴らされる。  
村役はいささか誇らしげに、  
こころでは寿命を延ばす薬草がたくさん採れると教えてくれる。  
しかし、食に満ち足りて十分に長生きをしているような人は見当たらない。  
それでも、ここでは昔からのことがらがよく語り継がれていて、  
先人の苦勞を大切に偲んでいるようだ。  
家は板で屋根を葺いただけで瓦はなく、  
巖<sup>いわお</sup>を削り込んだごく狭い住まいもある。  
気候は冬も暖かであるというが、  
薪を伐るにはかなりの危険を冒さねばならないだろう。

米を作るような土地はほんのわずかしがなく、  
暮らしの厳しさは並大抵ではないようだ。  
土地の人が舟を操る腕前はさすがにみごとで、  
大波がどこで生じるのかすべてよくわきまえ、  
木の葉のような小さな舟でかるがると大河をさかのぼる。  
人々の矍鑠とした姿は見惚れるばかりだ。  
残念なことに、土地の言葉はよくわからないので、  
私などはここには住めそうになく、  
この地の奥深い趣きを味わうには至らないだろう。  
いまも一羽の鶺鴒が飛び上がり、  
大河の上の百尺の厚みのある靄を超え、  
その上へと出て行こうとしている。  
横に滑空する鶺鴒には、自ら心に得るものがあるように見え、  
遠く消え去る前に翻るのは、  
あえて楽しみを貪るまいとしているのだろうか。  
そして悠々と翼を振るって雲間に遊び、  
他の鳥のことなど気にもかけていないようだ。  
人の世は塵にまみれ、病んでいるのではあるまいか。  
そこであくせくすることに私は耐えられるだろうか。  
万物は自然の内に生きるよさを知っているのに、  
人は富貴の喜びを優先させてしまう。  
飛ぶ鳥の楽しみを見るがよい、  
高くあって心満たされているではないか。

## ■ 【01-1-025】 巫山

【解題】 船は巫峡ふきょうに入り、この詩を詠んだ。峡谷中の特に大きな山の連なりを大巫山だいふざんといい、十二のピークがあって、その下に神女廟しんじょびやうがある。

### 【訳文】

遡うしろむりとした瞿塘峡くとうきやうが尽きると、

崢嶸ふかくげわしい巫峡ふきょうが立ち上がる。

連なる峰は怪しさいっぱいで、

岩の色はあるいは青くあるいは緑で、

天の職人かみわざが神技を駆使して、

奇偉なものを作ってみせようとしたのだらう。

その勢いは際限なく深くにまで及び、

その意匠はいまも未完成であるのだらう。

見ていて一瞬も目を離すことができないままに、

一步また一步と奥に入っていく。

たちまち蒼い崖あおが迫ってきて、

絶壁の厳しさに震えあがってしまう。

仰ぎ見るのは八つないし九つの頂いただき、

そのすくとした姿は天地の氣きを凌ぐほどで、

その上の空は光も揺らぐような高さにある。

川の水は、峰の下を沸き立つ奔流となって下っていく。

まわりから抜きん出て、

畏れるものなどないかのように勇み立つ一つの峰がある。

そこにしんじょびょう神女廟があると聞いて、

川岸から攀じ登って行く。

岩に腰をおろすと、

ごうごうと音を立てて流れ下る大河の水が、

ようやくわが身から離れて、ほっとする。

廟を守る役人にあれこれ問いかける。

遥かに見上げるのがしんじょせき神女石で、

その美しい姿はまことにその名の通りで、

うつむき気味にまげ鬢を斜めにし、

日に染まる雲を衣としてまとっている。

人の心は物に随って変化するもので、

それを見ていると、

遠くからでも深いこころ意があそこにあると知れてくる。

土地の老人がにこにここと話してくれる——

「若いときにはよくあそこまで行ったものです。

猿と一緒に登って、

縄にすがって降りてくるのです」

石のたけのこ筍のような尖った峰があり、

そのごっついありさまは他に類がない。

世間の人は不思議なことを喜ぶもので、

子供らをびっくりさせるようなおかしなことを言いたがる。

楚の王がま巫山のふざん神女と契りを交わしたと『楚賦』は歌うけれど、

それは虚伝にすぎないのだろう。

川岸に連なる竹林のことを老人に問うと、

「それはいまもあります。

<sup>みどり</sup>  
翠の葉が下に垂れて、

ばさばさと鳳<sup>おおどり</sup>が尾を揮うかのようです。

風によって臥せたり仰いだりするの、

神に使われているかのようです。

絶頂には三つの碑がありまして、

折れ曲がった古い篆<sup>てんじ</sup>字なのでしょうか、

まったく読めないの、

見てはいましても、覚えておりません。

峰の背後にまわりますと、

石の上に黄楊子<sup>つひ</sup>が生えていまして、

堅く痩せた木で、しわしわの模様があって、

よく伐り採ったものです。

もっと奥を見てやろうと、

<sup>すが</sup>  
縋るようにして狭い谷へと降りたことがあります。

山が高くて虎も狼もこないようなところで、

深く入るとかえって平らになっていました。

岩穴に湧き出る泉があり、

甘く滑らかな水で、

手を洗い口を漱ぐと、

その冷たさが心臓や胃に染み入ります。

衣を洗って樹の梢に掛けておきます。

斧を磨いて石鼻山せきびざんに分け入ったこともあります。

あちこちめぐるうちに日が暮れてきますと、

そろそろ人里が恋しくなって、

帰ろうという気になります。

行かなくなってもう十年にもなりましょうか。

老い衰えて筋力が疲れてしまいました。

あのころに伐り残した木から芽ばえたのが、

もう臂ぐらいの太さになっておりましょ

老人が語るのを聞いて、

私はしきりに嘆息し

神仙の世界はもとより存在するのだろうと思もする。

難しいのは世俗の欲を忘れることだ。

貧賤は愛すべきものではない、

富貴などは履を脱ぐように棄て去らなければならない。

この老人だって、

もしも山の奥に入ったまま還ることがなかったならば、

たとえ食べるものなどなくても、

不死が得られたのだろう。

【補足】 [(1) 蘇軾は、興味深いことに、もう一つの異世界があると信じていたよ

うだ。そこへと接近しようとするのを、今後幾度が見ることになる。(2) 『神女

廟びょう』と題する詩がもう1首あるが、この詩で「虚伝」と断じた『楚賦そふ』をなぞるよう

な内容であるので割愛する]

■ 【01-1-026】 巫山廟上下数十里有烏鳶無数取食於行舟之上舟人神之故亦不敢害

【解題】 長い詩題は、「巫山ふざんの神女廟しんじょびやうの上下数十里の間は、烏や鳶が無数にいて、食べる物を行く舟の上から取っている。舟人はこれは神の使いであるとして、害うようなことはしない」。巫峡ふきやうの烏や鳶が行き交う舟から餌を得るありさまはなかなかの壮观であったようで、様々な詩文がそのことを伝えている。

【訳文】

烏や鳶が群れをなして飛び来ると、

旅行く人をひととき騒かし、

それから飛び去って行く。

食べ物が得られて憂うことがなく、

人にすっかり馴れている。

かわ江のほとりの飢えた鳥などがそうするのは怪しむまでもないが、

野の鷹までも頻々と来るのはどうしてなのだろうか。

【補足】 [終わりの部分は、気高くあるべき鷹までくるのは情けないというようなことであろう。「野の鷹」は何か諷するものがあるのだろうか]

■ 【01-1-027】 過巴東県不泊聞頗有萊公遺跡

【解題】 巫峡ふきやうを出ると歸州きの巴東県はとうで、船はそこに停泊することなく通過したのだが、巴東県らいこうには萊公の遺跡があると前々から聞いていたので、それを詩に詠んだ。萊公らいこうとは寇準こうじゆんのことで、蘇軾そくよりも70年余り先輩で、宋代そうだいの士大夫しだいふの手本として仰がれた。宋代の士大夫とは、科挙に合格して官僚になった人々、あるいは官僚にならな

くてもその志があった人々を指す。宋という時代の最大の特徴は、出自によらずに学問を修めてその実力によって政界に入った人々が社会の主役となったことで、士大夫はいかに生きるべきかということが宋代の始まりから実践的に模索され、寇準を経てはんちゆうえん范仲淹に至ってその規範的モデルが完成したと、同じ時代の人々からは見られていた。寇準の父は下級の役人で、寇準は19歳で科挙に合格し、最高位の宰相にまで昇り、国家存亡の危機を救う活躍をした。

### 【訳文】

若き日の寇準こうじゅんは不遇をかこち、  
 ひっそりとしたこの巴東はとうに赴任した。  
 山の中には、  
 寇準が植えた松がいまもあるという。  
 山と川の織り成す自然の厳しさが、  
 豪俊ごうしゅんの気を養きい育てるのだという。  
 だから、運命の定めとして、  
 英雄をまずは困難のうちに置くのである。  
 そのときの寇準は視察にきた知事殿を出迎えるために、  
 衣冠を整えて塵の中を走って風下に立った。  
 そのときの知事殿は誰であったか、  
 よもやこの人が三公さんこう〔国家の中樞を担う三役〕に昇ろうとは知る由もなかったのである。

【補足】〔中ほどの句「江山養豪俊」〔江山こうざんは豪俊ごうしゅんを養やしなう〕は、後の蘇軾の運命を暗示するかのようである。蘇軾は中央から追われるごとに、江山に養われようにして、より大きな人物となって行ったのである〕

## ■ 【01-1-028】 屈原廟賦

【解題】<sup>き</sup> 帰州にはかつて<sup>くつげん</sup> 屈原 [→作品番号 01-1-016] が住んでいたとされるところがあり、そこに<sup>くつげんびょう</sup> 屈原廟があつた。屈原廟は漢の時代に<sup>かん</sup> 創建され、現在は屈原記念館がある。蘇軾は屈原廟で賦を作つた。

### 【訳文】

小さな舟を浮かべて楚へ行き、

<sup>くつげん</sup> 屈原の遺跡の廟を過る。

<sup>ちやうこう</sup> 長江のまわりに重なる山々、

ここがまさしく屈原の故郷なのである。

かの昔、屈原は楚の都から放逐され、

<sup>かわ</sup> 江の波を渡って南へと遷り、

家を去ること何千里、

生きて帰るところもなく、

死んで葬られるところもなかった。

悲しいことに、

人にはもとより一つの死があり、

難しいのはいかに死ぬかである。

屈原はそのとき、

川のほとりを歩き、もう立ち去ろうとして行くことができないで、

千仞の深さの淵を覗き込み、

『<sup>かいさ</sup> 懐沙の賦』を作つて己の心を傷んだ。

そのとき屈原は何を思っていたのか、  
賦の終わりは悲しさを窮め、  
深く沈み込んで吟じたのだった——

「自分だって、気持ちも高らかに遠くに行けないことはない、  
自分だって、深く退いて口を閉ざして生きることだってできないことはない、  
君臣の間がますます疎くなってゆくのを、  
自分だけが悲しみ続けている、  
生きていてももう強く諫めることはできない、  
我が死によってあるいは発奮して行いを改めてくれるのかもしれない、  
国が転覆の危機にあるときに、  
命を惜しんでいつまでも生きているわけにはいかない、  
長江の神に託して自分に罪がないことを告げ、  
こゝが黄河の神に頼んで天帝に訴えようか、  
たとえ九つの天の門を通して天帝に会っても、  
この悲しみから救われはしないだろう、  
自分は美しい玉を抱き、清く香る蘭を携えている、  
それでも帰り行くところはなく、  
ただ独り水辺をさまよっているのだ」

長江をはさむ山は高く高く聳え、  
いまは屈原の旧い住まいはなく、  
旅人はここに哀しむ。  
屈原の子孫はいまどこにいるのか、  
高台にかつての迹を見るだけである。

屈原がここを去って千年、

世はますます狭く生きるのが難しくなっているではなからうか。

賢者はそし譏られるのを畏れて考えを改め、

世俗に従って変化して円満であろうとする。

乱れた世にも漫然と仕えて、

臣下として君主を補佐しているのだと言い張り、

屈原がその思いを託した玉のような賦を見ても、

屈原はあまり知恵がないとほざくのである。

屈原は言う――

「高い節義こそが最も大切なのだ。

他人と自分とは同じではない。

国と別れて世俗から去って死を顧みないのなら、

後世から非難されるのを免れるであろうか。

ああ、君子の道は完璧にはできない。

我が身を全うするために、

害されることから遠く離れるのは、

あつてしかるべきなのだろうか」

屈原だけが独り難いことをしたのだ。

屈原は最善ではなかったのかもしれないが、

まさしく賢者であったのだ。

私はなおも悲しむ、

屈原よ、安らかであれ。

## ■ 【01-1-029】 昭君村

【**解題**】<sup>き</sup> 帰州の<sup>きやうざん</sup> 興山県には<sup>しやうくんそん</sup> 昭君村があり、<sup>おうしやうくん</sup> 王昭君の故郷であるとされていた。王昭君は漢の時代の有名な女性で、昔から数々の詩に歌われてきた。もはや歌い尽くされてしまったようなテーマであったのだが、蘇軾は少しでも新味を出そうとしてこの詩を詠んだ。

【**補足**】<sup>おうしやうくん</sup> [王昭君は絶世の美女であったことから後宮に召された。しかし、皇帝の目に触れる機会がないままに容色の衰えてゆくのを嘆く日々を送ることを余儀なくされた。伝説によると、当時の後宮の女性は皇帝の寵愛を得るために、画師にたっぷり袖の下を与えて自分の肖像画を美しく描かせていたのだが、王昭君はそのようなことをしなかったために、画師は醜く描いたので皇帝から顧みられることがなかったのである。当時、漢の西方では異民族である<sup>きやうど</sup> 匈奴の力が非常に強く、朝廷は匈奴との融和を図るために匈奴の王と姻戚関係を結ぶことにした。後宮の女性から一人を選び、皇帝の養女として送り出そうということになり、最も醜く描かれていた王昭君が選ばれた。史実として、王昭君は遠く西方の地に送られ、匈奴の王の妻となってその地で没した]

【**訳文**】

<sup>おうしやうくん</sup> 王昭君はもとは楚の人、

その艶やかな容色は江の水を照らすほどであった。

楚の人々は敢えて王昭君を娶ろうとはしなかった。

<sup>かん</sup> 漢の皇帝の妃になるべき娘であると考えたからだ。

王昭君が故郷を去った日に、

誰が予想したであろうか、

万里の向こうの胡<sup>えびす</sup>の国で亡くなることになるとは。  
人々は語り合っていた、  
美しい女性を生むと家門を輝かすことになる。  
王昭君は後宮にいた当時は、  
容色が年々衰えてゆくのを憂っていた。  
古来、人の世のことはこのようであるのだらう、  
上と下、右と左、その入れ替わりは知りようがないのだ。

## ■ 【01-1-030】 新灘

【**解題**】 帰州<sup>き</sup>から下流は三峡<sup>さんきやう</sup>で最長の西陵峡<sup>せいりやうきやう</sup>で、そこを三十里ほど下ったところに、崖崩れによって落ちた多数の巨岩が流れを塞ぐ新灘<sup>しんだん</sup>があつて、航行の難所になっていた。そこで詠んだ詩。

### 【訳文】

小さな舟が山の裾を回りかけると、  
まだ見えてもないのに、  
早くも驚きに打ちのめされてしまう。  
白い波が川幅いっぱい湧き立ち、  
あたかも雪の城壁のようで、  
それが山の高さにまでせり上げられたかと思うと、  
たちまち深い谷底へと下り落ちるのだった。  
大きな魚はそこをさかのぼることができなくて、  
灘<sup>はやせ</sup>の下で腹びれをさらし、

小さな魚は散り散りになってさかのぼろうとして、

ジャバジャバ  
澆漚と鍋が沸騰するような音を立てる。

鵜は水に入ろうなどとはしないで、

翼も軽やかに飛んで通過し、

白い鷺は己の敏捷さを誇るかのように、

身体を傾けながら脚を流れに突っ込んでいる。

舟の上の人などはいかにもちっぽけで、

その腕前はとてもあてにはできないからと、

灘のほとりにある神様の廟に、

とにかく酒を供えて無事を祈るのである。

## ■【01-1-031】新灘阻風

【解題】 やつとの思いで新灘しんなんを通過したのもの束の間、今度は強い風によって進めなくなってしまった。

### 【訳文】

北からの風がこの寒い江かわを吹き抜けて行く。

それは二つの山の口からやってきた。

始めは扇であおぐくらいの風だった。

だんだんと河原の上を、砂を飛ばして走るようになった。

雲が飛んできて峡谷を塞ぎ、

雪が船の窓を打つまでになった。

とうとう新灘しんなんの下で三日も留まることになり、

土地の老人たちともすっかり仲良くなった。

ぎしぎしと船体がぎしる音に大いに悩まされ、

ともつな  
纜を短くして何度も繋ぎ止め直した。

昔から、悪い天気も明け方までというのに、

ここではいつまでたってもおさまらなかった。

これは、ここを司る神様が遠来の客を大いに歓迎しようと、

長く引き止めるための有難すぎる厚意だったのだろう。

幸いにも我等は無事でいられて、

戸を閉ざして酒を飲んで過ごしたのだった。

## ■ 【01-1-032】 黄牛廟

【解題】 しんだん新灘から八十里、高く切り立った崖の下に、刀を負った人が牛を牽く姿に見える岩があり、そこに こうぎゅう黄牛の神を祀る廟があった。

### 【訳文】

かわ江べりの石の壁、

高くて路がないのに、上に こうぎゅうびやう黄牛廟がある。

牛といっても箱を牽く労役に服すことはない。

廟の前で旅人は拝み、そして舞う。

太鼓を撃ち、ふえ簫を吹き、白い羊を屠って捧げる。

山の下で人に使われている牛は、

石ころだらけの土地を耕さなければならない。

両方の角を崖で磨き、四つの蹄を水に濡らすような苦勞をしても、

青い芻まぐさを半束しかもらえない。

いつも飢えに苦しみながら、

黄牛が安穩としているのを仰ぎ見ているのである。

## ■【01-1-033】蝦蟇培

【解題】崖の下には奇怪な形状の岩が数多くあり、蝦蟇がまそっくりで、蝦蟇培がまはい [あるいは蝦蟇背] と呼ばれるものがあつた。その背後の洞穴から水が流れ出ていて、蝦蟇の背中を通して鼻のあたりから落ち、川に注がれていた。

### 【訳文】

蝦蟇がまの背は盃はちを伏せたかのよう、

蝦蟇あごの頤ゆみはりづきは偃月のようである。

これは月にすんでいた蝦蟇で、

口から月の液を吐くのたという。

蝦蟇の由来ははなはだ遠く、

あるとき、百尺の高さの蒼あおい崖が裂かれ、

山を破って竜が飛び出し、

それとともに水が流れ出るようになったのである。

水は江かわに入ると、

江の水は濁っているのに、

なおも深い碧色を保っている。

この水は極めて潔清な性質を受け、

そこらの平凡な水とは大きな隔りがある。

茶を煮るのに好<sup>よ</sup>いだけでなく、  
酒を醸<sup>かも</sup>しても敵<sup>かな</sup>うものはきつくないのである。

## ■ 【01-1-034】 出峽

【解題】 長い三峽<sup>さんきやう</sup>をついに通り抜け、この詩を詠んだ。

### 【訳文】

峽谷に入ったときは、峻<sup>けわし</sup>い巖<sup>いわお</sup>を喜んだ。  
峽谷を出るときには、曠<sup>ひろ</sup>く平らであるのが恋しくてならなかった。  
もはや我が心は圧迫されることがなく、  
何を見ても淡く安らかで暢<sup>のびやか</sup>である。  
西から東へ千里<sup>みち</sup>の径、  
風光の勝れたところをしばしば訪ね、  
よいところを見るためなら、  
どれほど遠かろうが厭うことなく、  
どれほど高かろうとも人々の先頭に立って上った。  
先の詩には詠み残しがあり、  
いま記しておかなかったならば、  
時が経つうちにきっと忘れてしまふであろう。  
まず思い出すのは、神女廟<sup>しんじょびやう</sup>からの帰り、  
道の中ほどで冷たい水が泉から溢れ出していたこと。  
汲<sup>まこと</sup>んで帰ると真に愛すべき水で、  
翠碧<sup>あおみどり</sup>の光が器に満ちたのだった。

いきなり驚かされたのは巫峡の終わりだ、  
巖の腹を穿つ空洞があって、  
蒼い空を仰ぎ見るように、  
南向きに石の部屋が開いていた。  
それは古い孔子廟だとか、  
木々が幃帳のように取り巻き、  
鉄の手すりが中空にあって、  
上から見下ろすと計り知れないほどの高さがあった。  
下では常に油断のならない波が打ち付けているのに、  
いったい誰がそれを作ったのだろうか。  
岩穴には天の星座がかたどられ、  
瓦の棺が残っていたのは、古代に葬られたものだったのか。  
新灘では風雪に阻まれ、  
杖を携えてあたりの村を尋ねた。  
竜馬溪にも行って見たが、  
茅のぼろ屋で村酒を売っていた。  
悔いが残るのは玉虚洞に至らなかったこと、  
ひどく遠いと舟人にたまされたのだ。  
非常に奇怪な石があると聞いて、  
夢の中でそのありさまを見た。  
峡谷と山々は奇偉に富み、  
私は一を得ただけで、  
喪なったものがどれほどあったのかわからない。

残念なことに名を知らなかったために、  
ただ姿を想い見るだけにとどまってしまうものも多い。  
今朝はついに重なる危険から脱し、  
見渡す限り楚の水が広くゆったりと流れている。  
ここは魚が多く、料理は旅人を満足させてくれるだろう。  
風は順調で、旅心はますます盛んである。  
思い出しつつまたまた作ったこの詩篇を、  
三峡を舟で行く人が唱えたりしてくれるだろうか。

### ■ 【01-1-035】 遊三游洞

【きょう 峡州のさんゆうどう 三游洞に遊んでこの詩を詠んだ。唐の時代とうに白居易はくきょい [白樂天]はくらくてん] が友人  
とともに3人で遊んでそれぞれ詩を詠んだことにちなんで三游洞の名がある。蘇軾も  
また父と弟と3人でそこを訪ねた。

#### 【訳文】

凍てつく雨が、  
いつしか霏霏と舞い出して、半ばが雪となった。  
ここに遊ぶ者の履までも凍ってしまい、  
苔は滑りやすい。  
夜具を被って巖いわの底に眠るのを嫌がるわけではないけれど、  
洞穴の口は深い雲に閉ざされ、  
しかも、今夜は月が出ないのだから、  
いまのうちに引き返すしかないのである。

【訳文】 [この詩を詠んだ経緯や、「巖いわおの底に眠る」ことの意味は、次の詩から知れるであろう]

■ 【01-1-036】 遊洞之日有亭吏乞詩既為留三絶句於洞之石壁明日至峽州吏又至意若未足乃復以此詩授之。

【解題】 三游洞さんゆうどうに遊んだ翌日に二十里ほど下った峽州きょうしゅうの町についてこの詩を詠んだ。詩題は以下の通り。「三游洞に遊んだ日、同行してくれたその地の役人から、詩を詠むよう請われた。それで父や弟とともに三首の絶句を作って洞の石壁に書き留めた。翌日に峽州の町に着くと、その役人も来て、何か物足りない様子であったので、この詩を作って授けた」。同行した人の名は伝わらないが、地方の行政長官レベルの人であったのだろう。父子3人の訪問は三游洞の名にぴったりであったから、その人は特に詩を求めたのだろう。ただ、そのときの詩はいかにも即興の作であったから、役人は再度の詩を望んだのだった。というよりも、蘇軾自身が不満足であったので、自ら進んで作ったのかもしれない。白居易はくきょいのもの詩は20韻 [40句] の長い詩で、わずか4句の絶句ではまるで釣り合わないので、新たに12韻 [24句] の詩を作った。

### 【訳文】

一本の径が山の翠みどりを繞めぐって、

縈うやうや紆うと蛇のように進んで行く。

溪の水が急であることに、はっと驚かされ、

つるつる滑る石段を、蔓よにすがって攀よじ登り、

古い筏を踏むようにして、中空の橋を渡る。

洞穴の口がぽっかりと開いているのを、代わる代わる覗き込む。

北からの風を迎え入れるかのように三つの扉があり、  
もう一つ、西に向かった斜めの穴がある。

雲に籠められたここでは、

どれほどの歳月が流れ去ったのか。

<sup>どう</sup>唐の時代の人々が到るよりも昔に、

古くここに住む人がいたという。

洞穴の中には風も雪も入らないので暖かく、

山の奥深くには鹿や<sup>ぶた</sup>獬がたくさんいて、

草を衣にし、ざんばら髪を束ねただけの人だったという。

竈の跡が岩壁に黒く残り、

窪んだ石は盃に使われたものだとか。

あまりに遠い昔のことなので記録はないが、

想像するに、伏羲や女媧[伝説の太古の帝王]のころなのだろうか。

もはや残るものもないこの遺跡で私は独り嘆息する。

山の翁が強く句を留めるように勧めたので、

強いて<sup>こたごた</sup>槎牙と写したまでである。

【補足】〔(1) この洞窟には石器時代の遺跡があったのだろうか。中国の太古の神話時代の伝承にはいろいろなものがあるが、一説では、伏羲、<sup>ふくぎ</sup>神農、<sup>しんのう</sup>神農、<sup>こうてい</sup>黄帝の「<sup>さんこう</sup>三皇」が最初の帝王であったという。伏羲と女媧は兄妹で、大洪水によって2人だけが生き延び、そこから人類が生じたという伝説もある。(2) 地名の表記について若干の補足をしておこう。宋代の地方行政は「<sup>そう</sup>州<sup>しゅうけん</sup>県制」で、全土は300ほどの州に分割され、その下に複数の県が属した。首都など重要な地には州と同レベルの<sup>ふ</sup>府が置かれ、地域によっては州と同レベルで<sup>かん</sup>監、<sup>ぐん</sup>軍という単位が置かれることもあった〔例えば、<sup>けいもん</sup>荊門軍

と書いてあれば、それは行政区の名称であって、そういう名の軍団があったわけではない。またいくつかの州をまとめた路ろという単位もある。州を統治するための役所は、その州で最も繁華な町におかれるのが普通であるが、その町は必ずしも単一の県だったわけではなく、分割されて複数の県きょうに属していることもあった。一般的に「峡州」といった場合に、その州全体を指すこともあれば、州の中心地を指すこともある。州の中心地を明確に示すために州庁の置かれている県名を用いることもある。また、文学作品においては、しばしば古い時代の地名を用いることもある〔東京を江戸というようなもの〕。いずれにしても、この「自由訳」ではおおざっぱな書き方をするに留める。(3) 大都市には、路、州、県の役所が近接した場所に置かれ、それぞれの役人は相互に協力し、かつ監視し合う関係にあった。唐代の後半から節度使せつどしという地方官に権限を集中させたことが五代十国時代の分裂期を生み出す大きな要因になったとの反省から、宋代は特定の個人に権限が集中しないよう官僚制度を複雑化した。そのために我々には非常にわかりにくい。路、州、県のトップや役職にはそれぞれ固有の名称があるが、この「自由訳」ではトップは長官ないし知事とし、それ以下の役職名にはあまり触れないようにする。地方行政の長官や幹部クラスの人々は、ほとんどが科挙に合格して中央から派遣された高級官僚で、おおむね3年で次の任地に移った。科挙の合格者は必ず詩を作る技量をもっていたので、交遊の道具として詩を活用した。これから見て行くように、蘇軾は様々な行政レベルとの人々と詩を交えた交流をするようになる。まれに詩を苦手として蘇軾との詩の贈答を避ける人もいた。そのような人のために、蘇軾は親切にも代作を買って出て自分の詩に自分が応えるということもしている]

## ■ 【01-1-037】 寄題清溪寺

【**解題**】<sup>きょう</sup> 峽州の清溪寺で詠んだ詩。蘇軾自身の注記によると、ここには、<sup>きこくし</sup> 鬼谷子〔鬼谷先生〕が昔住んでいたといわれていた。鬼谷子は、蘇軾よりも1300年ほど昔に活躍した謀略家の<sup>そしん</sup> 蘇秦、<sup>ちやうぎ</sup> 張儀の師匠だったされる人物。2人は弁舌でもって当時の国際情勢を動かしたのだが、その成果は実際にはごく表面的で短期的なものでしかなかった。

### 【訳文】

弁舌<sup>たの</sup>は恃むに足るものでは決してない。

韓非子<sup>かんびし</sup>は弁論の難しさを説き、弁論の不首尾で死んだ。

鬼谷先生は自分では用いようとしなかった弁論術を弟子に授けたのだから、まことにいかさまな人間であった。

鬼谷先生が遺したという書物がいまに伝わっているが、読むまでもないちっぽけなことが書いてあるだけだ。

弟子の<sup>そしん</sup> 蘇秦や<sup>ちやうぎ</sup> 張儀は、

見かけが新しいだけの学問を振りかざし、

目先の利だけを見て、後の<sup>わざら</sup> 患いを知らなかった。

当時はまともな見識を具えた諸侯がいなかったから、

蘇秦や張儀が馬鹿騒ぎをしでかしたのだった。

二人の策略がすぐに破れて、終わりをよくなかったのは当然で、

それはもとより鬼谷先生がそのようにさせたのである。

これでよくわかっただろう——

巧みを窮めるのは、

愚のままに安らかであるのには及ばないのである。

もしこの寺に鬼谷先生の神霊が残っているのなら、  
私がいふことに大きくなずくであろう。

【補足】[先走り過ぎる補足を一つ記しておく。第一句の「口舌安足恃」[口舌は安んぞ恃むに足らん]は、「口先だけでは何も生まない」というごく一般的な言説であるのだけれども、後に蘇軾および宋代の高級官僚集団がたどった運命を暗示していると読めなくもない。科挙に合格した人々は超難関を突破したエリートで、豊かな知識を具え、己の才能に強い自負があった。自身の見識を誇り、信念をもって自説を貫き通そうとし、もしも反論されたなら、該博な知識を背景に徹底的に抗弁した。「口舌の巧みさ」を競い合い、往々にして「ああ言えばこう言う」の泥試合となって、ついには決着を付けるために政治力をもって争い、絶え間ない政争に突入した。その兆候は蘇軾の一代前から現れていたが、蘇軾の時代に顕著となり、蘇軾の次の世代に至って、この詩の後半にあるように、「策略がすぐに破れて、終わりをよくしなかったのは当然」[原文は「死敗無足怪」[死敗 怪しむに足る無し]] となって、ついには争い合う人々が丸ごと国を亡ぼすまでに至ってしまうのである]

## ■ 【01-1-038】留題峽州甘泉寺

【解題】峽州の甘泉寺で詠んだ詩。蘇軾自身の注で、ここには姜詩の住まいがあったと記されている。姜詩は後漢の時代の人で、その妻は孝女として名高かった。その事績は現代の我々の感覚からすると荒唐無稽としかいいようがないのだけれど、蘇軾は何度か詩文に引用している。あらましを記しておく。姜詩の母はある泉の水を特に好み、妻は毎日数里の道を歩いて汲み行った。また母は鯉の刺身を好み、夫婦は日々苦勞して鯉を獲っていた。ある日、妻は水を汲みに行き、風に阻まれ刻限までに返ることができなかった。喉が渴いた母は怒り、姜詩に迫って離縁させた。妻は隣家

に留まり、糸を紡いで市場で売って母の好む物を買ひ、隣家の女性がそれを届けた。それが何度も続いたので、母が隣家の女性に尋ねて実情が知れ、母は心を動かしてまた家に呼び戻した。すると家のかたわらに泉が湧き出し、その水は母の好む水の味と少しも変わらず、また、泉からは毎日鯉が飛び出したので、夫婦は十分に孝行を続けることができた。

【訳文】

小さな舟<sup>かわ</sup>で江を横切り、

ここで古<sup>いにしえ</sup>の純孝<sup>あと</sup>の迹を弔う。

透迤<sup>うらうね</sup>と遠く道を尋ね、

婉變<sup>わがひつひか</sup>った女性の面影を偲ぶ。

清らかな泉はすでに涸れ尽き、

石の囲いがあるだけで汲むことはできない。

古<sup>いにしえ</sup>の人は飄<sup>ふっ</sup>とどこかへと行ってしまい、

いまは風に吹かれて竹が騒がしく鳴るだけ。

ぶらぶらと村を歩くと、

どこの家にも漁網が懸けてある。

人々の暮らし向きはまことに穏やかで、

夜に戸を開けたままでも盗人に入られることがない。

林には筍が多く、野に虎はいない。

ここにこの楽郷<sup>らくきょう</sup>があるのは、

きつ<sup>きょう</sup>と姜先生の教えによるのであろう。

【解題】〔姜詩とその妻を称えるこの詩を詠んで、蘇軾の女性観は死ぬほど古臭いと

がっかりするのは早合点すぎるだろう。儒学の伝統を受け継ぐ一人として蘇軾も厳格な道德律を唱えもするのだが、実際にはかなり柔軟で、より普遍的な人道主義に立った考え方をしていたことを、後に見るであろう]

## ■【01-1-039】夷陵県欧陽永叔至喜堂

【**解題**】<sup>きやう</sup>峡州の<sup>いりやう</sup>夷陵県には<sup>おうやうしゆう</sup>欧陽脩<sup>あざな</sup>〔字は永叔〕<sup>えいしゆく</sup>にちなむ<sup>しききどう</sup>至喜堂があり、そこでこの詩を詠んだ。恐らく必ずここを訪ねようと、旅の初めから蘇軾は考えていたはずで、その念願が叶って詩を詠んだことで、旅の前半の目的はほぼ達成されたのだった。欧陽脩は、すでに記したように、蘇軾父子にとって大恩人で、すべての面において蘇軾が手本と仰ぐ人物であった。欧陽脩は蘇軾よりも29年先輩、4歳で父を喪い、母から字を教わって学問に励み、24歳で科挙に合格し、将来を嘱望されて早くから中央政界で活躍した。しかし、保守派の大物を公然と批判した<sup>はんちゆうえん</sup>范仲淹が朝廷から追われると、部外者であったにもかかわらず欧陽脩は猛然と范仲淹を弁護したために、それは越権行為であるとして弾劾され、夷陵県に流された。それは欧陽脩が30歳のときだった。欧陽脩はその後も信念を貫き続け、中央と地方を行き来した。また、華美で技巧的な文章を喜ぶ風潮に抗い、内容重視の簡明な文章をよしとする文学改革の旗手となった。手本を唐代の<sup>とうだい</sup>韓愈<sup>かんゆ</sup>に仰ぎ、古文復興運動として後の宋代の文学の方向性を決定付けた。蘇軾の父の<sup>そじゆん</sup>蘇洵は、後に見るように独自の歩みで欧陽脩と同じ文学観に至り、欧陽脩に絶賛されたのだった。

### 【訳文】

<sup>いりやう</sup>夷陵は<sup>ちやうこう</sup>長江の中流域の小さな町である。

しかし、<sup>さんきやう</sup>三峡を出て東に<sup>けい</sup>荊や<sup>ご</sup>呉の地が控えていることから、

戦略的に重要な場所とされた。

平和な時代になると、

この優れた地勢も用いられなくなり、

ここで英雄が活躍することは長らくなかった。

そこにひょんなことから、

文学上の勇者が遠く都から流されてきて、

このあたりを歩いては詩を詠み文章を書いたので、

一躍、夷陵の名がまた高められた。

その人がここを去ってから幾年もが経ち、

その人が住んでいた至喜堂しきどうがややもすると傾いてしまうのを、

土地の人は毎年きちんきちんと修繕している。

そしていま当時のことを思って、

その人を流した宰相りょういかんの呂夷簡をなおも咎め、

その人のために朱慶基しゅけいきが至喜堂を建てたことに改めて感心するのである。

その人がかつて植えた橘は霜にあたって枯れたけれど、

その人がかつて植えた楠は大きく立派になっている。

三遊洞さんゆうどうにはその人が詠んだ詩が残され、

夷陵の絵図にはその人が題を記した墨蹟がある。

土地の人は私たちに尋ねる。

「うちの長官様はもう髪がまっしろでありますなあ」

「ええ、ええ、その通りですとも。」

何しろ自分の楽しみなど少しもなしに、

国のために年から年中頭を悩ませて文章を作っておられるのですから」

——というわけで、土地に人に代わって、  
先生に遠く言葉を寄せようと思う。

「たまにはゆったりなさって、

お酒でも召しあがるのがよろしいではありませんか」

【補足】〔(1) この詩には蘇軾自身の注で、「当時の朱慶基知事が歐陽脩のために至喜堂を建てた」と記されている。欧陽脩を夷陵県に流したのは、詩中にあるように宰相の呂夷簡で、長く政権の中樞にいた保守派の大ボスで、その人に睨まれて流されてきた欧陽脩のために住まいを建てるというのは勇氣ある行為であった。(2) この詩の終わりの部分は「楽屋落ち」で、欧陽脩が若い頃から白髪が多かったことは、よく知られる事実であった。大恩人でありながら笑いを誘うような結びを置いたのは、欧陽脩は度量が大きく、こうしたユーモアを喜ぶとわかっていたからである。実は、この詩だけでなくここまで見てきた詩も、欧陽脩を中心とする都の人々に見せる意図で作られたものであった。そのことは次に見る『南行前集の叙』で明らかである。(3) 欧陽脩が至喜堂について記した文章があるので、参考のために読んでおこう]

### 【訳文】

欧陽脩：『夷陵県至喜堂記』

峡州の夷陵県は大河のほとりの町で、山椒、漆、紙など売ることのできる産物があることはあっても、民俗はひどく質素で田舎じみでいて、常に自らの産物だけで足りて、四方から物を得ようとすることがない。商人が売るのは、せいぜい土地の者の食べる魚や貝くらいで、れっきとした大商人がここに商いに来たりはしない。まことに辺鄙な貧しい町であるから、夷陵は県のなかでも下に見られ、峡州も州のなかでは下に見られている。

町に城郭のようなものはなく、馬車が通れるだけの幅の広い道もない。市場があっても様々な品

物が陳列されているわけではなく、魚が売られているところは臭くてもとても入れない。州知事が市場の視察にやって来ると、馬車から地面に降りて立ち、魚や貝の半分腐ったような臭いに鼻をおおいながら、自分で歩かなければならない。

民の住まいは竈かまどや倉や井戸を別々に配置することもなく、一部屋の中に人も家畜も一緒に住んでいる。しかも家屋を覆うのは茅や竹であるために、毎年のように火災が生じる。しかし、人々は鬼神しん【土俗的な信仰対象】を信じていて、瓦の家を作るとよくないことがあると言い伝えている。

夷陵えいりやうは楚の地の西の境で、昔の史書の『春秋』では(夷陵の東の)荊州けいしゅうであっても夷狄いでき【漢人以外の諸民族】の地とされていて、詩を詠む人は「蛮荊ばんけいと呼んでいた。だから、田舎じみた風俗は古からのこのようであったのだろうか。

景祐二年[1035年]、尚書駕部員外郎の朱慶基しゆけいきはこの州知事となると、すぐに樹木を植え、土を盛って城壁を増築し、南北の街路に石を敷き、市場に門を作り、街の区画を整備した。民に瓦で家を作ること、竈と物の置き場を別々にすることを教え、土地の風俗を変えようとした。また、夷陵りやうこうえいの人の劉光裔に命じてその県を治めさせ、庁舎を整備させた。景祐三年の夏に県の仕事は完了した。

私は罪を得てこの地にきてみると、朱公とは旧くからの知り合いであったことから、罪によってここに来たことを哀れみ、県の役所にまで様子を見にきてくれた。そして、庁舎の東側の地を選び、ここならば清潔で明るく、ここで日々を過ごせば心が休まるだろうと、堂を作ってくれた。堂が完成すると、朱公は人々と連れ立って落成祝いをしてくれた。

そもそも罪人は土地柄の悪いところに棄て、ひどいところに住ませ、憔悴させ、憂いに沈ませ、自らを悔い、自らを咎めるようにさせるべきである。ところが、私は朱公のおかげで、よい場所を得て、安楽に過ごし、罪を犯した憂いなどはすっかり忘れてしまった。流された主旨とはまったく異なることになったのである。

夷陵は僻遠の地で、陸路を使うと、荊門けいもん、襄陽じやうようを経由して、都まで二十八駅ある。水路を使うと、

ちゆうこう わいが べんが  
 長江を下り、淮河、汴河を結ぶ運河を通して都の東の水門まで五千五百九十里ある。だから、官吏となった者は遠くこのようなところには赴任したからない。一度赴任すると任期が満ちても代わりの後任がこないで、仕方なく官職を棄てて去るということもある。

しかしながら、夷陵の風俗は実は純朴で、盗人はいないし、争いごともないということは知られていない。米と魚は食べるに困らないだけあるし、橘、柚子、茶、筍といった四季の味も揃っている。その上、川も山も美しい。住まいがきちんと整っていさえすれば、ここを愛さずにはいられなくなる。これはただ罪人が憂いを忘れるだけではなくて、官吏たる者はここにきて楽しまないということは決してないはずなのである。だから、ここにすでに至るならばきっと喜びがあるのである。これが「至喜堂」の名の由来で、私は『至喜堂の記』を記して、その壁に掲げるものである。

土地柄や民の暮らしが卑くても、その風俗を変えて善くすることができるということを記して、後にここに来る者の考察に供するものである。

【補足】 [この訳文からでも、欧陽脩のおよその文学観、人生観を知ることが可能であろう。物事を具体的に淡々と記し、自身の思うところを簡潔に明瞭に述べている。中央から遠く流されたことを悲観して哀れっぽく嘆くような言辞は吐かず、逆にとどのような場所に置かれても喜びがあると力強く宣言している。後に見る蘇軾の文章とよく似ていて、より軽快であるのが特徴といってよいだろう]

## ■ 【01-1-040】南行前集叙

【解題】蘇軾は12月の初めごろに江陵府〔荊州〕に到着し、そこで船を降りてしばらく滞在した。旅の間に詠んだ父子3人の詩を集めて『南行集』と題する詩集を編み、この序文を書いた。後に、旅の後半の詩を編集して『南行後集』としたので、この序文は「南行前集叙」と呼ばれるようになった。

## 【訳文】

昔の詩文を作った人たちは、作るのがもともとから上手だったから、巧みな詩文ができあがったのではない。作らずにはいられなかったから巧みな詩文になったのである。

山や川には雲や霧がある。草や木には花や実がある。ふつ、ふつと何かしら内側に充満するものがある、それが外に現われ出たのが、雲や霧、花や実であって、雲や霧、花や実が存在しないままでいようとしても、それはできないのである。

私は若いころから家君<sup>か・くん</sup>[父]が文を論じるの聞いて、古<sup>いにしえ</sup>の聖人はどうしても止めることができなくて詩文を作ったのだと考えるようになった。だから、私と弟はたくさんの詩文を書いてはいるけれども、詩文をこしらえようとの気持ちはこれまで持ったことがない。

己亥<sup>い・がい</sup>の歳<sup>か・ゆう</sup>[嘉祐4年]に、父の旅に伴って楚<sup>そ</sup>に向かった。舟の中では何もする事がなく、かといって、博打や飲酒は家族で楽しむものではない。一方で、山や川はすぐれて美しく、川沿いの風俗は素朴であったり粗末であったり、そこには賢人や君子の遺跡もあり、それらありとあらゆる耳目に接するものが、さまざまに身の内にあるものに触れ、詠嘆となって外に出てきた。こうして生まれ出てきた詩文は、家君の作と弟の作も合わせるとおよそ一百篇となった。これを『南行集<sup>なんこうしゅう</sup>』と名付ける。

一回限りの事をこのように記すことで、後に繰り返し尋ねるよすがにしようと思う。これらは談笑する間に生まれ出たもので、書こうと思って書いたのではない。

時に十二月八日、江陵<sup>こうりょう</sup>駅にて書く。

【補足】〔(1) この文章は短いけれども、蘇軾の文学観がよく表わされているとして知られ、蘇軾の若い時期を代表する作品として、多くの選集に収録されている。注目したいのは、「詩文をこしらえようとの気持ちはこれまで持ったことがない」〔原文は「未嘗敢有作文之意」〔未<sup>いま</sup>だ嘗<sup>かつ</sup>て敢<sup>あえ</sup>て文<sup>ぶん</sup>を作る<sup>つく</sup>の意<sup>い</sup>は有<sup>あ</sup>らず〕〕の句で、作為をもって詩文を作ることはないと言っている。さすがに 100 パーセントそうであったとは考

えにくいのが、理想としてはこうであると蘇軾は考えていたのである。(2) 文章全体から若い蘇軾が自信をもって書いていると感じ取ることができる。父子3人が一緒に旅して多数の詩を応酬し合って詩集を編んだという例は恐らくそれまでになく、文学史の新しいページを自分たちが開きつつあるとの強い自負に支えられて、歐陽脩を初めとする都の人々に見せようと『南行集』を編んだのであろう。後に唐代と宋代の散文の名手が8人だけ選ばれた「唐宋八大家」のなかに蘇洵、蘇軾、蘇轍の3人が揃って入っていて、中国の文学史上の奇跡の父子となっている。そして、蘇軾自身は杜甫や李白とならぶ詩の名手として揺るぎない評価を得ている。(3) 『南行集』はもとの姿では伝わらず、後世に残された3人の詩から復元が試みられ、いま読めるものとしては、蘇洵の詩が10首、蘇軾の詩が44首、賦が2首、蘇轍の詩が26首がある。蘇軾の作品は後の時期のものと比べると見劣りするの否めないが、父や弟の作品よりは格段に優れている]

## ■ 【01-1-041】上王兵部書

【解題】蘇軾は江陵府で王兵部 [兵部は官員の肩書] にこの手紙を出して面会を求めた。王兵部はこのとき江陵府の知事であったと推測されているが、詳しいことはわかっていない。ここでは「相」という語がキーワードになっている。「相」は手相や人相の「相」で、外見に現れ出ている特質で、それを見て内に秘められている本質を見抜いたり将来の運命を予見したりするという意味もある。

### 【訳文】

荊州[江陵]は南北の交差するところ、士大夫が往来する交通の要衝であります。執事[貴殿という意味、以下では知事殿と訳す]は高い才能と盛んな名声とによって、ここの知事となっております

れます。

知事殿はかつて相馬そうばの説[馬の良し悪しを見分ける秘訣]について聞かれたことがありますでしょうか。私が聞きましたところでは、駿馬は一日に千里を走っても疲れず、その背中にはほとんど動きません。走っているときに足は地についていないかのようで、高く上るときには前かがみならず、低く下るときには顔を前に上げたりしません。その卓絶ぎげいした伎芸の結果が、これほどまでに明確に外に現れ出るので。しかし、天下の人はそのことを知らずにいます。どうしてなのでしょう。その「相」を見ないで、技わざのうまさばかりを求めているからなのです。

そもそも馬は、目が上に高く向いていて、まつ毛が密集し、胸が豊かで、蹄が四角くて、山奥にいる虎のように敏捷で、秋の兎のように真っ直ぐに走り、太陽を見るように遠くを望み、かいばなどには心を寄せたりしないようなものが、疾風のように跳び出て、留まることを知らずに走って行くのであります。

このような「相」があるわけですから、馬をよく見分けた古いにしへの人は、五差路の角に立って、ちらりとひと目見て、ひと声鳴くのを聞くと、その外見だけから、技量がどれほどあるかを知り尽くしたのでした。馬の「相」は外に溢れ出て、覆うことができないものであるのです。

士し[世のために働こうとの志をもった人]が賢者であるのか愚者であるのかも、やはり顔に出て、言葉の端々に漏れ出るものであって、はっきりと目や耳でわかるのです。人物をよく見分けられるといっている者が、しばらくとも過あやまりてじっくり観察するのがよいと主張しているのは、実は誤りなのであります。

私は、西の州しよく[蜀のこと]の田舎の人間で、荊州に來た旅人でありまして、たまたま知事殿の門に至りましたので、後世に伝えたいと普段から書き溜めておいて、お手元に差し出せるようなものは携えておりませんので、知事殿のお心に合わずに疎遠そえんにされてしまっても仕方のないことであらう。それでも、蜀から楚そまで舟で六十日ばかりの間に十一の郡、三十六の県を通過して、郡県の役人の数十から百人ばかりと会ったところ、誰もが口々に知事殿が賢者であると論じて、

役所の下役人を通じて面会を申し込んだらよいだろうと教えてくれましたので、このようにして参上した次第でございます。知事殿はどのようなことをなさって、このように称えられておられるのでしょうか。

私は、知事殿の知遇を得て、知事殿の「仕進之門」[出世する登竜門]の前に並ぶ行列に加えていただくとする者ではありません。天下の五差路に立っておられる知事殿にひと目見ていただいて、古の馬の相を見る人の話が私が思っていたとおりであったとの確信を得ただけなのです。いまの世においては王公が士を選ぶだけでなく、士もまた選ぶのでありましょう。私はここ楚から魏[都]へと旅をして、魏からは天下のどこへでも行くことになるでしょう。後にここで知事殿にお会いしなかったのを後悔しないように、取返していま知事殿の門へ進まずにはいられないのであります。

【補足】[この手紙を要約すれば、「ひと目見てもらえたなら自分が賢者であるか否かはすぐにわかるでしょう」と蘇軾はいっているわけで、かなり自信たっぷりの態度である。たぶん、この手紙の前に知事に面会を求めたものの断られたので、ならば相手の度肝を抜いてやろうと、この手紙を書いたのではないだろうか。これで会わなければ、知事が自分で「相」を見る力量がないと白状していることになってしまうわけで、知事はこの小生意気な青年を招き入れるしかなかったであろう。結局のところ、知事には「相」を見る力量がなかったのだらう、この後、王兵部と蘇軾の間に美しい交流があったとの痕跡は残されていない]

## 第1章 遊の奇絶の始まり——郷里から都へ

[第1章その二]

嘉祐5年 [1060年]、蘇軾25歳。

### ■ 【01-2-001】眉州遠景楼記

【解題】蘇軾は江陵府 [荊州] に1カ月ほど滞在して新しい年を迎え、1月5日に都に向かって出発した。ここで蘇軾のこれまでの歳月を見ておくことにしよう。始めに簡単な年譜を掲げる。

○景祐3年 [1036年] 12月19日、蘇軾は、眉州眉山県紗縠行において、蘇家の次男として生まれた。父は蘇洵 [字は明允]、母は程氏。祖父は蘇序、その妻は史氏、曾祖父は蘇杲、その妻は宋氏。紗縠行は絹などを扱う商人が集まり住む場所であったと推測され、蘇軾の先祖は商人であったようだ。蘇家は曾祖父のころから次第に豊かになり、余財で土地を買い求め、祖父のころから子弟に教育を受けさせられるようになった。天聖2年 [1024年]、伯父の蘇渙が科挙に合格し、蘇家で初めて官界デビューを果たした。そのとき父の蘇洵は16歳になっていたが、勉学を嫌い、恐らくは商人としてであろう、しばしば眉州を離れて各地を旅する日々を送った。蘇洵は19歳のときに、同じ眉山県の程氏から妻を迎えた。妻の実家は官員を複数輩出する名家で、妻も一通りの教育を受けていた。妻は、夫がいつまでもふらふら出歩いてばかりいるのをよいとは思わなかったものの、何も言わずに、夫のいない間の家を守った。蘇洵が24歳のときに、母 [蘇軾の祖母] の史氏が亡くなり、兄 [蘇軾の伯父] の蘇渙が喪に服するために帰郷した。その兄の姿を見て蘇洵は発奮し、25歳のときから学問に身

を入れるようになった。蘇軾が生まれたのは、ようやく蘇洵が学問に励むようになって3年目のころであった。なお、おうようしゅう 歐陽脩がいりょう 夷陵県に流されたのは蘇軾が生まれた年のことであった [→作品番号 01-1-039]。

○宝元元年 [1038 年]、蘇軾の兄のそけいせん 蘇景先が幼くして亡くなった。この年に、蘇洵は上京して科挙の二次試験を受けたが不合格となった [科挙は三次試験までであった]。

○宝元2年 [1039 年] 2月20日、弟のそてつ 蘇轍が生まれた。以降、にんさいれん 任采蓮が蘇軾の乳母として、ようきんせん 楊金蟬が蘇轍の乳母として兄弟の養育に当たった。2人の乳母は母が蘇家に嫁いだときに連れてきた女性で、そのまま生涯蘇家に仕えた。母の実家は使用人を添えて娘を嫁がせるほどに裕福で、蘇洵は程家に対して頭が上がりなかった。

○慶暦元年 [1041 年]、伯父のろう 蘇渙が近くの閬州の副知事になり、祖父の蘇序はその働きぶりを見に行った。この前年に、か 夏国が北西の国境線を越えて攻め入り、かくりん 郭綸が奮闘した戦いがあった [→作品番号 01-1-001]。

○慶暦2年 [1042 年]、蘇軾はこのころに書物を読み始めたといわれている。

○慶暦3年 [1043 年]、8歳の蘇軾はちやういかん 張易簡の私塾に入学した。塾は道教の寺院であるてんけいかん 天慶觀のほつきよくいん 北極院にあった。張易簡から、当時の賢人を称えるせきかい 石介の詩、『慶暦聖徳けいれきせいとく 詩』を教わり、かんき 韓琦、はんちゆうえん 范仲淹、ふひつ 富弼、おうようしゅう 歐陽脩の名を聞き、強い憧れを抱いた。このとき都では范仲淹が副宰相として政治の大改革「慶暦の新政」に取り組んでいた。

○慶暦4年 [1044 年]、弟の蘇轍も張易簡の私塾に入学した。この年、范仲淹らが進める政治の改革は保守派の強烈な巻き返しによって頓挫し、改革を担っていた人々は次々に都を逐われた。

○慶暦5年 [1045 年]、父の蘇洵は友人のしけいしん 史経臣とともにちやうあん 長安から都のあたりへと旅をした。蘇洵は留守がちであったから、子の教育はもっぱら妻に任せ、蘇軾兄弟は母から史書を教わるなどした。

○慶暦6年 [1046年]、制科 [科挙以外に不定期に行われる文官登用試験] が実施され、蘇洵は史経臣とともに受験したが不合格となった。制科は科挙よりも遥かに難関で、受けられるだけでも大変なことで、しかも合格者はごく少数であった。制科に合格するとたちまち国家の重要な職務に就ける道が開け、その代表的な人物として富弼がいた。富弼は優れて論理的な思考をする人で、詩が不得手であったために科挙には合格できなかったのだが、その才能を惜しむ人々が特に富弼のために制科を行うよう皇帝に要望し、論文審査を中心とする試験で天聖8年 [1030年] に合格し、即座に県知事に任命され、後に宰相にまで昇った。

○慶暦7 [1047年]、祖父の蘇序が亡くなった。制科に落第した後、そのまま各地を旅していた蘇洵と、地方で官職に就いていた伯父の蘇渙が相次いで帰郷した。蘇軾兄弟が伯父と直接話をしたのはこのときが初めてで、2人は強烈な印象を受けた。蘇洵もまた兄と会ったことから己の考えを改め、以後は家に籠って独り学問に専念するようになった。

○皇祐元年 [1049年]、郷里の先輩である任佖が官職を一時的に辞めて帰郷した。任佖は「大任、小任」の弟である [→作品番号01-1-009]。

○皇祐2年 [1050年]、蘇軾の姉が程之才と結婚した。程之才は、蘇軾の母の程氏の兄である程濬の子、つまり母方の従兄弟である。姉は蘇軾よりも1歳上で、このとき16歳であった。昔の中国では女性に関する記録は極めて少なく、蘇軾には3人の姉がいたらしく、そのうち2人は幼いころに亡くなったようだ。

○皇祐4年 [1052年]、程之才に嫁いだ姉が亡くなった。舅の程濬、姑の宋氏に虐待され、それに追随した夫の程之才の不道德な振る舞いによって、わずかに18歳で命を落としたのだった。44歳になってもなお貧乏な落第生であった蘇洵は、娘の非業な死にも泣き寝入りするしかなかった。

○至和元年 [1054年]、蘇軾は王弗と結婚した。蘇軾は19歳、王弗は16歳であった。王弗は隣の青神県せいしんの名家の娘である。蘇軾は范仲淹はんちゆうえんや欧陽脩おうようしゆうのように国と民のために働こうとの志を抱くとともに、山に籠って隠者として生涯を送ることに憧れていたもので、結婚することにはかなりの葛藤があったようだ。

○至和2年 [1055年]、父の蘇洵は、学問に専念してきた成果として書き上げた数々の論文を携えて成都せいとに行き、張方平ちやうほうへい知事に見せた。成都は眉山しよくの北数十キロにある大都市で、蜀の中心地である。張方平は当時の政界の実力者で、これより先に南方で儂智高のうちこうが反乱を起し、蜀の地に攻め入ってくるとの噂が流れて人心が動揺したために、それを鎮めるために都から派遣されてきたのだった。張方平は蘇洵の論文を見て感心し、成都の学校の教授に迎えようとしてくれたが、実現しなかった。蘇軾兄弟もこのとき父に同行して張方平に会い、また同郷で同族の僧である惟簡いかん [→作品番号 01-1-002] に会ったりした。弟の蘇轍はこの年に史氏しと結婚した。

○嘉祐元年 [1056年]、この年の初めか前年の終わりに、父の蘇洵は雅州がに行つて知事の雷簡夫らいかんふに会い、やはり書き溜めてきたものを見せた。雷簡夫も蜀の人心を鎮めるために張方平とともに都から派遣された人物で、雷簡夫は蘇洵の文章を高く評価し、欧陽脩おうようしゆうや韓琦かんきに蘇洵のことを薦める手紙を書いた。それが蘇洵の名が都の名士に知られる大きなきっかけとなった。蘇軾兄弟も父に同行して雷簡夫に会っているのだが、後年、蘇軾は雷簡夫については一切何も記していない。後に雷簡夫には不届きな振舞いがあったためだと推測されている。一方で、張方平に対しては大恩人としてずっと敬意を表し続けた。蘇洵は張方平と雷簡夫に会って思うところがあり、2人の息子を連れて都に行くことを決意した。普通は科挙の一次試験は郷里で受けるのだが、蘇洵には何らかの目算があって息子達には最初から都で受けさせようとした。春、3人は再び成都せいとに行つて張方平に挨拶し、そのまま北上して陸路で都ちやうあんに向かい、長安を経

由して5月ないし6月に都に到着した。興国寺こうこくじの浴室よくしつりんに寄宿し、兄弟は受験の準備をする一方で、蘇洵は欧陽脩を初めとして名高い人々を次々に訪問した。蘇洵はしっかりと学問を身に付けていただけでなく、不思議な人間的魅力にも溢れていたのだから、多くの人々から優れた人物であると認められ、特に欧陽脩は蘇洵を朝廷で用いるよう推薦してくれた。秋に兄弟は科挙の一次試験を受け、蘇軾は第二位で、蘇轍は中程度の成績で合格した。そのころに張方平が都に帰還したので、蘇洵はすぐに会いに行った。

○嘉祐2年〔1057年〕1月、礼部らいぶにおいて実施される科挙の二次試験の実行委員長に欧陽脩おうようしゅうが任命された。これは蘇軾にとってまことに幸運であった。二次試験では5本の論文と1首の詩を作ることが課せられ、当時流行していた装飾過多の文章で答案を書いた者は、欧陽脩の方針によってことごとく不合格となった。蘇軾は第2位で合格し、首席そうきやうは曾鞏であった。蘇轍も合格し、3月に皇帝の前で科挙の最終試験が行われ、兄弟揃って合格した。こうして晴れて官界入りが約束された2人は、欧陽脩、韓琦き、富弼ふひつらに会い、兄弟はたちまち時の人となり、父もまた何らかの官職が獲得できそうであった。ところが、郷里に残っていた母の程氏ていが4月7日に亡くなり、その訃報が5月に都に届くと、3人はあわただしく帰郷した。

○嘉祐3年〔1058年〕、郷里に帰っていた蘇洵は、朝廷の学士院のメンバーを選抜する試験を受けるよう皇帝からの招聘を受けた。学士院は学術をもって皇帝に仕える者の集まりで、極めて名誉ある役職である。しかし、蘇洵は老い〔実際は50歳であった〕と病気〔それは事実であった〕を理由に辞退した。蘇軾兄弟は礼の規定で母が亡くなった後は足掛け3年の喪に服さねばならず、行動を慎み、詩文などはほとんど作ることなく静かに過ごした。

○嘉祐4年〔1059年〕、兄弟の喪が明けると、蘇洵は息子2人を連れて都へと向かっ

た。蘇軾兄弟はいよいよ官職に就くため、蘇洵には蘇洵なりの目算と堅い意志があった。それは、もしも朝廷が己の学識を必要としているのなら、試験など課すことなく用いられるはずだというものであった。

以上の年譜は、蘇軾や関係する人々が書き残したものなどから抽出された事柄を年代順に再構成したものである。以下に、年譜の記述のもとになった幾つかの作品を見て行こう。まず、蘇軾の出自について、蘇軾が亡くなった後で弟が記した墓誌銘の初めの部分だけを訳出する。この墓誌銘が蘇軾の伝記の第一の基礎史料である。

### 【訳文】

そでつ ぼうけいし せんたんめいぼ しめい  
蘇轍：『亡兄子瞻端明墓誌銘』

こう いみな あざな わ ちゅう びざん  
公〔蘇軾〕の諱は軾、姓は蘇氏、字は子瞻、もう一つの字は和仲。家は代々眉山にあって、曾祖父の諱は杲、太子太保を贈られ、その妻は宋氏、昌国太夫人に追封された。祖父の諱は序、太子太傅を贈られ、その妻は史氏、嘉国太夫人に追封された。父の諱は洵、太子太師を贈られ、その妻は程氏、成国太夫人に追封された。

公が十歳の頃、先君〔父〕は各地を巡って学び歩いていたので、太夫人〔母〕が自分で書物を教え、古今の歴史の肝要なところを語って聞かせた。母はあるとき『後漢書』を読み、「范滂伝」に至ると、慨然として太くため息をついた。公はそばにいて、「私がもしも范滂になったら、母も范滂の母のように私を許してくださいますか」と言った。母は「そなたが范滂になれるのなら、私が范滂の母になれるはずはありません」と言った。公は奮起して世のために働こうとの志を持った。母は喜び、「私にはこの子がいる」と言った。

【補足】〔(1) 曾祖父以下が「太子○○」を贈られ、その妻が「○○太夫人」に追封されたとあるのは、子や子孫が大官に昇ったことで、そのような称号が朝廷から贈られたからである。(2) 范滂は後漢時代の人で、当時の国政を乱していた宦官と対立

し、都を逐われて郷里に帰った。范滂を憎む人々は皇帝の命令書をでっちあげ、范滂を逮捕する役人を派遣した。県の知事は范滂に逃げるよう勧めたが、范滂は法を破る悪行はできないと、自ら赴いて逮捕された。范滂の母は息子の行動を讃えた。蘇轍が兄の墓誌銘にこのエピソードを記したのは、母のことを書き残しておきたかったのと、蘇軾の後の人生をまさに暗示するものであったからである]

【**解題**】この項目の表題として掲げた『眉州遠景楼の記』は、本章で見ている都への旅の20年ほど後の元豊元年〔1078年〕に執筆されたもの。蘇軾の郷里がどのような土地柄であったのか、蘇軾自身が詳しく記している。

### 【訳文】

我が眉州の風俗には、古に近いものが三つある。

(一)士大夫は儒学の古典を貴び、一族の伝統を重んじる。

(二)民衆は役人を敬い、法を畏れる。

(三)農民は一緒に農作業に励み、互いに助け合う。

これは、夏、殷、周の三代や、漢や唐の昔の風俗の名残がいまに伝わるものであって、他の地域の及ばないところである。

宋の朝廷は、始めのころは音律の整った美文を書ける者を官僚として採用した。そのため、四代皇帝の天聖年間以前の学者は宋の前の五代十国時代の(上辺を飾って中味がない)欠陥をそのまま受け継いでいた。我が州の士大夫だけは、古典に通じて古を学び、漢の時代の文学を手本としていた。このとき、他の地域の人々は我が州の人々は迂闊である[古臭いことばかり言って世事に疎く役立たずである]と批判した。郡や県の下役人に至るまで、皆が古典を手元に置き、それを範として筆を執りに応対し行動したので、なかなか立派なありさまであった。そして、名門

の人、世に<sup>あらわ</sup>顕れた人は互いに家柄を尊重しあい、甲乙の序列がきちんと定まっていた。このような人たちを「江郷」といい、たとえ高位に昇ったり富んだりしても、「江郷」同士でなければ婚姻することはなかった。

眉山の民衆が州知事や県知事に仕えるありさまは、古の君臣関係を想わせるところがある。知事が去った後でも、その肖像画を描いて奉仕し続ける。特に賢明であった知事に対しては、その人が行ったことを記録し、語り継いで、四十年、五十年経っても忘れないようにする。商人や町民はいつも善い物を別にして、官からの求めにすくに応じられるようにしている。家には法令書が備えられ、いつもそれに通曉して、誤ったことをしないようにしている。ごくごく小さな罪も、一生の間に犯さない者がたくさんいる。

我が州では二月に農事が始まる。四月の初めは、穀類はまだ<sup>おさな</sup>稚く雑草の勢いが盛んである。このときに人々は一斉に草刈りに出る。数十人から百人が一つの班を構成する。目印を立て、漏<sup>ろう</sup>[水の流れて時間を計る道具]を据え、太鼓を鳴らして人々を集める。皆から尊敬をされている者を二人選び、一人が太鼓を鳴らし、一人が時間を計る。進むのも退くのも、作業に掛かるのも止めるのも、ただこの二人の指図に従う。太鼓を鳴らしても出てこない者、きても力を出して努めない者には罰金が課せられる。農地の広さと作業量を測り、仕事が終わるとそれらを評価し、農地が広いのに働き手が少なかった者は、銭を出して皆への償いとする。七月の満月の翌日、穀物はすでに収穫され、雑草は衰えているので、太鼓をはずし、「漏」を壊し、罰金と人々に償う銭を集め、羊や豚の肉、酒や<sup>あまざけ</sup>醴を買う。田の神を祭り、音楽を演奏し、飲みかつ食べ、酔って満腹となつてから帰る。これが毎年の恒例である。

以上が我が州の風俗のあらましで、このようであるから、我が州の人は皆が聡明で才智があり、基本に忠実で一生懸命に働くので、治めやすく、しかし服従させるのは難しい。新しい知事がくると、その人が話すこと、その人がすることを見て、その人となりを納得するまで観察する。もしも頭脳明晰で能力があると知れると、何か事を起こして知事の出方を確かめようとするようなことはもはや

なく、後は知事は朝から晩まで静かな日々を過ごしていればよい。もしも知事のすることが道理に合致しないようであれば、筋を通し法を根拠として知事を徹底的に批判する。だから、我が州の風俗を知らない者は治め難いというのだ。

いまの知事の黎錡侯<sup>れいじゅうん</sup>は、私の父の友人であった。つつましく、一方で華やかであり、剛直であり、一方で仁愛に富み、明察であり、一方で苛酷ではない。それで人々は仕えやすいと思い、任期が満ちて交替になるときかぐると、去ってしまうのを残念がり、皆で引き留めようとした。朝廷はその請願を聞き入れ、さらに我が州に留まること三年となり、民衆は知事をますます信頼して、何事もなく治まっている。そこで、知事は住まいの北側の土塀に寄り添うようにして建物を増築し、これを遠景楼<sup>えんけいろう</sup>と名付け、その上で日ごと客人や役所の人間と遊んで過ごしているのである。

私はいま徐州<sup>じゅう</sup>にいて、我が州の人と手紙のやりとりをするたびに、黎侯のすばらしさが書かれていないことはない。そして、遠景楼について文章を書くよう我が州の人に依頼され、このように記すこととなった。

私は、故郷を去ってすでに久しい。遠景楼はそのあるところを想い浮かべることがはできても、その詳細を述べることは私にはできない。州の人々がこの楼があるのを喜び、そのことを記してほしいと思う気持ちは、私にもよくわかる。上に仕えやすい長官がいて、下に治めやすい風俗がある、そのことこそが何よりもよいのだ。

孔子<sup>こうし</sup>はこのように言っている。「昔の史官は不明の文字があると空白のままにした。昔の人は馬を手に入れると他の人に貸して乗り馴らしてもらった。いまはそのようなことはない」。この二つのことは、道<sup>みち</sup>〔根本の道理〕を大きく損なったり、大きな益をもたらしたりするような事柄ではない。それでも、人の世の美徳が失われて行くのは残念あるとして孔子のこの言葉が記録されたのだ。

我が州の古に近い風俗がここにだけ世を累ねても変化しないているのは、昔の人やいまの老人たちが生きることを楽しんできた恵みによるものであり、賢明な知事が倦まずたゆまず民衆を慈しみ指導してきた力によるものである。これは記録しないでもよいものではない。

遠景楼に登ってあたりを見ることの楽しさ、そして山川風物の美しさを記述するのは、私がいつしか  
 隠退して故郷に帰り、老隠居の姿で知事のお供をしてそこに登り、酒が<sup>たけなわ</sup> 闊となって演奏される音  
 楽を聞きながら、筆を執って賦を作り、黎侯の遺された愛を讃えるときであっても、まだ遅すぎはな  
 いであろう。

<sup>げんぼう</sup>  
 元豊元年[1078年]七月十五日に記す。

【補足】 [(1) これは眉州知事の黎錞<sup>びしゅう れいじゆん あざな きせい</sup> [字は希声] が建てた遠景楼<sup>えんけいろう</sup>について記した  
 文章。本文中にあるように黎錞は蘇洵<sup>そじゆん</sup>の友人で、嘉祐7年[1062年]ごろには都で  
 隣同士住むほど仲がよかった。(2) この文章で蘇軾は過剰なまでに郷里の風俗を讃え  
 ている。郷土愛の表れと理解すべきだろう。古<sup>いにしえ</sup>を尚<sup>とうと</sup>ぶ姿勢はここでも顕著である。  
 (3) この文章で、眉州の人々は士大夫<sup>しだいふ</sup> [中でも特に家柄がよいのが江郷]、農民、  
<sup>しょう こしょうみん</sup>  
 商賈小民 [商人・職人] の三階層に分けられている。蘇軾の先祖は商人であったと  
 推測されているが、蘇軾自身がそのことを明確に記したことはない]

【補足】 [先の墓誌銘には蘇軾の曾祖父までの名が挙げられていた。それ以前の人々  
 については父の蘇洵<sup>そじゆん</sup>が書いたものが残っている。以下に蘇洵の二つの文章の部分的な  
 訳を掲げる。唐末<sup>とうまつ</sup>から五代十国時代<sup>ごだいじゅうこくじだい</sup>の混乱期を経て貴族の時代が完全に終わり、新た  
 に勃興してきた宋代士大夫<sup>そうだいしだいふ</sup>は次第に自己意識に目覚め、このころから自己の出自を調  
 査して系図を作成することが行われるようになり、蘇洵がその先鞭を付けたとされて  
 いる]

### 【訳文】

<sup>そじゆん そしやくふいん</sup>  
 蘇洵:『蘇氏族譜引』

この「蘇氏族譜」は蘇氏の一族の系譜を(表にして)示すものである。

蘇氏は(太古<sup>こてい</sup>の五帝<sup>ごてい</sup>の一人である)高陽<sup>こうよう</sup>から、天下に広まったものである。唐の高祖皇帝の時代<sup>とう こうそ</sup>

に、蘇味道が眉州の知事となり、そのままその地で亡くなると、息子の一人が眉州に留まった。それが眉州の蘇氏の始まりである。

この「譜」の記載がそこにまでは及んでいないのは、「親」[親族としての近い関係]がもはや尽きてしまっているからである。どうして「親」が尽きたところにまで記載が及ばないのかというと、「譜」は「親」のために作るからである。

この「譜」では、子[旧中国の通例として男子のみ]としての名は書いてあって、孫としての名は書いていない[孫は、子のまた子として譜面には表記されている]。どうしてかかというと、世代をはっきり示すためである。私の父から私の高祖[四代前]まで(の直系の先祖)については、官に仕えたか仕えなかったか、誰を娶ったのか、享年は幾つで、何日に亡くなったのかを記してあって、他の人についてはそうしたことは何も記していない。どうしてかかというと、この「譜」は私の出自を詳しく見るために作ったものだからである。私の父から高祖まで(直系の先祖)については「諱は某」と断り書きを入れて記し、他の者はすべて直に名を書いている。それは私の出自を尊ぶからである。「譜」は蘇氏のために作るいいながら、私の出自だけを詳しく、しかも尊ぶのは、私が「譜」を作ったからである。

嗚呼、私の「譜」を見る者は、孝悌の心が自然と湧き上がってくるであろう。情は「親」から現れ出て、「親」は喪に服する在り方によって表現される。喪には最も近い者の「衰」から始まって「緦麻」までの五段階があり、その先になるともう喪に服することはない。喪に服さなくなれば「親」が尽きたことになり、「親」が尽きれば「情」も尽き、「情」が尽きれば喜びごとがあっても祝うことはなく、憂いがあっても弔うことはない。喜びごとがあっても祝うことがなく、憂いがあっても弔うことがないというのは、つまりそれは「途人」[赤の他人]ということである。我々が会って「途人」と見るような者も、その初めにおいては兄弟であったのかもしれない。兄弟もその初めは一人の父であった。一人の身から分れていつしか「途人」になってしまうというのは、悲しいことではなからうか。私がこの「譜」を作ったのはこのような思いからである。

分かれて「途人」に至るのは(必然の)「勢い」である。「勢い」は我々はどうすることもできない。幸いにしてまだ「途人」に至らない間は、忘れ去らないでいるようにすれば十分なのだろう。嗚呼、私の「譜」を見る者は、孝悌の心が自然と湧き上がってくるであろう。このことを詩としてここに示しておこう。

吾父之子、(吾が父の子)

今為吾兄。(いまそれは我が兄である)

吾疾在身、(私の身に病があると)

兄呻不寧。(兄は心配して安らかではられない)

数世之後、(数世代を経ると)

不知何人。(互いに誰であるのか知らなくなる)

彼死而生、(誰が死のうが生まれようが)

不為戚欣。(悲しむことも喜ぶこともない)

兄弟之親、(兄弟として親しむときは)

如足如手、(互いに手のようであり足のようである)

其能幾何。(それはどれほどの間のことなのか)

彼不相能、(そうであるのに兄弟で親しむことができないとしたら)

彼独何心。(それはどのような心によるものなのか)

【補足】 [(1) この文章は、蘇氏の6代にわたる系譜を表にした「譜」に添えた序文で、「譜」の凡例を記している。それがかなり理屈っぽいところに蘇洵らしさがよく表れている。この凡例がその後の系譜作りの一つの典型とされたようである。

(2) 蘇氏は太古の高陽こうようから始まったとあるのは、様々な姓の淵源を太古に求めることが昔から行われていて、そのなかの一説に拠ったものである。眉州びの蘇氏の始まり

<sup>とうだい そみどう</sup>  
 が唐代の蘇味道の息子であったというのは事実かどうかはわからない。自分の先祖を  
 歴史上の著名人に結び付けたがるのはよくあることだ。蘇洵は自力で調査したのだ  
 が、系譜作りを商売にする者も現れ、そうすると立派な御先祖様と巧みに繋ぎ合わせ  
 ることが系譜職人の腕の見せ所ということになる。(3) 細かいことだが、普通は  
 「蘇氏族譜<sup>そしぞくふ</sup>の序<sup>じょ</sup>」と書くところを、ここでは「蘇氏族譜<sup>そしぞくふ</sup>の引<sup>いん</sup>」となっている。それ  
 は、蘇洵の父の名が序<sup>じょ</sup>で、あからさまに父の名を記すのは不敬になるので、それを避  
 けて同義語でなる「引」を使ったためである。蘇軾も「序」の字を避けて「叙<sup>じょ</sup>」と記  
 すことが多い]

### 【訳文】

<sup>そじん そくふ こうろく</sup>  
 蘇洵：『族譜後録』

……[初めに、<sup>こうよう</sup>高陽から始まる蘇族の壮大な系譜とそれに関連する考察が記される。特に、<sup>ちよう</sup>趙  
 州に移り住んだ蘇族から蘇味道<sup>そみどう</sup>が出て、蘇味道が眉州<sup>び</sup>にきたことによって眉州の蘇族が始まった  
 ことが詳しく記述される。このことから、蘇軾は自身のルーツは趙州にあるということもある]……  
 蘇味道から吾が高祖に至るまで二百年余りで、三十年を一世とすると七十世余りある。七十世  
 余りの間には賢者もいれば不賢者もいて、不賢者のことは時間とともに消え去って聞こえなくなり、  
 賢者としていまも七人だけがその名が聞こえている。七十世余りで賢者がわずかに七人しかいなか  
 ったというわけではなく、その他の者は単に名が伝わらなかったのだろう。これまでに「譜」を作って  
 こなかったことによる過ちである。だから私はここに「譜」を作り、また聞いているところの先人の行い  
 を以下に記しておく。

私はかつて吾が先子<sup>せんし</sup>[蘇洵の父の蘇序<sup>そじょ</sup>]からこのように聞いた。

「私がまだ子供だったときに我が父は亡くなってしまったので、父から先の世のことについて聞くこ  
 とができなかった。これまでに耳にしてきたのはおよそ次のようなことであった：

蘇氏は眉州に遷り、そして眉山に住むようになった。高祖は蘇涇で、詳しいことはもうわからない。曾祖父は蘇銜で、ここからは少しわかることがある。蘇銜は黃氏を娶り、男気があることで知られていた。子[男子]が五人いて、吾が祖父の蘇祐が最も下で、最も賢く、しっかりとした才覚があつて機敏であるといわれていた。吾が祖父は唐の哀帝の天祐二年[905年]に生まれて、周の世宗の顯徳五年[958年]に亡くなった。ほとんど五代十国時代を生きて、亡くなって一年後に、宋の太祖皇帝が即位されたのであつた。その時代には王氏と孟氏が前後して蜀の地に割拠し、蜀で才能がある者、あるいは人格者は王氏や孟氏は輔けるに足りないとして、敢えて出仕する者はいなかった。未熟な軽薄者だけが仕えたのだつた。王氏も孟氏も亡ぶと、宋の太祖皇帝の号令を受けるようになった。吾が祖父はまだ宋の世になるのを見なかつた。吾が祖父は李氏を娶つた。李氏は唐の皇室の末裔である。唐の太宗皇帝の子の曹王の李明の子孫で李瑜という者がいて、遂州の長江県の役人となり、失官した後眉山の丹稜に住むようになった。吾が祖母の李氏は毅く厳しい人で、豊かな知恵があり、家の中は肅然としていた。あたかも竇太后[唐の高祖の妻]や柴氏主[唐の高祖の娘]の烈しさを受け継いだかのようであつた。子が五人あり、その性格はそれぞれに違い、宗善、宗晏、宗昇は平凡でも可もなく不可もなく、五男の宗晁は軽薄で手のつけられない向こう見ずであつた。四男の吾が父の蘇杲が最も善行を好み、父母に仕えて極めて孝であり、兄弟を愛して篤実で、友人に対して篤く信義を守つた。郷里の人は誰もが蘇杲のことを敬つた。吾が父は宋氏を娶つた。宋氏は上には謹んで仕えて極めて孝であり、下には非常に厳しかつた。子が九人いたが、私だけが成長できた。吾が父は家業を善く治め、余財があつた。このころは蜀を統治していた孟氏が破れたばかりで、孟氏政権の高官たちは蜀の田地を棄てて宋朝のもとに走つたのだが、吾が父はそのようなことはしなかつた。吾が子孫に累が及ぶのを恐れたのである。二頃けいに満たないわずかな土地を耕し、粗末な家に住んでいた。人に施すのを好み、『財産がありながら施さないしていると、きっと他人によって陥れられるであろう。施しをしているとことが人に知られたなら、きっとよい評判が得られるようになるだろう』と、言つていた。つまり、施しをしつつ悪を咎

めていたのである。一族の叔父の蘇玩そがんが重罪を犯し、捕まりそうになったことがあった。叔父は『獄に入れられて死んだなら、家族のことで兄上を煩わせることになります。我が刑罰がどのように定まるのかを見て、もしも軽くすみそうなら獄に肉を差し入れてください。もしも重いようでしたら野菜を入れてください。野菜がきたなら、私は食べないで死にます』と、言った。蘇玩は釈放されると、『私には他に兄弟がいけないわけではないのですが、命を託せるのは兄上だけです』と言った。吾が父が亡くなったときに、母は私の手を執って、『あなたにあなたの兄弟をすべて任せます』と、言った。私は笑って、『賢者であるなら兄弟であろうがなかろうかとも生きるでしょうし、賢者でなければ兄弟であっても見捨てるだけです。任せられても、ただ善く教え導くことしかできません』と、言った。吾が父が亡くなったのは淳化五年[995年]で、五十一歳であったから、生まれたのは晋の少帝かいうんの開運元年[994年]であったのだ

以上が私が先子[蘇序]から聞いたことである。

父の諱は序ちゆうせん、字は仲先かいほう、開宝六年[973年]に生まれ慶曆七年[1047年]に亡くなった。史氏を娶り、子は三人。長男は澹たん、次男は渙かん、三男がすなわち洵である。父は若して父親を喪い、善行をなすことを喜んだけれども、書物を読むことは好まなかった。晩年に至って詩をつくるようになり、見たまを詠んで、たちどころに作り、十年ほどの間に数千篇となった。上は朝廷や郡県のことから、下は村で子孫が農地で働き漁をするありさままで、みな詩にしたのだった。その詩は工ではなかったけれども、物事の表裏を貫いて、人にははっきりとわからせるものがあった。父の本性は素朴で、偉ぶるところがなく、己のためより人のために物事をなした。人との交わりでは、貴賤の分け隔てがなく、誰もが歓んだ。士大夫しだいふに会うときは身を曲げて十分に敬ったので、それを見て人は詔へつらていると思ったが、農地で老人と会うときにもまったく同じようにするので、その後は誰も怪しまなくなった。顔の外に現わすことはなかったが、心の中では人の軽重を甚だ厳しく見ていた。村の中では馬に乗らずに、「わしよりひどく老いた者が歩いているのに、わしが馬に乗ったら、会わせる顔がない」と、言っていた。おんぼろの衣を着て、粗末な物を食べて、恥とはしなかった。人々がいやが

ることを自身で務めて行った。『老子』<sup>ろうし</sup>を学んだことはなかったけれど、その教えに符合していた。家に居ても家のことには関わらないで子供たちに任せていた。一族のなかで問題を起こした者があると、その者のために心を尽く、何度でも厭わなかった。凶作の年に田を売って飢えた人々を救ったことがあり、豊年になって人々がそれを弁済しようとすると、「わしは自分のために売ったのだ。そなたたちとは関係ない」と、言って、ついに受け取らなかった。人知れずいろいろなことをして、世間で評判になることはなかった。何かをしてかなり経ってから、人々に知られることがあった。古の隠れた君子でも及ばないものであった。息子の蘇渙が官員<sup>だいにり びやうじ</sup>となって大理評事を授かった。妻の史氏は眉州の大家の出で、心優しく、穏やかな人であった。姑の宋氏は非常に厳格であったけれど、史氏はいつも宋氏を喜ばせ、一家を和やかにさせた。父よりも十五年早くに亡くなり<sup>ほう</sup>、蓬萊<sup>らいげんたいくん</sup>県太君を追封された。

私はこのように聞いている。唐朝が衰えてからは賢人は山や野に隠れ、五代十国時代の乱れを避けた。その後、偽政権<sup>おう もう</sup> [王氏と孟氏]の国があい継いで亡び、聖人<sup>そう たいそ</sup> [宋の太祖]が出て天下は一つになったのだが、かつて隠れた人々の子孫はなおその父祖のもとから去って新しい天下に出て仕えようとはしなかった。それで立派な才能がある者でも世に顕れることはなかったのである。宋朝の教化が天下に広く及んで風俗が変化するようになると、深山窮谷の中にいた者たちの子孫は日に向かように初めて官に仕えるようになった。その才気は先人の実直で真心があるのには及ばないにしても、重い任務に耐えられることは間違いないのである。このような先人の行いが隠れて聞こえなくなってしまうのを私は深く恐れ、ここにその万分の一を記して、これを家に保存して、子孫に示すものである。

至和二年[1055年]年九月一日。

【補足】 [(1) この文章で注目すべきは、一般庶民の普通の人生にも高い価値があるとして、蘇洵<sup>そじゆん</sup>が祖父や父の日頃の振る舞いを記していることである。これもまた宋代<sup>そうだい</sup>士大夫<sup>しだいふ</sup>の自意識の高まりを示すものであるのだろう。 (2) 蜀<sup>しよく</sup>の地に宋朝の支配が及ん

だころの変化に蘇洵の先祖がどのように対応したのかということが記されている部分は、宋朝に対して相当に配慮した記述になっている。かつて蜀を支配していた孟氏もうの政権は民衆に対して決して仁政を施したわけではなかったけれど、宋朝が蜀を支配し始めたときの暴力的な統治に比べたら遙かにましであった。蜀の民は、宋朝支配のもとでしばし苦難の歳月を過ごさねばならなかったのである。それについては後の文章で見ることになる。(3) 最後にある至和二年九月一日の日付は、先の年譜で見たように、蘇洵が息子を連れて都に旅立つ前年のことで、蘇洵はいよいよ世に頭れ出る決意を固めつつあったときで、そうした思いもこの「族譜」には込められているのである]

## ■【01-2-002】衆妙堂記

【解題】これは遙か後年の元符元年 [1098年] に記した文章。蘇軾は8歳のときに、父に連れられて張易簡ちよう い かんの「小学」しょうがく [寺子屋] に入ったことがこの文章の冒頭に記されている。

### 【訳文】

眉山の道士の張易簡ちよう い かんは「小学」しょうがくで教え、いつも百人ほどの生徒がいた。私も幼い頃にその一人であった。学校は天慶觀てんけい かんの北極院ほっきょく いんにあり、三年ほど張先生について学んだ。

私はいま海南島に流され、ある日、夢に学校に行き、昔のままの張先生とお会した。

庭も部屋も掃き清められていて、先生は誰かが来るのを待っているかのようなだった。

「老先生がじきやってこられるのだ」

張先生はそう言った。

すると、二人の者を連れて老先生ろうしが現れた。二人は『老子』の言葉を朗唱した。

げん しゅうみょう  
「玄のまた玄、衆妙の門……」

かつて私も張先生の学校で同じように朗唱していた。

私ははたと思った——「玄」のまた奥おくふかきに「玄」がある。そのまた奥おくふかきの奥おくふかきにももの根源たえなるもの、「妙」がある。その「妙」からたくさんたえなるものの「妙」が出てくる。だから、「衆妙の門」という。ならば……

私は張先生に尋ねた。

「妙とはもの根源みょう、そうならばそれは一いちであるのではないでしようか。一いちでありながらどうして衆しゅうを容れられるのでしょうか」

張先生は笑って言った。

「一いちだけではつまらんだらう。つまらなくてたえなるものは妙たえなるものではるまい。本当に妙たえなるものなら、たくさんあつたほうがよくはないかな」

張先生がそのように言うと、二人の者の一方は水を撒き、一方は草を刈り始めた。

「おのおのみょう一つの妙を見せてくれるであらう」

張先生がそう言ったので、私は注視していると、二人の者は手をもものすごい勢いで動かし、庭の内で風雨が渦巻いた。たちまち雲が散じ、霧が晴れると、見たこともない花々があたり一面に咲き乱れ、無数の鳥や虫が輝く姿を現した。

私は驚き、

「これが衆妙しゅうみょうなのでありませんか」

と、言った。

一人の者が言った。

「何のこれしき、あなたはまた真の妙しゅうみょうを見ていない。我等の技はまだまだ道半ばで、これより先は空くうの空くうへと入り行き、そこは行こうと思って行けるところではない」

もう一人の者が言った。

「あの蟬を見るがよい。蟬は木に登って鳴き続けて止むとぎがない。蟬は木に登ろう、そして鳴こうと

思ったから、あのようになったのではない。地中の闇にいたときには、見ることもなく聞くこともなく、飢えることもなく渴くこともなく、びくりとも動かずにじっとしていた。あるとき忽然と地上に現れ出て、あのようになった。いかなる聖人の知恵も及ばず、いかなる名工の技も及ばない」  
すでに姿を消していた老先生の後を追って二人の者は庭から出て行こうとした。  
茫然としている私に向かって張先生は言った。

「まあ、心を落ち着けるがよい。老先生がまたこられたときにさらに問うてみよ」  
すると二人の者が振り返って言った。

「老先生も御存知ではない。蟬に問うべきである。養生と長生が得られるであろう」  
——夢はここで終わった。

こう 広州に道士の崇道大師の何徳順がいる。道を学んで妙に至る者である。堂を作って、「衆妙」の額を掲げた。海南島に手紙が来て、そのことについて書いてほしいとの依頼があった。私は書くだけの暇がなく、ただ夢の中の話を書いて、崇道大師への返事とするものである。

げん ぶん 元符元年三月十五日、蜀人の蘇軾が書く。

【補足】〔(1) この訳文は原文からかけ離れた極端な意識である。張易簡先生との問答には訳者に理解し難いところがあり、当て推量も交えて、とりあえず日本語訳としては読めるかたちに整えた。「自由訳」といえ許容されうる自由の幅を超えるものであるかもしれない。そのようなものを以下では「ずっぱ訳」〔当てずっぽうの訳〕と称し、その度合いがひどい場合に断りを入れるようにする。(2) 8歳の蘇軾は張易簡の学校でまずは『老子』を朗誦し、『論語』の「子曰く……」を唱えていたのではなかった。儒教よりも先に道教の經典に親しみ、蘇軾の精神の基底を構成する重要な要素となった〕

## ■ 【01-2-003】 范文正公文集叙

【解題】張易簡の学校で、ある日、蘇軾の進路を決定づけるような印象的な出来事が

あった。そのことについて、元祐4年〔1089年〕に蘇軾が編集した范仲淹の文集の序文の中で書いている。

【補足】〔范仲淹の名はすでに見ているが、ひとことでいうと、宋代の士大夫のあるべき理想像を体現してみせた人物であった。父はあまり地位の高くない官員で、范仲淹が2歳のときに任地の官舎で亡くなった。残された母子はたちまちその日の暮らしにも困るようになり、母は生きるために朱文翰と再婚した〔当時は女性の再婚を戒めるような狭苦しい道徳律は一般的ではなかった〕。范仲淹は朱家の子として、実の父のことは知らずに育てられたが、他の兄弟とは何かと差別されたことから自身の出生に疑問を持ち、范氏の子であると知って、何としてでも科挙に合格して立派な官員となって范の家を再興しようと決意した。それは20歳のころで、そこからの苦学ぶりには有名で、僧舎に寄宿して一日を一碗の粥とわずかな野菜と塩だけで過ごし、寝る間も惜しんで勉強したのだった。27歳で科挙に合格して官界に入り、29歳で范姓に戻った。科挙に合格すれば、出自によらずに国家有用な人材として活躍できるという宋代の人々が抱く願望を実現したのだった。その後、范仲淹は国家と人民のために誠実に職務に勉め、37歳のときに低い位にありながら国家の抱える問題点を指摘する論文を朝廷に提出して人々を驚かせ、39歳のときにも国政の早急な改革を訴える文章を宰相に提出した。以降、常に堂々と物を言い、言説通りに行動し、昇進と左遷を繰り返した。景祐3年〔1036年〕に当時の宰相呂夷簡を激しく攻撃して左遷され、それを弁護した歐陽脩が夷陵に流された。その後で宋朝は夏国との戦争で苦境に立ち、范仲淹を左遷先から西北の前線に移し、事後処理に当たらせた。范仲淹は宋の防衛体制をみごとに立て直したのだが、朝廷の命令に従わない独断専行が多いとして、職務を外された。慶曆3年〔1043年〕、范仲淹は副宰相になり長年抱いてきた国政改革のプランを実行に移した。しかし、保守派の強烈な反撃に遇い、皇帝の改革熱があっさり冷

めてしまったために、翌年には范仲淹は朝廷から去らなければならなかった。その後は、地方の知事を歴任し、様々な事績を挙げて、64歳のときに病を押して新しい任地に赴く途中で亡くなった。蘇軾が17歳のときである]

## 【訳文】

慶暦三年[1043年]のこと、私は八歳で土地の学校に入った。間もなく、ある文士が都から石介の作った『慶暦聖徳の詩』を携えてやってきた。学校の先生がそれを読んでいるのを私は横からのぞき見た。

それが現在特に優れる十一人を讃える詩であると聞いて、

「どのような方々なのでしょうか」

と、私は先生に尋ねた。

「君のような子どもにはまだわかるまい」

と、先生は言った。

「それが天の上の人であるのならわからないということもあるでしょう。でも、同じ地上の人であるのならわからないことはないはずですよ」

私の返答に先生は驚き、その詩を読んでくれた。そして、

「このなかでも韓琦、范仲淹、富弼、欧陽脩の四人は人傑である」

と、言った。

このときはまだきちんと理解できたわけではなかったが、四人の名ははっきりと記憶に刻まれた。

二十二歳のときに[科挙に受験するために]都に行くと、范仲淹はすでに亡くなっていて、欧陽脩が記した墓誌を読み、私は、

「その人のあることを知って十五年、しかし、ついにお顔を見ることがかなわなかったのは運命なのだろうか」

と、嘆き悲しんだ。私は科挙に合格し、初めて欧陽脩に会うことができ、その紹介で韓琦とも富弼とも会えた。三人は口を揃えて、

「残念なのは君が范仲淹に会えなかったことだ」

と、私に言った。

それから三年後に私は許州で范仲淹はんじゅんかんの次男の范純仁はんじゅんじんに会い[これは母の喪が明けて都に上る途中のこと[→作品番号 01-2-040]]、また六年後に都でその弟の范純礼はんじゅんれいに会い、さらに十一年後に末の弟の范純粹はんじゅんすいと同僚になった。皆と会ってすぐに旧知の仲のようになった。

私は范兄弟から父上の遺稿を託され、文集を編集して、それに序文を添えてほしいと頼まれた。それから十三年が経ってしまようやくその約束を果たせるに至った。

范仲淹の功績と徳は、その文章があって初めて世に知れるのではない。その文章は、序文があって初めて世に遺されるのではない。それでも文集を編集し序文を記すのをあえて辞退しないのは、八歳で范仲淹を敬うことを知って四十七年になり、他の三傑とは交わりを結ぶことができたのに、范仲淹一人とは知り合えなかったのを平生の恨みとし、その人の書いた文章の脇に我が名を掲げることでその人の門下生の最後の一人であるかのようにになれるのならば、ついに願いを叶えたのに近かろうかと思うからだ。

古いにしへの立派な人々が天下のために貢献した事績を見ると、それを為しとげた基本的な姿勢は、国に仕えてから学んで得たものではなく、庶民のなかで暮らしていたときからすでに身に備わっていたものであった。漢の劉邦かん りゅうほうが天下を平定するのを助けた韓信かんしんは、劉邦と会った最初のときすでに遠い見通しを持っていたし、諸葛孔明も草庵に訪ねてきた蜀の劉備しよく りゅうびと初めて会ったときすぐに何をすべきかを語り、終生それを貫いた。人に尋ね、聞いたことを試してみ、成功したらよしとするようなことではなかったのである。

范仲淹は母上が亡くなって喪に服していた間に、天下のありさまを見て、いかりして民衆に泰平をもたらすかをつらつら考え、[39歳のときに]一万字に及ぶ文章を書いて時の宰相に送った。天下

の人々はその文章を読んだ。後に范仲淹が国政の改革に取り組んで副宰相にまでなっていたこと、あるいは平生に為したところのものは、皆この文章に記されていた通りであった。

范仲淹の遺稿二十巻をここに編み、詩賦は二百六十八、文章は百六十五に及ぶ。これらを見れば、范仲淹が仁義礼楽忠信孝悌を思うのは、飢えて食するのを思い、渴いて飲むのを思うのと同じで、片時も忘れようとしてもできなかったことであったとわかる。その心は火のように熱く、その情は水のように潤い、天性からしてそのようであった。慰めに、あるいは戯れに、もしくは瞬時に作った詩文であっても、その天性から出たものであるから、天下の人々はその真心に打たれ、争って師として尊ぶのである。

こうし  
孔子は、

「徳ある者には必ずしかるべき言葉がある」

と、言った。それはしかるべき言葉が初めにあってその人の口から出てくるのではない。徳のある人の口が発するからしかるべき言葉となるのである。

らいき  
また『礼記』には、

「私は戦えば必ず勝つし、子孫が私を祭るなら福を受けるだろう」

と、ある。これは戦いの能力について言ったのではない。礼に基づき、徳をもって戦うなら、必ず勝つことを言ったのである。范仲淹は戦う人生であったが、その怒りは徳から現れたものであった。

げんゆう  
元祐四年[1089年]四月二十一日。

【補足】[この序文に記されている通り、8歳の蘇軾は、かんき韓琦、はんちゆうえん范仲淹、ふひつ富弼、おうよう欧陽脩の4人の名を聞き、いつかその4人とともに天下のために働きたいと思った。范仲淹が手掛けた改革は頓挫し、後の課題として残され、蘇軾は自身がその担い手になることを志したのだった。范仲淹のように自身の信念を貫く生き方への憧れは、先の墓誌銘で見たはんぽう范滂を読んで奮い立った [→作品番号 01-1-042] ことと共通している。なお、蘇軾が読んだとここに記されている欧陽脩による范仲淹の墓誌は、宋代墓誌類の

傑作である。蘇軾も幾つかの墓誌類を書き、後に見ることになるが、人を感動させる力は欧陽脩によるものに遥かに及ばない。范仲淹が後々まで偉大な「忠臣」として仰ぎ見られたのはその墓誌によるところが大きいといっても過言ではないだろう]

## ■【01-2-004】史経臣兄弟

【解題】蘇軾が10歳のときに父の蘇洵は史経臣とともに長安を経由して都に行き、翌年に特別試験の制科を受け、2人とも不合格となった。史経臣がどのような人物であったのか、蘇軾は「豪偉の人」であったと評している。これは蘇軾が50歳を超えて都にいたころに書いたと推定されている文章。

### 【訳文】

我が父の友人であった史経臣は、字は彦輔、眉山の人であった。我が父と制科を受け、蜀中に名を馳せ、二人は世に知られる人物となった。史沆、字は子凝はその弟である。史沆は人を圧倒する才気があったが、徳に薄かった。史経臣の才気は弟に劣るものではなく、節義に篤かった。博識でよく弁じてよい文章を書き、『思子台の賦』は最も優れている。その作品は、漢の武帝と晋の恵帝は天資が遠く隔たっていたけれども、惑いから誤ったのは同じであったことを詠んだものである。史経臣はついに官に仕えることなく六十歳で亡くなった。子がいなかったので、我が父は葬儀を行い、一族の者をその跡継ぎとして立て、いまは農夫となっていて、特に評判を聞くことは無い。史沆も子がなかった。悲しいことである。

【補足】〔(1) この短文を書いた10年ほど後に、蘇軾はここに挙げている史経臣の『思子台の賦』を復元することを試みている。その序文に、上の短文とほぼ同じことを記し、弟の史沆は科挙に合格して官員になったことを付け加え、『思子台の賦』は若いときに読み、大意は記憶していても字句は忘れてしまったので、息子の蘇過に命

じて失われた賦を復元させた」と書いている。(2) 史経臣<sup>しけいしん</sup>が亡くなったのは、嘉祐<sup>かゆう</sup>2年 [1057年] の終わりのころで、蘇洵<sup>そしゆん</sup>は葬儀を行い、祭文<sup>さいぶん</sup> [亡き人の霊に捧げる韻文] を作り、後継者を定め、友人のためにできる限りのことをしている]

## ■ 【01-2-005】却鼠刀銘

【解題】これは蘇軾が10歳のころに作ったと伝えられている作品。鼠を退治する刀に寄せた銘文である。1句4文字の韻文で作られている。訳者には解し難いところがあるので、大意を取って訳す。

### 【訳文】

ここに鄙<sup>ひな</sup>びた男がいて、  
ひどく大切にしている刀がある。  
長さは一尺にも満たないので、  
剣<sup>まさかり</sup>とか鉞<sup>まさかり</sup>とかにはならない。  
環を連ねたような模様があつて、  
上から下までとりまいてる。  
よく磨くとその模様が現れ、  
手入れをしないと見えなくなる。  
この刀を得てからは、  
いつも随えて持っている。  
この刀があると、  
なんと鼠の害をたちまち取り除いてくれる。  
鼠は垣根に穴を開け、

建物や部屋に侵入し、  
すばやく床を跳びまわり、  
一日中ちゅうちゅう鳴っていた。  
怒鳴っても去らずに、  
なつめ  
粟も粟も齧ってしまい、  
杯やら瓶やらを舐めまわして、  
ひと粒残さず食べてしまうのだった。  
どこへでも走って行き、  
壁も登ってしまう。  
鼠の家には二つの門があり、  
こちらからひっこむと、あちらから出て、  
身が軽く、ずるがしこく、  
とても捕らえることができなかった。  
吾が刀が家にくると、  
なんと鼠は跡形もなく消え去った。  
ひどいものは集まって妖しいことをし、  
昼は群れをなして出てきて、  
互いに見合って騒ぎ、  
そこらで舞い踊り、  
家の主人とも混じってくらしていた。  
猫はそれを見ても嘸まないので、  
鼠は子を育て、  
我がもの顔で家を滅茶滅茶にってしまった。

吾が刀を磨いて、  
水のように澄み切ると、  
たちまち肅然<sup>しうぜん</sup>として鼠の痕さえなくなった。  
このようなことがあるとは、  
初めは信じなかったのだが、  
十日経っても驚くべきことにそのままだった。  
猫は鼠を捕らえるのを得手としていて、  
夜も昼も伺い見て、  
身を構えて目にするや走って、  
首を砕いて腹を破るのであるが、  
それでもついに鼠は去らなかつた。  
ただこの一尺の刀だけが、  
爪もなく牙もないのに、  
どうしてできたのか。  
鼠はどうして刀を畏れて、  
連れ立って逃げたのだろうか。  
ああ、この刀さえあれば、  
何もなくても、何も言わなくても、  
労せずして鼠を遠ざけられるのである。

【補足】[祖父の蘇<sup>そ</sup>序<sup>じよ</sup>はこの銘を見て大いに誉め、佳<sup>よ</sup>い紙を選んで写させ、装飾を施して壁に掲げたという]

【補足】[蘇<sup>そ</sup>軾<sup>しやく</sup>が祖父の蘇<sup>そ</sup>序<sup>じよ</sup>をどのように見ていたのか。後年、祖父について次の訳文に示すように語ったと、李<sup>り</sup>廌<sup>たい</sup>の随<sup>し</sup>筆<sup>ゆうだん</sup>『師<sup>あざな</sup>友<sup>ほう</sup>談<sup>ぼう</sup>記』は伝えている。李廌 [字は方

叔] は、蘇軾と同じ年の科挙に合格した李恂りじゆんの息子で、李廌自身も蘇軾と交流があったので、『師友談記』が蘇軾について伝えることは信憑性が高いと考えてよい。李廌は、蘇軾が科挙の試験委員長を務めたときに受験して不合格になったことは後に見るが、以下の記録はそのころのことである。なお、李廌は3年後の試験でもやはり不合格となり、官に就くのをあきらめ、鬱々として50歳で亡くなったという]

### 【訳文】

李廌：『師友談記』

東坡[蘇軾]は新たに東闕[都の官庁群の東側]の第に遷ったので、私は李之儀りしぎや秦觀しんかん[2人と蘇軾の弟子]とともに会いに行った。すると東坡は言った。

「今日、五月十一日は祖父の命日に当たります。祖父は非常に英偉えいゐな人で、人を超えた才気があり、書物は読まなかったものの、甚だ優れた見識がありました。長年、郷里の郊外に住み、畑は多くはなく、そこにはもっぱら粟を植えていました。そして田から取れた米も粟に換えて倉に蓄えていました。どうしてそうするのか知る者はいませんでした。こうして年々蓄えを増やして行って、およそ四千石ほどにもなったときに、眉州は大飢饉に見舞われました。祖父はすぐに蓄えていた粟を放出して、一族の者から外戚の者、さらには小作人や村の貧しい者に至るまで順にそれをわけてやり、誰も凶作の害を受けずにすんだのでした。ある人が、『どうして粟なのでしょうか』と尋ねると、祖父は『粟は堅くて長く保存できます。だから多く蓄えてしかるべきときに備えておけるのです』と答えたのでした。また、家のまわりにはどこも芋類を植えて、たくさん収穫できると、薪や藁を被せて蓄え、食が乏しくなって人々が困ったときに、大きな甑こしきで蒸して、門の外に並べ、ほしいと思う者に自由に取らせました。それで飢えずにすんだ者がいたのでした」

また、東坡はこのようにも言った。

「祖父は酒が好きで、村の老人たちと車座になって、高らかに歌いつつ大いに飲んだものです。

我が伯父〔蘇渙<sup>そ かん</sup>〕が科挙に合格したときに、同時に親戚の程舅<sup>ていきゅう</sup>も合格したとの報せが届きました。程の家は非常に富み、我が蘇家とは姻戚関係となっていて、子がともに官員となったのでした。程の家では、新たに官員となる者を迎えて祝宴を開く用意を始め、祖父に、『そちらではどのような準備をされているのですか』と、尋ねてきました。祖父は、『息子から手紙がきて、必要な物は全て用意すると書いてありました』と答えて、平然としていました。ある日、いつものように祖父が大いに酔っていると、そこに役人がきて、官員が着る衣服や使う諸道具等一切を詰めた囊を届けたのでした。祖父は頭に指先ばかりの小さな冠を載せていただけの格好で、酔っぱらったまま役人を迎え、あぐらで手紙を読み、それをまた囊に入れて担ぎ、食べ残しの牛肉やら何やらをまた別の囊の中におさめ、村の子供に担がせて家へと還りました。祖父が驢馬にまたがって町へと戻ってくると、町の人はもうそのことを耳して、なかには町の外に出て迎える人もありました。人々は二つの囊を担った祖父を見て大いに笑ったのでした。程の家の主人はそれを聞いて、そのざっくばらんなありさまに洩い顔をしましたが、心ある人々は奇<sup>めずらし</sup>いことであると感じ入ったのでした。

【補足】〔(1) 上の記録の後半にあるように、祖父の蘇序<sup>そ じょ</sup>は飾り気のない素朴な田舎親父であった。それを、蘇軾は恥ずかしがるのではなく、むしろ誇らしく思っていたことがこの話から伺い知ることができる。(2) 伯父の蘇渙<sup>そ かん</sup>が科挙に合格したのは、蘇軾が生まれる12年前である。科挙に合格した者は、一度故郷に帰って郷里の人々の祝賀を受け、改めて上京して官職に就くのが通例であった。科挙に合格するとは、現在でいえば、上級公務員試験にも司法試験にも合格した上に、オリンピックでメダルを獲得するくらいの快挙で、故郷ではお祭り騒ぎで合格者を迎えた。蘇渙と同時に合格者を出した程の家では、すでに合格者を輩出して財力もあったので、すぐに祝賀会の準備に取り掛かったのだが、蘇序は用意することなく〔実情としては用意したくてもできない〕、息子の帰りを待ったのだった。〕

## ■ 【01-2-006】 記里舎聯句

【解題】これは、蘇軾が十代の初めのころのことを、40年余りに思い出して書いたもの。張易簡ちやう い かんの学校での出来事であったのだろう。

## 【訳文】

幼いときのこと、同郷ていけんようの程建用ちやうけんよう、楊堯咨やうぎょうしと我が弟とともに、学舎てんで「天雨」の題で六言[一句が六文字]の聯句を作った。

程建用の句は、

「庭松偃仰如醉」[庭の松はまるで酔って伏せているかのよう]

楊堯咨はそれに続けて、

「夏雨淒涼似秋」[夏の雨は涼しくて秋のよう]

そして、私が、

「有客高吟擁鼻」[鼻を覆って風流人の声色を使って高く吟じる人がいる]

すると、弟は、

「無人共吃饅頭」[しかし、ここにはともに饅頭まんとうを食らう友さえもない]

これを聞いて一同が笑い転げた。いまから四十年余り前のことだ。

【補足】〔(1) 程建用は蘇軾と同じ眉州の人で、蘇軾よりも遅れて科挙に合格している。伯父そ かんの蘇渙そ かんと同時に合格した程舅てい けいの一族である。楊堯咨がどのような人物であったかは知られていない。(2) 蘇軾の句は、他の二人と違ってわかりにくい。これは、謝安しゃあんという南北朝時代の著名な文人の故事を用いて句を構成したものである。謝安は鼻が悪く、くぐもった声で詩を吟じたので、それを真似して鼻を覆って吟じるのがはやったという。故事を組み入れてユーモラスな句を作るのは蘇軾の得意とすると、それはもう少年のころに始まっていたのである。(3) 最後に蘇軾がひどく子

供っばい句を作ったので、皆は笑ったのであるが、蘇轍はたぶんまだ10歳にならな  
いころであったのだろう]

## ■【01-2-007】天石硯銘

【解題】蘇軾は12歳のときに、地中から掘り出した石を天然の硯とし、その銘を作  
った。これはそのことを37年後に記した文章。

### 【訳文】

私が十二歳のときのこと、(眉山びざん県の紗穀しゃこくこう行にあった宅地の隅で、子供等と地面に穴を掘って  
遊んでいたところ、珍しい石が出てきた。魚のような形で、表面がつやつやで、浅い碧色であっ  
た。表も裏も細かくきらきら光り、叩くとかんかんと音がした。試しに硯として使ってみると、うまく墨が  
すれて、水が貯まって残ることはなかった。

父は、

「これは天が生んだ硯である。硯としての徳が具わっていて、ただ形が十分ではないのだ」

と言って、私にくれて、

「これは、そなたの文字[文学ないし学問全般]が進むしるし祥であろう」

と言った。

私はこれを宝として使い、この銘を作った。

父上の言葉をいただき、

それに違えるようなことはしない。

徳を主とし、

あるものは形も完全である。

徳と形と、

どちらを取るのを願うのか。

形にとらわれてへつらう、

世間にはそいいう例も多い。

元豊二年[1079年]秋七月、私は罪を得て獄に下され、流されて家族は離れ離れに、書物は散り散りに乱れた。翌年こうに黄州に至ってからこの硯を探したところ、見つからなかった。それでなくなってしまうのだと思った。元豊七年[1084年]七月、(罪を赦されて黄州を離れて)舟で進んで当塗とうとに至り、書物を収めてある箱を開くと、忽然とこの硯がまた出てきた。甚だ喜び、息子の迨たいと過かに渡した。硯を入れてあった匣こぼこはあまり工なものではないけれど、父上たへが手ずから硯を受けるところを刻み、職人に仕上げさせたものであるから、これはほかのものと換えてはならない。

【補足】[(1) 蘇軾が12歳とは慶曆7年[1047年]で、その年の5月に祖父の蘇序そじよが亡くなり、制科せいこに落第した後で放浪の旅を続けていた父の蘇洵そじゆんが久し振りに帰郷した。その父が、蘇軾の学業が成就しるしする祥として天が硯を与えてくれたとみたのである。父はこのときの帰郷をきっかけに試験によってではなく己の学術によって身を立てようとの決意を固め、家に籠って学問に専念するようになった。(2) 硯を得手から数年後であろうか、蘇洵が息子の学業の進捗状況を確かめようとしたエピソードを、馬永卿ばえいけいの『元城語録』げんじょうごろくが伝えてくれている。『元城語録』は、元城先生げんじょうこと劉安世りゆうあんせいから馬永卿が聞いたことを書き留めたものである。劉安世は蘇軾より12歳下の友人で、蘇軾が最晩年に罪を赦されて海南島から大陸に帰還したときに、劉安世も同じように罪を赦されて帰還する途中で蘇軾と出遭い、2人はしばらく同道して日々に語り合った。あるとき蘇軾は60年近い昔のことを回顧して、以下に訳すようなことを話した]

## 【訳文】

馬永卿：『元城語録』

劉安世先生はこのように話された――

私は北へ帰るときに、東坡[蘇軾]と途中で会い、それぞれの船が前後して進み、しばしば会って話し、間が三日もあくようなことはなかった。あるとき、東坡は少年のときにその父[蘇洵]とともに鄭公[富弼]の『使北語録』[富弼が北の遼国に皇帝の使者として行ったときのことを語った記録]を読んだことを語った。『語録』を読み進み、鄭公が遼国の王に次のように説いたところに至った。

「兵を用いれば[つまり戦争をすれば]、士や馬が失われ、国家はその損害を受けます。一方で、人臣は地位が上がったり褒賞を与えられたりして、利を得ます。ですから、貴国の大臣で用兵を勧める者は、自身のためにそれを計っているのであって、貴国のために計っているのではないのです。王様の明知によって利害の所在がどこにあるのかがおわかりになれば、きっと兵を用いたりはなさらないでいきましょう」

三人[蘇洵、蘇軾、蘇轍]は、その言説が明白で、機微を突いていることに感じ入った。父は息子たちに向かって言った。

「昔の人で、同じようなことを言った者がいたろうか」

東坡は答えた。

「漢代の嚴安が同じような趣旨のことを言っていますが、これほど明白ではありませんでした」

父は笑って同意した。

劉安世先生はさらにこのように話された――

諸先輩方は必ずこのようにして書物を読んだのである。学問は実際に役立つことを貴ぶのだ。そうしないのは腐れ儒者である。

漢の武帝のときに嚴安は兵を用いることを諫める意見書を皇帝に差し出した。その主旨は次のよう

であった。

「いま南方えびすの夷やの国ろうである夜郎きょうどを従えて朝貢させ、北西では匈奴りゅうじょうの地に深く入ってその竜城を焼き、朝政を議論する者は、それはよいことであるとしています。しかし、これは人臣にとって利となるもので、天下の長久の策ではないのです」

鄭公の言説の源はここにあったのである。

【補足】[以下にかなり長い補足を記す。(1) 富弼ふひつが北方の軍事大国である遼国りょうに行つて、遼国の皇帝に上記のようなことを説いたのは慶曆2年 [1042年] のことで、蘇軾はそのとき7歳だった。蘇軾父子はそれから10年ほど後に、外交上の一大事を巡つて、古典を引用しつつ話し合ったのである。それで、劉安世りゅうあんせいは「学問は必ず実際に役立つことを貴ぶ」と弟子に教えたのである。(2) 富弼が遼国に派遣された経緯を簡単に記しておこう。宋国そうこくの北方には契丹族きつたんの建てた遼国があり、軍事的に見れば、当時の中国大陸の主役は遼国であった。遼国は、宋国側が本来は自国の領土であると認識している広大な土地を占拠し、そのような状態は宋国の建国以前から続いていた。宋国はそこを取り返そうと挑んだものの連戦連敗で、一度は宋の都近くにまで遼国軍に攻め入られたこともあった。宋はかろうじてそれを退け、多額さいへいの「歳幣」[毎年支払う定額の賠償金]を宋側が贈ることで講和が成り立った [これを澶淵せんえんの盟めいという]。それは景德元年 [1004年] のことで、それによってようやく二国間の国境線が安定化した。ところが、40年ほど経つて、遼国は宋国が講和の条件を守っていないと難癖を付け、一部領土の割譲を要求し、もしも応じないのなら武力行使をあり得ると、国境付近に軍隊を集結させて脅しをかけた。宋側は不当な要求であると強く反発し、朝臣の多くは実力行使もやむをえないと声高に主張した。それこそ遼国側の思うつぽで、客観的に見れば軍事力の差は歴然で、戦えば宋側に勝てる見通しはほぼなかった。宋国皇帝は和平交渉に命運を懸け、宰相の勧めで富弼を遼国への使者として送った。実は宰相は富弼を嫌い、和

平交渉は必ず決裂して遼国皇帝は富弼を斬るであろうから、それによって宋の国論が沸騰するのに乗じて開戦に踏み切ろうと考えていた。富弼自身は遼国の不当な要求に怒っていたのだが、皇帝の心中を察し、また彼我の軍事力の差を正しく認識してもらったので、死を覚悟して遼国に赴き、遼国皇帝に戦争を思いとどまらせようと懸命に説得に務めた。そのときに宋と遼のどちらに義があるかといったことは論じないで、もっぱら遼国皇帝にとって戦争は本当に得になるのかということ論じた。上の訳文にあったのは、戦争は一部の臣下の得にはなっても、遼国皇帝には得にならないと説いた部分である。さらに富弼は、今後の交渉によっては「歳幣」が上積みされて、それは丸々遼国皇帝の得になるからと、和平への道に誘った。このときの直接交渉の後にも富弼は、朝臣の反発や宰相の妨害に遭いながらも困難な交渉を続け、ついに戦争を回避することに成功した。(3) 蘇洵が「昔の人で、同じようなことを言った者がいたかどうか」と尋ねたのは、息子が史書をどれだけ真剣に読んでいるかを確かめるためで、蘇軾はそれに対して的確に答えたのだった。嚴安の言説は、漢代の歴史を記録した『漢書』に記されていて、『漢書』は科挙を受ける者にとっての必読書で、読んで理解しているだけでなく、重要な箇所は完全に記憶していなければならなかった。科挙では小論文が課せられ、『漢書』などの古典を縦横に引用しつつ議論を展開する必要があったし、政治の実践は必ず古典に基づくものであると考えられていた。(4) 嚴安が何を言ったのかももう少し詳しく見ておこう。小竹武夫訳『漢書』(ちくま学芸文庫、1998年)から当該箇所を以下に引用する。「……いま南夷を徇え、夜郎国を朝貢させ、羌隗を降し、葷州を攻略し、城邑を建置し、また深く匈奴の地に入って、その竜城を焼きはらい、議者たちはこのことを賛美しました。しかしこれは人臣の利であって、天下長久の策ではありません。いま中国に狗が吠えて警めるほどの事変もないのに、国外で遠方に対する備えにわずらわされ、国家を疲弊させているのは、民を養うこと子のごとくにする所以ではありません。

ません。限りなき欲望を行のうて心意を満足させ、怨みを匈奴に結ぶのは、辺境を安んじる所以ではありません。禍は相連引して解けず、兵が休んではまた起し、辺境に近い者は愁え苦しみ、遠い者は驚きみだれる、これは持久する所以ではありません」。つまり、厳安は外国と戦って勝っても、一部の者の利になるだけで、国のためにはならないと説いたのである。(5) この蘇軾親子の議論を引いて、南宋時代の周煇は、『清波雜志』という随筆の中で、類似の言説を史書から探して並べている。戦争はそれによって利益を得る者によって引き起こされるといのはいつの時代でも教訓とすべきことであるので、その記事も訳しておく]

### 【訳文】

しゅうき せい は ざつ し  
周煇：『清波雜志』

私周煇が調べてみると、『三国志』の顧雍伝に、次のような記事がある。

ご そんけん  
呉の孫権のもとで、国境を守る諸将はそれぞれが功績を立てようと、敵に攻撃を仕掛けるためのいろいろな提案をした。孫権はそれらについて顧雍に尋ねた。顧雍は言った。「兵法は小さな利を戒めます。これらの者が述べているのは、自分のために功名を得ようとするものであって、国のためになるものではありません」

し じ つ かん  
また『資治通鑑』には、次のような二つの記事がある。

とう ぶ とく とく っ けつ ていげんじゅ けつ っ り  
唐の武徳五年に突厥が国境を犯した。鄭元璠は突厥の王の頡利のもとに行ってこのように言った。

「唐と突厥は風俗が同じではありません。突厥が唐の土地を得ても、そこを居住地とすることはできません。また我が方の人間を獲てそちらに連れ帰っても、何の役にも立ちません。それよりは軍団を返して、和平を結び直したほうが、面倒な労力を使うことなく、座して財産を受け取れましょう。それらはみな王様の庫に収まります。貴国と我が方との長年のよい関係を棄てて、子孫に及ぶまでの怨みを結ぶのとどちらがよりよいのでしょうか」。頡利はこの言葉を悦び、兵を引いて還った。

唐の開元六年、吐蕃は和を求めてきた。忠王は皇帝に申し上げること求め、和親の利を説いた。玄宗皇帝は同意しなかった。忠王は懸命に説いた。「辺境で事があれば、將軍や役人はどさくさに紛れて国の物を盗んだり隠匿したりします。嘘の功績を報告し、昇進しようとします。これは奸臣どもの利になるだけで、国家にとっての福にはなりません」。それで玄宗皇帝は和親を許した。思うにこれらはいずれも巖安の言説を祖述したものである。後に、蘇東坡は同じ説を『鄭公神道碑』の初めに置いたのである。

【補足】〔(1) 最後に記されている『鄭公神道碑』とは、元豊6年〔1083年〕年に富弼が亡くなった後で、富弼の墓に至る道、すなわち神道に建てる碑に刻むために蘇軾が書いた文章である。後の章にその訳文を掲げるが、遼国皇帝との交渉過程が詳細に記されている。(2) 蘇軾が父とともに富弼の外交記録を読んだころには、蘇軾も父も遼国や西方の夏国には対しては毅然とした姿勢で向き合うべきだと考えていたことが、他の文書からは見えてくる。とりわけ遼国に毎年贈っている「歳幣」は宋国の民衆にとって重い負担となっているし、そもそも不名誉なものであるので、いずれ断固たる措置によって廃止すべきであると考えていた。だから、「歳幣」を増額した富弼の和平交渉は必ずしも成功であったとは見ていなかった。蘇軾父子が感心したのは、道義よりも利を優先する遼国皇帝の食欲さをうまく利用して和平に応じさせた富弼の手腕の巧みさであった。蘇軾はその後は平和をより重んじる方向へと徐々に姿勢を変化させ、朝廷の議論が武力を行使する方向に傾いて行ったときには、抑制的な主張を唱えるようになった〕

## ■ 【01-2-008】 子由幼達

【解題】聯句で饅頭の句を詠んで学友を笑わせた蘇轍も、それから数年もすると、兄のレベルに早くも追いつくようになり、兄弟で切磋琢磨し合うことで、2人の学業は驚くべきスピードで進展して行った。兄弟には共通点が多くあったが、異なる点もいろいろ

あり、むしろそちらの方が注目されがちである。父の蘇洵<sup>そじゆん</sup>は2人の違いを最初から見通していたかのように、2人の名の由来について次のように記している。これは蘇軾が14歳のとき、皇祐元年〔1049年〕に書いたと推測されている。なお、「軾」<sup>しよく</sup>の原義は馬で曳くようなタイプの車の前に付けた横木で、遊園地のジェットコースターの安全バーのようなもの。「轍」<sup>てつ</sup>の原義は車輪の通った跡、すなわち「わだち」である。

### 【訳文】

蘇洵：『名ニ子説』〔二子に名づける説〕

車に具わっている輪<sup>りん</sup>〔車輪の輪の部分〕、輻<sup>ふく</sup>〔車輪のスポークの部分〕、蓋<sup>がい</sup>〔車を覆う幌の部分〕、軾<sup>しよく</sup>〔車体の枠組み〕にはそれぞれのきちんとした役割がある。軾はどうなのかというと、それがなくても車は十分にその機能を果たすことができる。そうはいっても、軾を取り除いてしまうと、完全な車であるとは見えなくなる。

我が子、軾よ、そなたは外側をきちんと飾ることを気にかけてないようだ。だから、無用なようでも完全であるためには必要な軾をもってそなたの名にした。

天下の車は轍<sup>わだち</sup>を付けないものではなく、道に轍があれば天下の車はそれに準拠して進もうとする。しかしながら、車の性能をいどきに、轍が関わっているとされることはない。その一方で、車が倒れて巻き添えになって馬が死んでも、轍に非難が及ぶことはない。轍というものは、福の面では恵まれないけれども、禍<sup>わざわい</sup>の面では及んでこないのです、ちょうど両者の間にいることができる。

我が子、轍<sup>てつ</sup>よ、そなたは跡を残して天下の人がそれに拠るようになるとしても、きっと福からも禍からも免れるに違いない。よって轍をもってそなたの名にした。

【解題】この項の表題として掲げたのは、蘇軾自身が少年時代の弟のことをどのように見ていたのかを記した短文。執筆年代はわかっていない。表題は「子由〔弟の字〕」

は幼いときから達<sup>たつ</sup>であった」で、「達」とは、物事の道理や軽重についてよく理解して、とつぴなことを考えたり、軽はずみなことをしたりしないという意味であろう。上の文章で父が記していた通りに、弟は自ら規範とすべき「轍<sup>わだち</sup>」を残し、「轍」からはずれることがないのだった。といっても、これは兄と比べたらそうであるということ、蘇轍<sup>そてつ</sup>にも父や兄に似て不軌なところがあった。

### 【訳文】

弟が達<sup>たつ</sup>であったのは、幼いときからで、自然とそうであったのだ。

父と私はひどく書画を好み、書画を集めることをこの上ない楽しみとしていた。弟は書画を観ても、眺める程度で、さほど気にもとめなかった。だから、いまに至って、弟に先を見通す目があるのはなるほどと思えるのである。

【補足】〔(1) 蘇軾兄弟は成長するにつれて、張易簡<sup>ちやういかん</sup>の学校で学ぶだけでなく、劉巨<sup>りゆうきよ</sup>や史清卿にも指導を受けた。それぞれの先生に得意とする分野があったのだろう。劉巨<sup>しせいけい</sup>には家定国<sup>かていこく</sup>、家安国<sup>かあんこく</sup>、家勤国<sup>かきんこく</sup>の三兄弟も師事していた。三兄弟の名はこの後、時折見ることになる。眉州<sup>び</sup>は都から遠く離れ、蜀<sup>しよく</sup>の中心都市である成都<sup>せいと</sup>からも数十キロ離れた田舎の小さな州であったが、蘇軾より一世代ほど前から続々と科挙の合格者が出るようになっていた。天下の秀才が挙って受ける科挙で勝ち抜けるだけの力を養える基盤が眉州には具わっていたのである。その背景としてもともと蜀が文化の先進地であったことがある。唐王朝<sup>とう</sup>が衰亡すると、蜀<sup>おうけん</sup>では王建が地方政権を樹立して、他の地域に比べて平穩であったことから、唐朝の文化人が続々と避難してきた。王建は文化人を保護したので、唐王朝の文化は蜀の地で生き延びたのだった。王氏の政権は外からの武力によって一度は滅ぼされたものの、孟氏<sup>もう</sup>が再び地方政権を樹立し、やはり唐朝文化を継承した。しかし、孟氏の政治は乱脈で、文化は奢侈に流れ、勃興してきた

宋王朝にもろくも滅ぼされたしまった。当初、宋は蜀に対して暴力的な統治を進め、成都にあった文化遺産を略奪して都に運び、蜀の民から激しく収奪した。それは当然、蜀の民衆の反発を受けて、反乱が相次いだ。宋がようやく融和政策に転じたことで、蜀は落ち着き、富を蓄積して、本来の文化的な力を發揮して、優秀な人材を続々と中央に送り込むようになった。(2) 少年時代の蘇軾は部屋に籠ってひたすら勉強していたわけではなく、上の文章にあった書画のほかにもいろいろなことに興味を持ち、硯や筆のような書画の道具、植樹、農耕、医学、音楽にも及び、野山を歩き回ることも好んだ。岩を跳んですばやく溪谷を遡って弟を驚かせ、山奥で隠遁生活をする道士から自然の中で生きる術を教わったこともあった。科挙に合格して范仲淹はんちゆうえんや歐陽脩おうようしゅうのような立派な官員になるという目標は変わらなかったものの、自然への憧れは強く、張易簡ちやうしに『老子』と教わったこともあって、道士になりたいとの思いも打ち消しがたいくらいにあった。そのために結婚話が持ち上がりそうになると、蘇軾は懸命に避けてまわったようである。当時は、早くに結婚して落ち着いた方が勉強にも打ち込めると思われていたので、二十歳前に結婚するのは珍しくなかった。なお、道士の多くは最終的には仙人となって現世を超越することを目指し、それが現実的に可能であるかどうかについて、蘇軾は明確な判断を示していない。(3) 蘇軾が結婚に乗り気ではなかったことには別にもう一つの理由があったと推測することも可能であろう。それは蘇軾が17歳のときにすぐ上の姉が嫁ぎ先で病死したことであった。その顛末について、父の蘇洵は当初黙して胸の内に押し込めていたのだが、娘の死から7年が経って、ようやく鬱屈していたものを吐き出した。それが次に訳す『自尤』じゆうという題の詩である。「尤」とは「とがめる」という意味で、『自らをとがめる』という題である]

蘇洵：『自尤』

序文

私は生まれてからずっと他人を害するようなことはしてこなかった。村で育った幼いころも、大人になって遠く旅するようになってからも、きちんとした人とはばかり付き合い、不義を為すような人からは遠く離れていた。五十一歳になったいまに至るまで、人から尤められたことはなく、人を尤めたこともなかった。たった一つの例外を除いては。

思うに、壬辰の歳〔皇祐4年〕に我が末の娘を喪ったとき、その始めにその夫の家を尤めたのだった。いまは我が身を深く尤めている。

我が娘は幼いころから学問を好み、正しいことを貫こうとする気概は男以上に強いものがあり、文章を書けばしばしば私を喜ばせるものがあった。娘は十六歳で我が妻の兄の程濬の息子の程之オの妻となった。そして十八歳で死んだ。

程濬は儒学を修めた者であったのに、その普段の振る舞いには不謹慎なところがあり、その妻は好いことを尤め、無法の行いをしていて。我が娘はその家の人々のありさまを見て、心に楽しまないところがあった。我が娘が病気になったとき、その夫もその舅もその姑も全く顧みず、さっさとこれを棄てて死に至らしめた。

娘が死んだとき、私は怨み、我が郷里の人々も程濬が不実であるとした。

我が友人が深く悲しんで私に言った。

『君はなぜ程濬を尤めるのかな。君は程濬が賢者であると思って娘を嫁がせたのではなかったのか。過ちは、人をきちんと選ばなかった君にあるのではないのかい。なのに誰を怨もうというのか』。

私はそれを聞いて深く悲しんだ。

それから(足掛け)八年が経ち、私は自分を尤めるこの詩を作った。

## 詩

五月のいずれの日であつたろうか、  
一人の女が死んだ。  
何も訴えることができずに、  
この女は無理やり死なされたのだった。  
この女の父は意気地なして、  
この女の無実の魂を小さな塚に埋めてやることしかできなかった。  
生と死、長寿と短命は定めなきものであるから、  
これも仕方ないということにしてしまつてよいのだろうか。  
この女の死は人々を驚かせ、  
聞く者は顔をつらそうに歪めた。  
この女の家は代々学問を好み、  
この女は女ひと通りのことだけでなく、  
書物を読むことも文章を書くこともきちんと教えられた。  
家は貧乏だったけれども、  
あえて裕福な家に嫁がせようとはしなかった。  
父は釣り合はぬのは不幸のもととなるのを恐れていたのだ。  
この女の母の兄が、この女を息子の嫁にほしいと求めた。  
人々は母の家は豪族であるからまことによい話だと言つた。  
この女の父はそういう理由ではなしに、  
母の兄も学問を好み、  
役人としても立派な人であると思つたので、  
この女は十六歳で嫁いだ。

嫁いだその日から、  
この女には憂いばかりが増え、  
喜びというものがなくなってしまった。  
里帰りしたときに、  
この女は両親を見て泣いた。  
自分の家のことは言えませんが、  
この女は口を閉ざしたけれど、  
およその様子は知れた。  
舅も姑も夫の姉妹も道理をわきまえず、  
家の中はでたらめなことになっていた。  
この女は元來曲がったことが大嫌いで、  
しかし、たった一人ではどうすることもできず、  
見て見ぬふりをするのもまた辛いことであった。  
この女の父は心の内で憤りを発したけれど、  
妻として夫を諫めてよき方向に導くようにしなさいと諭した。  
この女は父に言われた通りに努め、  
翌年には子を授かり、  
嫁としてまずはひと安心ということになったのだが、  
この女はじきに病気になる、  
家の者は誰も看病しようとしなかった。  
この女の母はそれを聞いて憂いに沈み、  
この女の父はただ驚くばかりであった。  
このときこの女の舅は愛妾に溺れ、博打に興じていた。

この女の父はどう娘を家に連れ帰ることにした。  
舅は「えせ学者め」と女の父を罵り、  
言うのものはばれるようなごたごたの末に、  
この女は里に帰ることができ、  
十日余りで薬が効いてきて快方に向かい始めた。  
病の根を断つまでには至らずとも、  
息が通って、滋養のあるものを少しずつは食べられるようになった。  
しかし、舅と姑はこの女の再生を許すまいとしたのか、  
悪巧みを巡らして、この女を連れ去った。  
「ここにはどんなことがあっても二度と帰らせないぞ」  
舅と姑が吐いた言葉を、  
病んだこの女はどのような気持ちで聞いたのだろうか。  
この女の父と母は泣けなかつた。  
この女の病はたちまちもともどり、  
三日の間放置されて死んでしまった。  
この女が不義をなす者であったのなら、  
死んでも何も言えないだろう。  
この女は、正しいこと、慎ましかであることを好み、  
鋭敏で明晰であったのだから、  
このような譴責を受けなければならない理由はどこにもなかつた。  
この女の父は天を仰ぎ見て、  
信じるに足るものはどこにあるのかと思わないわけにはいかなかった。  
このことを聞いた者は、

この女の父には勇気がなくて、

この女が罪なく死んだことをはっきりさせないのを不満とした。

この女は果たして恨まずに死んだのか。

誰かの罪である<sup>とが</sup>と尤めつつ死んだのか。

この女の父はそのことを思っ<sup>て</sup>ずと苦しんだ。

宝玉などというものはもともとは価値あるものではないのだから、

溝に棄てたところで少しも構わない。

親として大切に育てた娘を野に棄ててよいものか。

ああ、罪はまさしくこの女の父にあったのだ。

【補足】〔(1) 蘇洵<sup>そじゆん</sup>は、娘が婚家で虐待死させられたことに対して、そのときには黙って泣き寝入りするしか手がなかった。ここに記されているように、婚家の主人である程濬<sup>ていしゆん</sup>は妻の兄であり、科挙に合格したお役人様であった。程家はもとより土地の有力者で財産家であったのに対して、蘇洵の家はもともとは商人で、兄がようやく官員になったものの、蘇洵自身は貧乏な浪人暮らしであった。娘の死から7年後にようやく思いを吐き出しのたは、その間に2人の息子が科挙に合格し、また妻がすでに故人となったからだ。 (2) 姉の死と、父の苦しみを間近に見て、蘇軾が結婚により消極的になったと推測するのはさほど見当はずれではないだろう。それでも、周囲に強く勧められて、19歳のときに王弗<sup>おうふつ</sup>と結婚した。王弗は眉州<sup>び</sup>の青神県<sup>せいしん</sup>の名家の娘で、そのとき16歳であった。弟の蘇轍<sup>そてつ</sup>は結婚を渋ることもなく、兄に後れること1年ほどで結婚している]

## ■ 【01-2-009】 正統論

【解題】父の蘇洵<sup>そじゆん</sup>は息子たちに古典を学ばせるだけでなく、同じ時代の人々の著作も

読ませ、とく<sup>おうようしゅう</sup>欧陽脩の文章をまねて書くように指導した。蘇軾は1日に数千字の文章を作って修練したと弟が墓誌銘に書いているように、おびたしい数の詩文を作ったのだらう。それらは練習作品としてほとんど残されておらず、すでに訳した銘や詩と、ここに訳す『<sup>せいとうろん</sup>正統論』という論文が伝わるくらいである。これには「至和二年〔1055年〕の作」とわざわざ添え書きがあり、世に出る前の蘇軾の文章として珍しがられたのだらう。「<sup>せいとうろん</sup>正統論」とは、例えば、魏、呉、蜀<sup>しよく</sup>の三つの王朝が並び立った三国時代に、どの王朝が正しいとするのかの議論である。皇帝とは天に託されて人民を統治する存在であって、天は複数の皇帝を選ぶはずがないから、この地上に正しい皇帝は一人でなければならない〔先に遼<sup>りょう</sup>国皇帝と訳者は記したが、宋国<sup>しゅう</sup>の人は決してそのように記すことはなく、「遼主」と書いた〕。歴史家が歴史を記述する際にどれかの王朝を正統であると選んだならば、その根拠を示す必要に迫られるだらう。欧陽脩は歴史家でもあったので、<sup>せいとうろん</sup>正統論に関する論文を書き、それに対して章望之<sup>しょうぼうし</sup>が反論を書いた。蘇軾はその二つの論文を踏まえて独自の議論を展開し、欧陽脩の側に立つと結論している。蘇軾は、正統の判断基準に「実」と「名」の二つがあるとし、重・軽、賢・不肖、貴・賤といった幾つかの二項対立の概念を使って、「実」と「名」の複雑な相克を論じている。かなりごちゃごちゃした議論で、理解するには相当に骨が折れ、苦勞してある程度わかったところでさほど有益ではないので、冒頭の部分だけを訳す。後に巨大な歴史書である『<sup>しじつがん</sup>資治通鑑』を編集した司馬光<sup>しぼこう</sup>は、誰もが納得できるような普遍的な判断基準は存在しないので、正統か否かを論じることはしないと宣言している]

### 【解題】

正統とは何か。「名」によるのか、「実」によるのか。

正統の語義はこうである。

「<sup>せい</sup>正とは、天下が正しくないのを正すという意味である。<sup>とう</sup>統とは、天下が一つでないのを合わすという意味である」

不幸にして、天子としての「実」がありながら、天子の位には就いていない者がいて、一方に、天子としての「名」がありながら、天子としての徳がない者がいるときに、そのどちらが正しいとして一つに合わせるのがよいのか。それを決めようとするのが正統の議論である。

正統を論じるのは、天下を保つために重要だからである。名も実もある人がいるのならば議論するまでもない。もしも、その実がないのに名を得ている者がいるときに、実がないからといって名をなくすことはできない。しかし、名があるからといって、それだけで実があるようにすることはできない。だから、名は軽く、実は重いのであって、実があるときには名がなくてももはや天下を争うことはないのだが、名はあっても実がないときには天下は実のある方へ動いて行くであろう。

……[以下、省略]……

【補足】<sup>しお</sup> [至和2年 [1055年] は蘇洵<sup>そじゆん</sup>にとって大きな転機となった年である。蘇洵は息子たちの勉強ぶりを見てすでに天下に通用するレベルに達していると確信し、一方で、自身も十分に学問的修練を積んだとの手応えがあったのだろう、年譜で示したように、都から<sup>しよく</sup>蜀に派遣されてきた<sup>ちやうほうへい</sup>張方平や<sup>らいかんふ</sup>雷簡夫に会いに行き自己を売り込むとともに、息子を連れて都に行くことを決意したのだった。嘉祐元年 [1056年] 春、蘇洵は郷里を發ったのだが、それに先立って、蘇一族の人々を<sup>そしぞくふてい</sup>「蘇氏族譜亭」に集め、次に訳す文章を示した。蘇軾が一族の系譜を編んだことは先に見ていて、「蘇氏族譜亭」はそれを納めるために作った小さな建物である]

<sup>そじゆん</sup> 蘇洵:『<sup>そしぞくふていき</sup>蘇氏族譜亭記』

一介の庶民であってもその村を教え導くような人であるならば、私はその人の言葉に耳を傾ける。

国に君主がいて、町に大夫たいふがいる。争いごとが生じたときには、君主や大夫に訴え出る。村にはしょう庠[学び舎]があり、町には学校がある。道みちを学ぶ者はそこで教わる。

村人で、家の中で善くないことをしている者がいると、村の人々は誰もが、「あの者の言うことは誰も聞かないようにしよう」と、言う。村人はどうしてそのように考えるのか。思うに、そうなるのは初めから積み積もってきたものがあって、順にそこにまで至るのである。[以上は、道義によって地域が正しく治まる経緯を記している]

我が一族が一族としていまなお関係が保たれているのは百人くらいでしかない。しかし、毎年の祭事に全ての人が集まって喜びごとを分かち合えるわけではない。次第に縁遠くなった者とは往来がなくなり、我が郷里の人々に一族の間柄であることを示せなくなってしまう。

私は『蘇氏族譜』を作り、高祖こうそ[四代前の先祖]の墓の西南に亭あづまやを立て、それを石に刻み、「ここに名のある者は全て、誰かが亡くなったならば必ず弔問に訪れるように。冠かん[成人の儀]のときや妻を娶るときには必ず知らせ合うように。幼して孤児になった者がいたときには、年長の者が必ず世話をするように。貧しくて行き場がなくなった者がいたときには、富む者が必ず保護するように。もしもそのようにしない者がいたならば、一族の者は挙って非難してよい」と、記した。

この歳の正月、一族一同は墓に詣まつでて奠まつり、その後で亭に列坐した。一人の老人が若い者たちを顧みて、嘆息しつつこのように言った。

「諸君等は、かつての吾が郷里の風俗の美しさを見ておらぬのだ。わしが子供のころは、もしも不義を為す者を見たならば、皆でそいつを憎み、化け物でも見てしまったかのように心がやすらかでなくなったものだ。その後、その風俗はやや衰えはしたけれど、不義を為す者を見れば軽蔑して笑ったものだ。しかし、いまは不義を為す者を見ても何とも思わなくなってしまった。そのように吾らの風俗を変えてしまったのは誰なのか。他ならぬあの人物なのだ。

あの人物は人の上に立つような者であるのに、吾が郷里の風俗を減茶減茶に乱してしまった。あの人物は速やかに人々を不義へと誘い、深く深く我らを害ったのだ。

あの人物には肉親の情というものがなく、その兄の子が孤児となったのを少しも憐れまないで、棄てて顧みなかった。あの人物には兄弟を助け合う心がなく、先祖の財産をその孤児に分け与えなかった。あの人物には節度がなく、孤児が訴訟を起こすとそれを打ち砕いた。あの人物には倫理観がなく、妾を愛して正妻の上に置き、息子とともに声色にふけて、家の中の秩序を破壊した。あの人物は飽くことなく財産を求め、富むことが賢さの証であるとして、廉恥というものを消し去ってしまった。

これらのことは我が一族は大いに取じてとても許容できないものであったのに、いまでは『あの人もやっているのだから』と我が郷里の人々全体を惑わすまでになってしまっている。

あの人物は高い地位にあって力があり、我が郷里ばかりでなく、もっと広い地域を惑わし、巧みな言葉で飾ってごまかし、人々を欺いている。

あの人物はまことは大盗賊なのだ。わしは皆に向かってこのことを言わずにはいられない。吾が一族の者を戒めないわけにはいかない。あの人物を見て我が身の戒めとして、決してあの人物と付き合ってはならない。あの人物と少しでも似たようなことをした者がいたならば、わしの目の届くところにそやつをこさせてはならない」

私はそれを聞いて懼れを抱き、そのことを書いてくれるように願った。老人は言った。

「そのことは書いてもよい。しかし、あの人物の名は書いてはならぬ。他人がそれを観てもあの人物が誰であるかはわからないだろう。しかし、あの人物が観たならば、顔が熱くなり、心の内で恥じて、冷や汗が出て食べ物喉を通らなくなるだろう。もはやあの人物を敬う者がなくなって、悔やんでくれたならそれでよいのだ」

私は承知して、それをこのように記したのである。

【補足】<sup>そじゅん</sup>蘇洵が<sup>そしぞくふ</sup>『蘇氏族譜』を作ったのは、一族の結束を固め直して、一族全体で道義的に正しい道を歩んで行くという目標を掲げることにあって、この文章でも、その前半にそのことが記されている。後半では、「一人の老人」が、郷里の倫理観を破

壊してしまった「ある人物」を徹底的に批判している。「一人の老人」とはむろん蘇洵その人である。では、「ある人物」とは誰なのか。南宋時代の文人、周密はその随筆『齊東野語』で明らかにしている]

周密：『齊東野語』

滄洲先生と程公許は眉山の人である。あるとき我が父とゆったりと語り合つて、蜀の古い事を話し、聴くべきことがたくさんあった。その中で、このようなことを言った。

蘇洵の『族譜亭記』に、郷里の風俗を悪くさせたある人物を批判して、その名を記していない。これは蘇洵にとっては妻の一族の程氏の者であつたので、その名を出せなかつたのである。つまり、ある人物とは妻の兄なのである。蘇洵は『自尤』の詩で、娘の嫁ぎ先について述べていて、娘は心ならずも死んでしまったことを詠み、その言葉は甚だ痛切である。蘇洵は怨み、程家との不仲は長い年月に及んだ。その後、蘇軾兄弟は母のことを思つて、程家と和解するようになった。程之才[蘇洵の娘の夫]は蘇軾の従兄弟である。蘇軾が南方に流されたとき、時の宰相は蘇家と程家の間には先代からの怨恨があると聞いて、程之才を本路の憲[蘇軾の流された地域の統治を監督する役]に任命し、蘇軾を脅かしてやろうと考えた。程之才は赴任すると、かえつて私的にも公的に蘇軾に篤く、盛んに交流があつた。蘇軾と程之才が唱和した詩に、その概略を見ることができ

【補足】[蘇洵が「一人の老人」が語つたとして、徹底的に罵つた「ある人物」とは、妻の兄の程濬だったのである。「あの人物が観たならば顔が熱くなる」と書いた文章をわざわざ石に刻んでから蘇洵は都に向かつたのである。妻の兄で、郷里の有力者に対して、激烈な啖呵を切り、後ろ足で砂を蹴つて去つたのである。もはや断じて程家の風下に立つことはないとの宣言であつて、蘇洵の胸の内には十分な勝算があつたのだろう。一方で、我々は妻の心中も察しなければならぬ。娘を失つた悲しみは

夫と共有するものであったろう。しかし、程家と間に挟まれて、妻は非常に苦しい立場にあった。蘇軾兄弟が幼いころは蘇洵は外に出ていることが多く、その間の暮らしは、妻が実家からの支援を受けて維持していたらしいことは他の史料から推測されるのだが、妻は夫にはそのことは秘していたようだ。妻はかねてから難しい立場にあったのだろう。こうして、夫が出て行った後で、妻は息子が科挙に合格するのを望みつつも、いかなる心境で郷里に一人残っていたのだろうか。蘇洵等が旅立ってほぼ1年後、合格の報せが届くか届かないかのときに、妻は亡くなったのである]

## ■ 【01-2-010】 書章警詩

【解題】 嘉祐元年 [1056年] 3月に郷里を発った蘇洵は、まず成都に行って再び張方平かほうへいに会った。張方平は蘇洵を推薦する歐陽脩宛おうようしゅうの手紙を書いてくれた。蘇軾兄弟もそのときに張方平に会い、しばし成都の名所を巡り歩き、李士寧りしねいという奇妙な人物と会った。李士寧はその後、著名人となって、当時の人々の著作物にしばしば登場するようになる。この蘇軾の文章は、初めて李士寧に会ってから30年ほど後に書かれたものである。

### 【訳文】

章警しょうきやう、字は隱之いんし、もとは閩州びんの人で、数代前に成都せいとに遷った。文章が得意であったが、官には仕えなかった。晩年に成都知事おうその王素ちゆうたいの推薦で、冲退処士ちゆうたいの号を賜った。

ある日、夢に人が来て、手紙を示し、章警を招いた。それは東嶽道士とうがくからの手紙だった。

その明る日、章警は李士寧りしねいと青城山せいじやうざんに遊んだ。水辺で足を洗いつつ、章警はにやにやしながら李士寧に言った。

「さて、西の溪の流れを踏んで、水とともに行くことにしますかな」

李士寧はそれに応じて言った。

「東嶽道士からもらった手紙を持っててしょうかな」

章簪はひどく驚き、李士寧がどうして夢のことを知ったのかわからなかった。

それから間もなく、章簪は果たして亡くなった[仙人になった]。

章簪の子の章禔しょうしもまた隠遁者であったが、小さな官の仕事に就いて死んだ。

李士寧ほしは蓬州の人で、普通ではないことを言い、道を得た人だという者もいた。百歳で死んだ。

私はかつて成都で李士寧と会ったことがあり、

「君にははなはだ貴い相がある。きっと科挙で首席になる」

と言った。果たしてそのようになったのだった。

【補足】[(1) この文章にその名が記されている章簪も東嶽道士も李士寧も仙界に遊ぶ人で、蘇軾はそのような人々に終生親しみを覚えた。李士寧は「科挙で首席になる」と予言したのだが、予知能力がなくてもわかるくらいに蘇軾の才気は外に溢れ出ていたであろう。(2) 蘇洵ら3人は長安を経由して5月ないし6月に都に着いた。蘇洵おうようしゅうは歐陽脩に手紙を送って面会を求めた。蘇洵にとって重大な局面を切り開くことになった手紙であるので、ここで読んでおこう。表題の最初に「上」とあるのは、朝廷の重要ポストにある人へ一介の庶民が差し出し手紙だからである。「歐陽内翰おうようないかん」とあるのは、歐陽脩は皇帝直属のアカデミーの一員として翰林学士という学士号を与えられていたからである]

### 【訳文】

蘇洵そじゆん:『上歐陽内翰書』[歐陽内翰おうようないかんに上る書たてまつしよ]

私蘇洵はその日の暮らしにも困る無位無官の者ではありますが、嘆息しつつ密かにこのように考えております。

天下の人は皆が賢人というわけにはまいりません。また皆が不肖というわけでもありません。ですから、世に賢人である君子がいても、君子が集まることもあれば離れることもあって、合えば必ず離れ、離れば必ず合うのであります。

先の時<sup>けいとき</sup>〔慶暦3年〔1043年〕〕に、天子〔皇帝〕にはまさしく政治に意欲があつて、范仲淹公が朝廷の中枢におられ、富弼公が枢密副使で、執事〔貴殿＝欧陽脩〕と余靖公、蔡襄が諫官で、尹洙公が都と地方の間を行き来して前線の地において力を尽くしていました。このときに、天下の人々は、髪の毛や米粒ほどのわずかばかりの才能がある者までも続々として起ち、一つに合わさつたのでした。私は自分自身を見て、愚かな無用の身で、その中に混じつて奮闘するに足りない者であると思ひ、退いて心を養ひ、幸ひにして学問の道<sup>みち</sup>が成就したならば、そのときになってから当世の賢人、君子と会うのがよろしかろうと考えました。

ところが、不幸にして、道がまだ成らないうちに、范公は西に出て、富公も北に出て、執事も余公も蔡公もそれぞれ四方に出て、尹公もまた勢いを失つて小さな官職で苦勞することになってしまいました。私はそのころは都にいて、近くでそのような変化を見て、がっかりして天を仰いで嘆息しました。こうして賢人が去ってしまったのでは、学問の道<sup>みち</sup>が成就したところで、何ら榮とする<sup>さかえ</sup>ことにはならないと考へたのでした。

また、このようにも考へました。先に君子が次々に朝廷の要職へと進んだのは、その始めにきつと善人〔具体的には、皇帝あるいは天命〕がそれを推したのでありましよう。いまはきつと小人〔賢人の逆で、愚かな不善を為す者、具体的には反動的な政治家〕がそれを邪魔するようになったのでありましよう。今の世にもう善人がいないのならどうすることもできません。そうでないのなら、私は何も憂うことはないのです。しばらく我が心を養つて、道を大きく成就させて、また善人の推すときがくるのを待てばよいだけなのです。

こうして、退いて故郷に居ること十年となり、道が成つたとは考へていませんが、胸の内は浩浩乎<sup>ひろひろ</sup>として、以前とは異なつて居るよに感じるよになりました。一方で、余公は南方で功を挙げ、執事と

蔡公は相次いで朝廷にまた昇られ、富公もまた外から戻って宰相になられ、その勢いはまた一つに合わさろうとしています。喜びかつ自ら祝って考えたのは、道もほぼ成就して、まさしく発表すべきときがここにきたのだと。その一方で思いましたのは、先に慕い望みながら会うことのできなかった人が六人いて、いま会いに行こうとしても六人のうち范公と尹公の二人はすでに亡くなってしまいました。私は<sup>さめざめ</sup>潸然と涙を流して悲しんだのであります。ああ、二人にはもう会えないのです。それでも私が<sup>たの</sup>特みとして、会って心に嬉しく思う者がなお四人おられるので、できればひと目だけでもそのお顔を見て、我が心より発するものを言ってみたくて考えたのでした。しかしながら、富公は天子のおそばにお仕えする宰相でありますから、遠い田舎<sup>かんし</sup>の寒士[窮乏の士]がにわかにものを申し上げることは叶わないと考えました。また、余公と蔡公は都から万里の彼方の外にあって、ただ執事だけが朝廷にあって、その位が非常に高いというわけでもなく、ならば何とかすがってものを申し上げることも可能かもしれないと考えたのであります。ところが、飢えと寒さと老いの病が私を田舎に閉じ込めさせてしまい、執事のもとに至ることができなくなってしまいました。それでも、慕い望みながら十年の間に会えないままに亡くなってしまった范公や尹公のような方もありますので、いまは四人がおられるときに、このまま言葉を通じないでいたならばどうなってしまうだろうかと思えば、己のために行けないくらいで決してあきらめてはならないと考えたのであります。

執事の文章は、天下の人でそれを知らない者はありません。一方で、密かに自分で思いますが、私こそがその文章を深く知っていて、天下の人に勝っていると考えたのであります。それはどういうことなのかというと[以下に、蘇洵がいかに歐陽脩の文章の特長を深く理解しているかを示す<sup>もうし</sup>]、孟子の文章は言葉は平淡でありながらその意を尽くし、難しく険しい語彙を用いていないのにその矛先は犯すべからざるものがあります。韓愈<sup>かんゆ</sup>の文章は長大な河が広々と渦巻きながら流れ、その中に<sup>よろず</sup>万の水の化け物が潜んで人を驚かせるかのようで、しかも抑制がきいて露骨に示すものではなく、人はその淵に潜む深く青い光を望み見て、自ずと畏れて避けて敢えて迫って視ようとはしません。執事の文章は、微細を尽くして曲折に富み、しかも流れるように意味が通じて途切れるこ

とがありません。十分に言い尽くして言葉が窮まったところで、一気に結論に迫るのであります。その上、穏やかで平易で、難しさは少しもないのであります。この三者の文章は、いずれも他とは断然異なる一家の文を成しています。韓愈の弟子の李翱<sup>りこう</sup>の文だけが執事の文章と雰囲気<sup>ふんぎ</sup>が似ていて、唐の名相の陸贄<sup>りくし</sup>の文章だけが執事の文章とその実質<sup>じしつ</sup>が似ています。しかし、執事の才はこうした人々よりも優れたところがあります。執事の文章は孟子の文章でも韓愈の文章でもなく、まさしく欧陽先生の文章なのです。

人の善い<sup>よ</sup>ところを言うのを喜び、しかし諂<sup>へつ</sup>うことをしないのは、誠実にそのことを為す者であります。そうしたことを知らない者は、人を誉めるのは、その人に喜ばれて目をかけてもらおうとするためだと考えます。その人に喜ばれて目をかけてもらうために人を誉めたりすることは、私のできることではありません。私が、執事の徳の光明が盛大であることを言って止むことがないのは、私のことを執事がきつとわかってくださると思うからなのであります。

執事の名は天下に満ちて、その文を読んでいなくても、欧陽先生がおられことは誰もが知っています。一方で、私は不幸にして草の野、泥に道に墮ちて、それでも道を知る心が近ごろほぼ成るに至りました。吾が手には何もなく、短い手紙だけを差し上げて、執事に我が事を託そうとするものであります。私は執事にどのようにして知っていたか、何によって執事に信じていただければよいのでありましょうか。

私は若いときには学ぶことをしていませんでした。生まれて二十五年目にして初めて書物を読むことを知り、君子であろうとする士と交わるようになりました。年齢的にすでに晩<sup>おそ</sup>かったので、懸命に勉強<sup>いんじょう</sup>し続けて古の人のようになろうと自ら期すこともなく、自分と同じような人々の中で誰にも劣らないようになればそれでよいだろうと思っていました。その後は困難が増すばかりであったのですが、そのなかで古の人が書いた文を読んでみると、言葉を出して考えを表現するのが自分とは大きく異なることが始めてわかってきました。また、時に自分自身を顧みて、我が才能はここに留まっているものではないと思えることもありました。それで、それより前に作った数百篇の文章は焼いてし

まって、『論語』や『孟子』、『韓子』、およびそのほかの聖人、賢人の文章を手にとって、じっと座って一日中それを読むことが七、八年に及びました。その始めのうちは、中に入ると恐ろしいほどに開けていて、外よりもむしろ広いのを見て、とにかく驚くばかりでありました。長く読み続けて、ますます詳しく読むうちに、胸の中がからりと開けて明るくなり、もとより当然のことを言っているだけのように思えてきました。それでも、まだ自分の言葉を出すことはしませんでした。またしばらく経つうちに、胸の中にある言葉が日に日に増えてきて、もう抑えきれないまでになりましたので、試しに出して書いてみました。何度か繰り返してそれを読んでみると、川が流れるように自然と言葉が出てくるような感じを覚えました。それでもまだこれでよいとは思っていません。近頃、『洪範論』、『史論』などの七篇を作りました。執事はそれをどのように観てくださいますでしょうか。

あれこれ申し上げました。私のことを知らない者は、自分で自分を誉めて、己のことを人に知らせようとしていると思うであります。ただ、執事だけは、十年間考え続けてきた結果がこれであることをきくと察してくださるであります。執事だけが私のことを知ってくださると私は信じているのであります。

【補足】〔(1) これは自薦の手紙として非常に工夫されている。欧陽脩の文章を誉めているところは、原文では豊富な語彙を駆使して、孟子や韓愈よりも遥かに高く評価しているとの印象を強く与えている。そこまでべた褒めするのは、自分が媚ひ諂う人間ではないと欧陽脩が必ずわかってくれるからだとして、欧陽脩がわかってくれる根拠として、ここに至るまでの蘇洵の確固たる経歴があると書いているのである。(2) 欧陽脩との面会を果たしてからの蘇洵は、中年でデビューしていきなりミリオンセラ一作家となった小説家のように、たちまち都の名士の間にその名を馳せたのであった。欧陽脩は蘇洵を朝廷で用いるように推薦し、一方で、蘇洵は富弼や韓琦にも手紙を書いて面談する機会を得て、すぐに上客として遇されるようになった。(3) 欧陽脩が翰林学士の号を与えられていたことに関連して若干の補足しておく。科挙出身者

の中でも特に学識に優れるエリートは、試験による審査などを経て、皇帝直属のアカデミーの一員に加えられて学士号が与えられる。学士号は多種類あって、その中で翰林学士が最も重んじられ、翰林学士の多くは朝廷の大臣クラスの任務に就くようになる。実際に欧陽脩は後に副宰相になっている。なお、宰相とか副宰相の職名は宋代にはなかったのだが、宋代の官僚制度は非常に複雑でわかりにくいので、この「自由訳」では簡便を旨として、あまり深く立ち入らずに、一般的に相当する職名でもって適宜表記する。ついでながら、宋代の官員の正式の肩書はごちゃごちゃと非常に長い。肩書には、「差遣」<sup>さけん</sup>、「寄禄官」<sup>きろくかん</sup>、「館職」<sup>かんしよく</sup>の三要素があり、「差遣」は実際の職務を示し、「寄禄官」は官位を示し、「館職」は学士号を示す。官位はあからさまに一位から九位の数字で表すのではなく、唐代においてその官位の者が就いていた職務の名称で表すのが慣例になっていた。皇帝に差し出す文章ではこれらを全部並べた長い長い肩書を記すのだが、一般的にはその一部分だけを用い、学士号を持つ者は他は省いて「館職」だけを示すことが多い]

## ■ 【01-2-011】 謝秋賦試官啓

【解題】父の名がにわかには都の著名人の間に知られて行く一方で、蘇軾兄弟は受験の準備に専念し、当時の世界で間違いなく世界最大であった都の賑わいにも心を奪われるようなことなかった。都に到着して間もなく洪水による惨状を見たこともあって [→作品番号 01-1-006]、都の印象はあまりよいものではなかったようだ。その後も、都の繁栄を賛美するような言辞を蘇軾が口にすることは生涯を通じてほとんどなかった。嘉祐元年 [1056年] 秋、都の開封府主催の科挙の一次試験が実施され、兄弟は揃って合格した。合格者は、試験を実施した人々に感謝の手紙を記す慣例があり、蘇軾はこの手紙を書いた。表題にある「啓」とは、儀礼的、形式的な手紙のこ

と。このような謝礼の手紙は普通は誰が書いても同じような内容になるものだが、蘇軾は自身の学問観を盛り込んで書いている。一部分だけを訳しておく。

### 【訳文】

伏して思うに、聖人が文章の教を設けたのは、それに基づいて民を統治するためでありました。田野にある君子であっても、文章の教え学ぶまつりごとのは政のためであったのです。……時代が下ると、道は二つに分かれ、王の政は刑書〔法律書〕から出ることになり、その一方で、儒学は吏事〔行政の実際面〕には疎いとされました。それで、民を治めることは学問に基づくことなく、また、学問を学んだ者がそれを民に施すこともなくなったのでした。学校に学ぶ者は朝廷のことは考えず、法律を読む者は詩賦などは捨ててしまいました。試験の場では、よい声で朗誦する技を誇ったのでした。……〔以下、学問と政治が一体であるべきことを述べる〕……私は他の人に長じる才能はなく、自分で独自に学んできただけで、文章は拙く、現代の人々の心に適うものではありません。ところが、科挙の合格者の中に私の名前があり、賢材を推挙する試験を辱めてしまったのではないかと大いに懼れております。俊才の群れを追って翼を翻して飛び、船を並べて大河を渡るようなことがももできましたならば、ほぼ合格者の名に適うようになるででしょうか。……〔以下、謝礼の言葉を連ねる〕……

【補足】〔蘇軾兄弟が科挙の一次試験を突破した後に、張方平ちやうほうへいが成都から都に戻ってきた。そのころに蘇洵と張方平が会った際のエピソードを曾慥そうぞうの隨筆『高齋漫録』こうさいまんろくが伝えている。曾慥ほくそうは北宋と南宋にまたがる時代を生きた学者で、先祖に北宋の高官であった者がいた〕

### 【訳文】

曾慥そうぞう：『高齋漫録』

さん そ そじゆん そ てつ しよく ちやうほうへい おうようしやう  
三蘇[蘇洵、蘇軾、蘇轍]が蜀から都に来て以来、張方平と歐陽脩が朝廷の人々に誉め伝え、  
これより三蘇の名声は大いに振るうようになった。

ある日、張方平は蘇洵にこのように尋ねた。

「御子息は近頃は何を一生懸命に勉強されていますか」

蘇洵は答えた。

「軾はちょうど『漢書』を読み直しております」

張方平は、

「ほほう。本は二回も読むものなのでありますかな」

と言った。

蘇洵は宿に帰ってそのことを蘇軾に伝えると、蘇軾は言った。

「あの先生は、世間にはまさか三回も読む者がいるとは御存知ないのであります」

張方平はかつて十七の史書を借り、ひと月経つと、

「すべて読み終わりました」

と言って還した。張方平は生まれながらに記憶力に優れ、すぐに覚えて暗唱できた。どのような優れた学者も張方平に及ぶ者はほとんどいなかった。

【補足】[蘇軾の記憶力もまた尋常ではなかったというエピソードは別の機会に見ることになるだろう]

## ■ 【01-2-012】 刑賞忠厚之至論

【解題】<sup>かゆう</sup>嘉祐2年 [1057年] 1月、蘇軾兄弟は宮中で行われた二次試験に、全国から集まった受験生とともに挑んだ。試験では5本の小論文を書き1首の詩を作ることが課せられた。そのうち、『刑賞は忠厚の至り』について論ぜよ』という課題に応じて書いた小論文を読んでおこう。「忠厚」とは真心で、為政者は刑や賞を民衆に与えると

きに真心の限りを尽くさなければならないという意味のことが昔からいわれていて、それについて現代的意義を論じろというのが課題である。細かいところは省いて大意を訳す。

【補足】[上で、記憶力に関わるエピソードを見たが、科挙は記憶力だけを問うものではなかったことが、この小論文を吟味して行くとよく理解できるであろう]

### 【訳文】

大昔の理想の天子は、民を深く愛し、民を切に思いやり、人を尊重することを基本として天下を治めました。一つでも善い行いがあれば、それを賞した上で、歌って讃えたので、人は楽しんで善行を始め、最後までそれに努めました。逆に一つでも悪い行いがあれば、それを罰した上で、憐れんだので、人は悪いことはやめて、善いことをしようとしました。

このような言葉がありました。「賞を与えるべきか疑わしく思ったときには与えるのがよい。恩愛を広く民に及ぼすことができるからだ。罰を与えるのを疑わしく思ったときにはやめておくのがよい。刑を慎むことができるからだ」。実際に聖天子の堯の時代にこのようなことがありました。皋陶という人が死刑を行おうとして、執行を三回申請しました。しかし堯は三回とも赦すように言いました。天下の人々は皋陶が厳格であるのを畏怖し、堯が寛大であるのを喜びました。また、四岳という人が、ある犯罪人を赦して仕事に就けるようにしたらどうかと提案しました。堯はそれはできないと一度は言いましたけれど、その後で、試みに用いてみようと言いました。この二つの例から、堯の心は明らかであります。

こういう言葉もありました。「罪の疑わしいときは刑は軽くせよ。功績の疑わしいときにも賞は重くせよ。無実の者を殺してしまうよりは、罪ある者を取り逃す方がまだましである」。すべてはこれに尽きます。賞を与えるか与えないか、与えなくてもよいときにまで与えるのは思いやりが過ぎます。罰を与えるか与えないか、与えなくてもよいときにまで与えるのは厳し過ぎます。思いやりが過剰であっても人

として欠陥があるとはいえません。しかし、厳し過ぎるのは残忍であって人間性を失います。

昔は賞として地位や俸禄を与えることはなく、罰として刃物を用いることはありませんでした。地位や俸禄を与えれば、賞はそこだけにとどまって、それ以上の広がりを持たないからです。刃物を用いれば、刑はそこだけにとどまって、それ以上の広がりを持たないからです。天下にあるありとあらゆる善を全て賞するのに、位や俸禄はまるで足りません。天下にあるありとあらゆる悪の全てに刃物を用いたら悲惨なことになります。昔の天子は賞も刑も疑わしいときには全てに思いやりを及ぼし、世の人を正しい生き方へ導いたのです。ですから刑罰は厚い真心、すなわち忠厚のこの上なきものであると言ったのです。

【補足】[蘇軾が書いたこの論文については、極めて有名なエピソードが語り継がれてきた。弟が書いた墓誌銘からその部分を見ておこう]

そ てつ ぼうけい し せんたんめい ぼ し めい  
蘇轍：『亡兄子瞻端明墓誌銘』

か ゆう おうようしゅう たい ぶ しん し  
嘉祐二年、欧陽脩が礼部進士の試験委員長になり、いまの時代の文章が奇矯なものになって  
いるのを嫌って、修正したいとの思いがあった。梅堯臣も試験監督になっていて、公[蘇軾]が(試  
験の答案で)刑賞を論じた文章を(読んで感心して)欧陽脩に示すと、欧陽脩は驚き喜び、公は  
並みの者ではないと考え、首席にしたいと思った。しかし、もしかしたらこの文章は[欧陽脩の弟子  
の]曾鞏が書いたのではないかと疑い、公を二番にしたのだった。また、『春秋』について問う試験  
では首席で、殿試[科挙の最終試験]は乙科として合格した。そして、蘇軾は諸公に合格した謝礼  
の挨拶をし、そのときに欧陽脩に初めて会った。欧陽脩は梅堯臣に手紙で、「私はこの人を敬って  
避けなければならない。人より頭一つ抜きん出ている」と記した。人々はそれを聞いた始めは面白  
く思わなかったが、後に信服した。

【補足】[上の記述についていくつか補足する。(1) 二次試験を担当する試験委員長に  
欧陽脩が任命されたのは蘇軾兄弟にとって幸運であった。当時は、先の『遠景楼の記』

にも記されていたように、装飾過多の美文が書けることを重視する傾向がなお強く残っていて、受験生は徹底してその技を鍛え、合格間違いなしと前評判の高かった美文家が幾人もいた。欧陽脩は委員長になったのを機に、美文偏重の風潮を一掃しようと、上辺ではなく内容重視で採点すると決め、自分と文学観を共有する者を試験委員として集めた。王珪、梅摯、韓絳、范鎮が招集され、また、梅堯臣、鮮于侁らを採点の実務を担当する委員として呼んだ。宋代には、情実によって合否が左右されたりしないように科挙の制度が整備され、試験委員長といえども自身の気に入った者を最良として合格させたりできないようになっていた。具体的には、受験生の答案は第三者によって筆写し直されて、受験生の名が完全に秘された状態で採点されるなどの対策がとられた。試験委員長が個性を発揮できるのは、出題の傾向や採点の方針を決めるときで、欧陽脩はそこで己の考えを強く貫いたのであった。欧陽脩の文学観は、初めて会った蘇洵を高く評価したように、蘇洵と完全に一致し、その蘇洵の薫陶を受けた蘇軾兄弟ともまた一致するものであった。(2) 梅堯臣は採点委員として蘇軾の小論文を読み [もちろん蘇軾が書いたことは知らずに読んだ]、これぞまさしく欧陽脩が求める優れた答案であると考え、特に委員長に読むことを勧めた。梅堯臣は欧陽脩の先輩であるが、官員としてはごく地味な存在で、一人でこつこつとやはり地味な詩を作っていた。その地味な詩こそが、欧陽脩が宋代の詩はかくあるべしと模索していたものに合致していたので、欧陽脩が高く評価し、にわかにはその名が知れ渡ったのだった。欧陽脩は低い官位にある梅堯臣を特に試験委員に抜擢し、それが梅堯臣の生涯を通じての最高の仕事となった。そのときにたまたま蘇軾の論文を担当して読んだのは何かしら運命的なものを感じさせるできごとであった。(3) 欧陽脩は梅堯臣に勧められて蘇軾の小論文を読んでみると、確かに非常に優れていたもので、これを書いた者を首席に据えようと考えた。受験生の名は伏せられているので、蘇洵の息子が書いたとは欧陽脩にはわからず、もしかしたら自分の

弟子の曾鞏そうきようが書いたのではなかろうかとの疑念を抱いた。文章の変革を強引に押し進めるだけでも物議を醸すのに、自分の弟子を首席にしたならひどい身量頂だとの誹りを受けるかもしれないと、最終的に2番目の者と順位を入れ替えた。すると、発表当日、欧陽脩が驚いたことに、首席が曾鞏で2番が蘇軾であった。試験前に評判の高かった美文家は軒なみ二次試験で不合格となり、それを不服とした落第生たちが欧陽脩の家を囲んで示威行動をするといった騒動が生じた。(4) 蘇軾のこの小論文は、歴史上の事例を幾つも織り込みつつ、自分の考えをきちんと述べていて、科挙の模範答案としてだけでなく、名文の代表として高く評価された。しかしながら、ここに引かれている堯と皋陶の問答は実はどこにも基づくものがなかった。あからさまに言えば蘇軾が「捏造」したものであった。論文の構成と内容があまりにもみごとであったので、採点者全員が何らかの出典があるものと思い込んでしまったのだ。そのことについて楊万里ようばんりの隨筆『誠齋詩話』が次のように伝えている。楊万里なんそうは南宋の時代の詩の大家である]

楊万里ようばんり 『誠齋詩話』

欧陽公は省試しょうし[科挙の二次試験]の試験委員長になり、東坡とうば[蘇軾]の文章を得て驚きかつ喜んで、首席として合格させようと思ったが、自分の門下生の曾鞏そうきようの文章ではないかと疑い、物議を招くことを恐れて、抑えて第二とした。

(科挙に合格して後に、その)謝礼に東坡が欧陽脩に挨拶をしに行くと、東坡が作った『刑賞は忠厚の至りの論』を取り上げて、

『皋陶こうたうが死刑の執行を三回申請したが、堯は三回とも赦すように言った』と書いてありましたが、この故事はどの書物に書いてあるのでしょうか」

と、尋ねた。東坡は、

「そのことは『三国志』の孔融こうゆう伝の注にあります」

と、答えた。欧陽脩は後でそれを閲したところ、書いていなかった。

後日また東坡にもう一度尋ねると、東坡はこのように言った。

「曹操が袁紹[曹操の強大なライバル]を亡ぼしたときに、[袁紹の息子の]袁熙の妻を息子の曹  
 丕に与えようとしました。すると、孔融はこのように言いました。『昔、(周の)武王が(殷の)紂王[残  
 虐な王であったとされる]を征伐したときに、(紂王の妃であった)妲己を(武王の弟の)周公に与え  
 ようしました』[妲己は紂王の暴虐をより酷くさせた悪女であったので、聖人と目される周公にそれを  
 与えるなどということはあってはならないことで、曹丕に袁熙の妻を与えるのもまたあってはならない  
 ことである、という意味]。曹操は驚いて、『そのことは何に書いてあるのか』と尋ねますと、孔融はこ  
 のように言いました。『今日の事を見れば、その意からして、必ずそうであったとわかります』と、答え  
 ました。堯と皋陶のことも、その意からして、必ずそうであったのです」[つまり、孔融が捏造したのに  
 倣って自分も捏造したと言ったのである]。

欧陽脩は大いに驚いて、

「この人こそ善く書物を読み、善く書物を用いるものであると言すべきである。後にその文章はきっと  
 古今独歩のものとなるだろう」

と、言った。

【補足】[この後に、楊万里は『礼記』という書物に蘇軾が記したのとよく似た記述  
 があることを考証している。楊万里とはほぼ同じ時代を生きた陸游の随筆『老学庵筆  
 記』には、若干異なる記述がある]

陸游:『老学庵筆記』

東坡先生の省試の『刑賞は忠厚の至りの論』に「皋陶は死刑の執行を三回申請したが、堯は三  
 回とも赦すように言った」とある。梅堯臣は採点委員としてこの論文を得て、欧陽脩に示した。

欧陽脩が、

「このことはどの書物から引いたのだろうか」

と、言うと、梅堯臣は、

「出所が明らかでなければいけませんでしょうか」

と、言った。欧陽脩はたまたま皆が忘れてしまっているだけだろうと考え、大いにその論文を称えて、初めはそれを首席にしようと思ったが、結局はそうはしなかった。

合格発表を見て、書いたのは東坡であることを知り、梅堯臣に、

「あの者なら必ず拠り所があって書いたに違いありません。我らが記憶していなかったのは残念ですな」

と、言った。

東坡先生が合格の謝礼に欧陽公を訪れると、欧陽公は最初にこのことを尋ねた。東坡先生は答えて、

「出所が明らかでなければいけませんでしょうか」

と、梅堯臣と同じことを言った。欧陽公はその豪胆ぶりを誉め、大いに嘆息してやまなかった。

【補足】[蘇軾がいかにも史実としてありそうなことを捏造したのは非難されるどころか、一生を左右する大きな試験において堂々とやってのけた豪胆ぶりがかえった称賛されたのであった。見識の高さとともに、そのような肝の太さが国政を担って行く士大夫には必要だからである。科挙は知識を問うものではなく、人を問うものであるというのが、本来の建前であって、欧陽脩が科挙を改革しようとした基本はそこにあった]

## ■ 【01-2-013】 謝欧陽内翰書

【解題】科挙の二次試験に合格した兄弟は3月5日に皇帝の臨席のもとで行われた最終試験に進み、2人とも合格した。そのとき成績上位者の262人には「進士」の称号が、下位者の126人には「同出身」の称号が与えられた。首席は章衡で、蘇軾兄弟

は上位グループの中ぐらいであった。最終試験では基本的に不合格者は出さず、皇帝の名をもって順位を決めるのが主目的であった。それは、皇帝によって国家有用のエリートとして選ばれたことを合格者に印象付けるためであった。事実として、科挙の制度を充実させて、その合格者に宰相職までも任せることにしたのは、宋の初代皇帝と二代皇帝の英断であって、蘇軾にしてもそのような科挙がなかったならば、一介の商人で終わった可能性の方が遥かに高かったのである。中国の全ての時代を通じて、宋代の科挙の合格者が皇帝の恩義を最も強く感じて、最も忠であろうとしたのは、この科挙制度の効果であった。皇帝が定めた合格順位は重い意味を持ち、「進士」と「同出身」では官僚としてのスタート時から区別され、とりわけ上位三人は特別扱いをされた。順位の違いはあっても、同じ年の科挙で合格した者は「同年」と呼ばれ、いわば同窓生のような仲間意識を持った。蘇軾と同年では、先に欧陽脩の弟子として挙げた曾鞏そうきようが最も有名で、後の時代に編まれた『唐宋八大家文』とうそうはちたい か ぶんでは、宋代を代表する6人の名文家の中の1人として選ばれている。ちなみに、宋代の残りの5人は、欧陽脩ようしゆう、蘇洵そ じゆん、蘇軾そ てつ、蘇轍おうあんせき、王安石しようじゆんである。同年で次いで有名なのは章惇で、最初は蘇軾の親友として付き合い、後に政敵となり、宰相に昇って辣腕を振るった。蘇軾は合格すると、試験の実施に関わった人や、父と交流がある人々に合格できた感謝の手紙を多数記している。ここに表題として掲げたのは、科挙の最終試験に合格した後に欧陽脩に出した謝礼の手紙である。

### 【訳文】

私が竊ひそかに天下の事を考えますのに、人にその行為を改めさせるのは容易ではありません。

(宋の前の)五代十国時代の終わりから、文教は衰落し、風俗は安易に流れ、日々に地にまみれるまでになってしまいました。聖上[皇帝]は深く嘆息し、その源から澄ませ、そこから清らかな水

を引いてこようと考えられ、天下に詔を出して、その主旨を諭らせて、雄俊、魁偉、敦厚、朴直の士を招き寄せ、浮巧、軽媚、叢錯、采繡の文をやめさせ、漢代の学問を追って、次第に三代の理想の政治を復活させようとなさったのでした。ところが、士大夫は天子の心を正しく察することなく、過当な受け止め方をしたのでした。深く凝らしたり、迂遠なところに行ったりして、奇妙に偏った読みに堪えない文章を作ってきた余風がまだ消え尽さないうちに、新たな別の弊害が起こったのでした。腕のある者は難しい言葉をちりばめて自分の文章を後世にまで伝えようとし、腕のない者は昔の人のものを模写して「古文」と称したのでした。あれこれ勝手なことが行われ、止めることができなくなってしまいました。

そもそも唐の時代に古文といわれたものは、韓愈から始まったのでした。その後で韓愈に学んで、そこにまでは至らなかった者として皇甫湜がいました。皇甫湜に学んでそこにまでは至らなかった者として孫樵がいました。孫樵以降は見るに足る者はいませんでした。

伏して心の内に思いますに、天が先王の遺文を集めて託そうとする人、そして覚悟を持った学者として天が待っていた人、それが内翰執事[歐陽脩]であったのです。王命を承って、自ら文学を指揮して、必ず天下の奇士を招いて、天子の詔に応じようとしたのであります。

私は遠方の田舎の者で、家において何もできず、道を称することもなく、都に来て長くその名が知られないままで、もう西に帰ろうと準備をしていたときに、思いがけず執事の抜擢を受けて、第二位に据えていただきました。しかし、私がかもたら蓄積していたものは士大夫の心を慰められるものではなかったので、群れ集まって嘲笑し罵声を浴びせる者がややもすれば千人にもなったのでした。それでも、ただ執事に知っていたいことを恃みとして、多くの君子と議論し、落ち着いて心を動かすことはありませんでした。

なおも幸いなことに、御試[科挙の最終試験]で当局から排斥されることなく、笏を取って立ち、執事の門のもとで謝礼を申し上げられることとなりました。

古の人がこのように言っています。士に賢愚はなく、ただ遇うところによると。楽毅は燕国を去ってか

らはもう戦って勝つことはできませんでしたし、<sup>はんれい えつ</sup>范蠡は越国を去ってからはついに何も為し遂げること  
 はできませんでした[楽毅と范蠡は戦国時代の人物で、それぞれ優れた戦術家であり計略家であ  
 ったが、燕国ないし越国という舞台を失ってからは活躍できなくなった]。私はこれからも長く執事の  
 風下に立って、執事の賓客の末席に置いていただいて、この小さな心をこれからも長く発奮させて  
 いけるならば、私の幸いとするところであり、執事もまたいささか喜んでいただけるのでありましょ  
 うか。

【補足】〔1〕<sup>そうだい したいふ</sup>宋代の士大夫がいかに議論好きであったか、その議論の進め方がいかな  
 るものであったのかということがよくわかる手紙である。この手紙は以下のような  
 構成になっている。①冒頭に大きな命題を掲げ、おやっと思わせる。②その命題に関  
 して、歴史を追って考察して行く。その際に、遠い昔の理想の時代〔三代と称され  
<sup>さんだい</sup>る〕の理想の君主〔先王と称される〕のもとに模範とすべきものがあったということ  
 が大前提として置かれている。③その命題に関する現代的な課題を提示し、自分とど  
 のような関わりがあるかを述べる。ここでの課題は文学の革新運動で、革新とはとり  
 もなおさず古代への回帰、つまりルネッサンスであると認識されていたので、新しい  
 文学のかたちは「古文<sup>こぶん</sup>」と称され、その方向性を最初に定めたのが唐代の韓愈<sup>とうだい かんゆ</sup>で、現  
 代における指導者は<sup>おうようしゅう</sup>欧陽脩であって、蘇軾はその後に続く者であると自身を位置付け  
 ている。(2) 欧陽脩の革新運動は当時はまだ十分に社会の支持を得ていたわけでな  
 く、この手紙には、蘇軾ら合格者を非難する者が千人もいたと書いてある。旧来の美文  
 を何年もかけて習得してきた者からしたら、いきなり門前払いを食わされて官員と  
 しての未来が閉ざされてしまったわけだから、怒るのは当然であった。(3) 科挙の合  
 格者は、その年の試験委員長と疑似的な師弟関係にあると見なされた。それで、<sup>がくき</sup>楽毅  
 や<sup>はんれい</sup>范蠡の故事を引いて、自分は欧陽脩の導きがあつて初めて活躍できるので今後とも  
 指導を仰ぎたいと記して手紙を結んでいる。実際に、蘇軾兄弟は終生欧陽脩を師とし

て慕い続けることになる。なお、樂毅や范蠡がいかなる人物であったのかということ  
は、蘇軾が詳しく論じている文章を後に見ることになる]

## ■【01-2-014】謝范舍人書

【解題】蘇軾は科挙に合格できた謝礼の手紙を、歐陽脩おうようしゅうに呼ばれて試験委員を務めた  
王珪おうけい、梅摯ばいし、韓絳かんこう、范鎮はんちんにも出している。いずれも今後の蘇軾と様々な場面で関係して  
くる人物で、それぞれの人柄に応じて蘇軾は手紙を書き分けているので、読めばそれな  
りに興味深いところもあるのだが、煩わしさを避けて、ここでは范鎮への手紙を読んで  
おこう。范鎮しよくは蜀の先輩で、特にそのことに思いを込めて書いてある。

### 【訳文】

私は古いにしえの人からこのように聞いています。民に常に変わることのない性質があるわけではない、  
と。土地の風気に影響されるところがあり、また、人の好悪はそれぞれに異なるところがあるので  
す。

文章の流れを見ると、漢かんの時代が最も盛んでした。蜀しよくの地からも、文章によって名を顕し、高位に  
昇った者が多く出ました。司馬相如しばそうじよがその早い例で、王褒おうほうがその後に続きました。この二人が頭  
に高々と冠をかぶり、大官の印の組紐をなびかせ、大きな四頭立ての馬に乗って、堂々と郷里  
に帰ってきたときに、蜀の人々は初めて文章を好むことがいかに大切であるかを知りました。書物  
を朗誦する声が、[文化の先進地である]鄒そうや魯ろと同じように、蜀でも盛んに聞かれるようになった  
のでした。しかし、この二人が蜀の人を中央に推薦したということは聞いていません。我が身の富  
貴を遂げてからは、郷里の人々のことなどは忘れてしまったのでしょうか。

私はかつて老人からこのように聞いています。[五代十国時代に蜀に地方政権を立てた]孟氏もうが  
宋朝に降伏して、民はようやく息を継ぐことができたものの、死地から救われた傷を癒すのに精いっ

ばいで、それからの数十年間は学校は衰えたままであった、と。天聖年間てんせいに我が伯父そかん[蘇渙]が科挙に合格して西に帰ってきたときに、その姿を見ようと土地の人々が道を塞ぎ、大いに感心しました。その後、執事はんちん[范鎮]や諸公が相い継いで朝廷に登用され、蜀の人の文章の功業が天下に聞こえるようになったのでした。そのようになって、どの家でも、農具を棄てて筆と硯を執るようになりました。その盛んなありさまは、漢の時代を超えるばかりであります。蜀には数十の州があり、私にとって近いところつうきの通義郡を例に引きますと、それは蜀の中でも小さな郡で、眉山県はその中の一つの県であるに過ぎませんが、昨年の科挙の一次試験を通過して、礼部れいぶの二次試験に進んだ者が四、五十人ほどもいました。そして執事ばいこうと梅公ばいし[梅摯]が試験委員として親しく考査して、その中の十三人を合格者として得たのでした。その他の蜀の州もまた同様に多くの合格者を出したの  
は言うまでもありません。

君子の心の用い方として、天下のどこかを片寄って愛するということはないのですが、父母の邦からも合格者が出て、その人とともに喜ぶのは、行きずりの人が合格したと漫然と聞くのとはやはり同じではありません。執事せいとと梅公せいと[范鎮も梅摯も実は蜀の成都の人]が蜀の人々に大きな影響を与えて、先王せんおうの道[古代の理想時代の教え]を学ぶように誘い、また、その力量と裁断によって天子の光を輝かせているのは、司馬相如や王褒を遥かに凌ぐのであります。

私もまた十三人の中にあつて、謹んでお役の人に導かれて合格させていただいたお礼を申し上げたく、また、執事が故郷から多くの後輩を得たことにお祝いを申し上げたいと思っています。

【補足】〔(1) 蜀しよくから出た文化人の大先輩として漢代かんだいの司馬相如しばそうじよの名を挙げている。

司馬相如は著名な人物で、蘇軾はしばしば詩文にその事績を引くが、ここがまさにそうであるように、褒めることはほとんどない。(2) 歐陽脩が科挙の試験委員として呼び集めた王珪おうけい、梅摯ばいし、韓絳かんこう、范鎮はんちんの4人のうち、韓絳を除く3人が成都せいとの出身者であった。そのことから蜀の人々がいかに熱心に勉強していたかがわかるが、小さな眉山びざん山県から、合格者388人中13人を出したというのはかなり驚くべきことである。13

人の中には、一緒に学んだ家定国〔→作品番号 01-2-008〕がいた。(2) 蘇軾が王珪や梅摯に出した手紙では同郷であることは強調されていない。恐らく、范鎮が特に強い郷土愛の持ち主であることを蘇軾は知っていたのだろう]

## ■ 【01-2-015】 上韓太尉書

【解題】蘇軾は試験委員の面々に謝礼の手紙を書いただけでなく、そのとき宰相の地位に就いていた韓琦にも手紙を書いて、面談の機会を願い出ている。科挙に合格したばかりの者に宰相が面談を許すということは普通はあまりないのだろうが、この手紙にもあるように、父の蘇洵がすでに韓琦の知遇を得ていたので、蘇軾は弟とともに面会を求めたのである。

### 【解題】

私は生まれてから二十二年になりますが、七、八歳のころに書物を読むことを知り、大きくなるにつれて、現在のことにはあまり興味がなくて、過去の世の盛衰の跡や、時代による風俗の変化を観るのを好み、(夏、殷、周の)三代以降の歴史をよく知るようになりました。

前漢が衰え出してから、大臣は現状を守るだけで、大きな計略に務めることはなく、後漢の末になると、異常なくらいに節義を貫こうとした士大夫が多いものの、それは正しい道に従うものではありませんでした。前漢の元帝、成帝のころは、天下に事は無く、高官も將軍もその地位と俸禄に安住して、己の子孫のためになるようにと私的な恩義を施し、農地や邸宅を買い込み、変化を嫌って姑息にそれを忌避し、歳月がいたずらに過ぎ行くままにして、儒学の古典からやや近そうな言葉を取ってきて、そのようにしているのがよいとする口実としていました。孔子は「下流に居て上を誦る者を悪む、評いてそれを直と為す者を悪む」と言いました〔これは『論語』ある言葉で、「君子も憎むことがあるか」という問いに、孔子は四つの事柄を挙げて、その一つに、下位者がぶつぶつ上

位者の悪口を言うのを憎むと答えた。弟子の子貢は三つの事柄を挙げて、その一つに、人の秘密をあばくのが正しい行為だと思ひ込んでいる者を憎むと答えた。劉歆や谷永は互いにかばい合って、この言葉でもって自分たちの行為を飾ったのでした。こうして、竜は雲に乗り風に乗る勢いを失い、生け簀の魚の安楽な暮らしがよいとして、衰えてゆくのを悟らないままに、ついにはつまらない連中の俎の上で肩から股まで裂かれてしまったのです[つまり前漢が衰亡したことをいう]。後漢の桓帝、靈帝はそのような昔の弊害に懲りて、皇帝の権威を樹立しようとして、厳しい刑罰を用いて臣下の者を責め使いました。忠臣や義士は朝廷には受け入れられず、草野に群起して世を驚かせるような奇矯な振る舞いに力を尽くし、天下の豪俊は挙ってその仲間に加わって、刑罰を受けるのをむしろ喜び、高位に昇ることを誉れとはしなかったのでした。こうして天下の士は無用の虚名を騒ぎ立て、実際に天下にとって有用なことには向かって行きませんでした。人が病んで狂うようになり、後漢は滅亡へと向かい、国を安らかにすることを知らないままに叫び走って、ついに自ら倒れてしまったのでした。

昔[周の時代の初め]、太公[呂尚]が齊の地を治めたときに、賢人を登用して、その功績を称えました。それを見て、周公[周の文王の弟で孔子が尊敬した聖人]は、「後の時代に君主を殺して位を奪う臣がきつと出るであろう」と言いました。一方で、周公は魯の地を治め、親族を大切に、年長者を敬いました。太公はそれを見て、「後の世にきつと徐々に衰えて行くだろう」と言いました。漢の歴史はまことにこの言葉に類似していました。

人々の振る舞いや風俗が時代によって変わるのは何によるのでしょうか。古の君子は剛毅であり正直であり、義を守りながらも寛大で、忠であって恕であって仁に厚く、義によって行動しました。士大夫が朝廷にあっても切磋琢磨して、国のために力の限りを尽くし、奇矯な振る舞いに及ぶことはありませんでした。これが三代の王政が興った理由なのです。曾子は「上が其の道を失い、民が散じること久しい」と言いました[これも『論語』にある言葉で、孔子の弟子の曾子は、為政者が道義を喪うと民心が離れてしまっても戻らないということを言った]。天下に幸いにも上に媚びて言葉を飾る

者がなくても、寄り集まって奇矯な振る舞いを競い合うようにして為すのでは、悲しいことであります。

私は幼いころに、富弼公ふひつこうと韓琦太尉かんきたいいが寛大で仁に厚い長者であって、しかも非義を犯すことは絶対に許さないと聞きました。都に来るに及んで、二公が同時に宰相になっておられました。私は二公のお心を知ろうと、道に立ってひそかにその容貌を望み見ましたところ、寛然としたお姿で、悪を見ても怒りを発することなく、善を見ても喜びを表すことなく、まことに古の大臣のようでありました。循じゆん循じゆんと流されるような者はもとより何もしませんし、翹翹びんびんと枝を伸ばすような者は聖人の中道を行くのではありません。私は太尉にお目にかかって、その一言だけでも聞いてみたいと願うものであります。太尉と我が父とは親しくさせていただいて、かたじけなくも私の名も通じさせていただいておりますので、お目にかかれることもありえなくはないでありましょうか。お会いできればこれに勝る幸いはありません。

【補足】〔(1) この手紙の前半は漢かんの歴史を論じて、前漢ぜんかんと後漢ごかんの士大夫を比較している。前漢の士大夫は高位に昇ってそこに安住しようとし、後漢の士大夫は野にあって過激な行動に走った。そのどちらであっても、結果として国は滅びてしまった。このことは、一見すると、韓琦かんきに面会を求めることと関係がないように思えるのだが、実は当時の時代状況と深く関わっていた。先に見た蘇洵に手紙に、君子が集まる時もあるれば、離れるときもあると書いてあったように、当時の朝廷では保守派〔いわば前漢の士大夫〕と改革派〔一歩間違うと後漢の士大夫になりかねない人々〕との抗争が繰り返されていた。改革派はんちゆうえんは范仲淹を中心に一度は改革に着手したのだが、足元をすくわれてすぐに失敗し、いままた改革派が朝廷に集結しつつあって、富弼ふひつと韓琦が宰相として並び立ったのだった。ここで、改革派と保守派の対立が再燃して、改革がまたしても失敗してしまうのを蘇軾は恐れ、「聖人の中道」へと士大夫を導くことを韓琦に期待したのである。韓琦は北宋の名臣とされ、確かにどっしりと構えて、国家

の中心にあるべき人であったのだろうが、後世の人間からするとあまり面白味がなく、先走って書くと、年齢とともに「中道」から「反動」へと傾いて行ったようである。なお、便宜上、「前漢の士大夫」という訳語を用いたが、漢の時代と宋の時代では、学問を修めて実際に政治に活かそうとする人々の社会的階層は大きく異なっていた。漢代には門閥と縁故が絶対的に物を言い、宋代には科挙によって門閥と縁故は打ち碎かれたのだった。(2) 蘇軾は、少年のころにそれこそ後漢の士大夫の典型である范滂はんぼうに憧れたように、実はどちらかといえば「翹翹びんびんと枝を伸ばすような者」で、韓琦や富弼は、歐陽脩ほどには蘇軾のことを高く評価しなかったようである]

## ■ 【01-2-016】梅直講書上

【解題】蘇軾は梅堯臣にも手紙を書いた。梅堯臣は採点委員として蘇軾の論文を最初に読んだ人である。この手紙の冒頭しゅうこうで周公しゅう [周の文王の弟で、周公旦とも記される] の故事を引いている。周公の名は韓琦への手紙でも記されていたように、儒学の伝統において模範とすべき人物として常に仰ぎ見られ、孔子は晩年に「久しく周公旦の夢を見ない」と言って学問への情熱の衰えを嘆いたほどに尊敬してやまなかった。だから、手紙の最初にいきなり周公の名が出てきたならば、士大夫は姿勢したいふを正して目を凝らすのであって、蘇軾はまさしくそれを狙って梅堯臣を驚かしたのであろう。

### 【訳文】

私は書物を読んで、周公旦しゅうこうたんが苦しい胸の内を詩や手紙に託したところに至ると、いつも悲しく思いました。周公旦は甥せいの成王が位に就いて以来、誠心誠意補佐しようと努めていたのに、弟が間に入って、周公旦は王位を奪おうとしていると成王の耳に吹き込んだのでした。周公旦ほどの人であっても、不遇の時があったのです。

その周公旦を誰よりも尊敬してやまなかったのが孔子で、孔子にもまた不遇こうしのときがありました。孔子は、陳国ちんと蔡国さいの大臣に嫌われ、野において囲まれて進退に窮しました。食糧の道は絶たれ、一行に病人も出ました。それでも、孔子はいつも通りに琴を奏しでて歌い、弟子しの子路ろや顔回がんかいらと学問を論じ合っていました。

孔子は言いました。

「昔の詩に、『犀でもなく虎でもない。なのに我等は荒野を行かねばならない』とあるのは、戦に駆り出された民衆の嘆きの声だと聞いている。私もまた荒野を行く者なのだろうか。私は間違っただ道にきてしまったのだろうか」

顔回は言いました。

「先生の道はとても大きいのです。ですから、天下はそれを容れることができません。容れられなくても苦むことはないのです。容れられず、しかしその後偉大な人物になった人だっているではありませんか」

孔子はにっこり笑い、

「顔回よ、君が財産家になったら、私は君の家の金庫番になりたいものだ」

と言いました。

孔子は、天下に容れられなくても、その弟子たちとこのような冗談を交えた問答を楽しんでいたのです。

周公旦は実際には富貴で、孔子は貧賤でありました。孔子の貧賤に周公旦の富貴は及ばないのではないでしょうか。周公旦は賢人でありましたけれど、その弟でさえも周公旦の心の内がわかっていませんでした。周公旦にはその富貴をともに楽しむ相手がいませんでした。孔子には貧賤をともにする人々がたくさんいて、いずれもが天下の賢才でした。そしてともに楽しむことができたのです。

私は七、八歳のころ、初めて書物を読み、いまの世には歐陽公おうよう [歐陽脩おうようしゅう] という人がいて、その人

なりは昔の孟子もうし かんゆや韓愈ばんい ばんぎやうしんのようであると聞きました。また、梅公[梅堯臣]という人がいて、欧陽公と交流があり、二人の議論はどちらが上でどちらが下ということはなく、互いに磨き合っているということも聞きました。

それから成長して後に、初めて梅公の詩文を読み、その人となりを想像しました。俗世間の楽しみから飄然と抜け出て、自ら楽しみとするものを楽しんでいるのであろうと思いました。

さらに成長して、美文調の文章を書くことを学び、お上の下さる禄かみを食はもうと願いましたが、自分のことを自ら評価するに、とても官員の仲間には入れないだろうと思いました。このたび上京して年を越えましても、いまだかつて官員の誰かの門を訪れたことはありませんでした。春に天下の優れた人々が宮中に集まり、欧陽公と梅公が親しく審査された試験を受けましたが、全く思いもよらず、私は第二位の成績で合格させていただきました。ある人から伝え聞いたところでは、梅公が私の文章を孟子もうしのようで結構ではなかろうかと評価してくださったとか。そして、欧陽公もまた世間の並みの人が作る文章ではないとして、私を採とってくださったとか。私を指導してくださった方々が私を採とってくださったわけでもなく、かねて親しくしてきた方々に採とってくださいと願ったわけでもなく、お二人が採とってくださって第二位となったのです。

その結果、先の十余年の間に、その名だけを聞いて見ることもできなかった方々と一朝にして知り合いにもなれたのです。

さて、考えますに、人は何のわけもなく富貴になるものでもなく、何のわけもなく貧賤になるものでもないのでありましょう。立派な賢人がいて、その仲間となるのならば、富貴も貧賤も関係なしに互い心と心を支え合うことができましょう。たまたま一時の幸運によって、数十人の従者を引き連れる身となり、町の人々が見物に出て讚嘆するようなことになったところで、賢人同士がまじわる楽しみには替えられないのです。

孔子は不遇であり続け、亡くなる前の年に、「天を怨まない、人を咎めない」と、言いました。まことに悠然と遊ぶようにして一生を終えたのでした。

梅公のお名前は天下に知れわたっています。それでいてその位は五品でしかありません。その容色は温和で怒らず、その文章は寛厚敦朴かんこうどんぼくにして怨みの言葉はありません。それはここに申し上げた賢人の集まりを楽しんでおられることによるのでしょう。私もその楽しみにあずかせていただきたく願う次第です。

【補足】〔(1) 梅堯臣ばいぎょうしんはこのとき 56 歳で、官位はここにあるように五品であった。官位は最上位の一品から九品まであり、五品はちょうど真ん中であるから、56 歳にして五品は遅い出世であるのだろう。表題に「梅直講」とあるのは、このとき梅堯臣は国子監直講こくし かんちよくこうという国立の学校の教授の職務に就いていたからで、それは歐陽脩の推薦によるものであった。(2) 梅堯臣はこの後、『曾鞏そうきやうと蘇軾そ しよくを送る』という詩を作って 2 人に与えている。その詩の中で、それぞれの出身地である楚と蜀の過去の偉人になぞらえて 2 人を讃えている。「送る」とあるのは、科挙の合格者は帰郷して盛大に祝われた後に、改めて上京して官職の就くのが通例で、梅堯臣は 2 人の帰郷に合わせて詩を贈ったのである。ただし、曾鞏は確かに合格の喜びを携えての帰郷であったが、蘇軾は、年譜に記したように母の死の報せを受けての悲しい帰郷であった〕

## ■ 【01-2-017】 記先夫人不残鳥雀

【解題】蘇軾の母の程氏ていが亡くなったのは 4 月 7 日で、科挙の最終試験の合格発表の 3 月 11 日から 1 カ月も経っていなかった。母の訃報が都に届いたのは 5 月に入ってからだったようで、それを聞いた父子は慌ただしく帰郷の途についた。蘇軾の母がどのような人であったのか、それは後に司馬光し ぼ こうが書いた墓誌銘によって知ることができる。司馬光は巨大な歴史書『資治通鑑し じ つ がん』を編集した人で、蘇軾よりも 17 年先輩で、蘇軾が 3 歳のときに 20 歳の若さで科挙に合格している。「同年」に范鎮はん ちん [→作品番号 01-2-014] がいた。司馬光は蘇軾の母と交流があったわけではなく、蘇軾兄弟の依頼を受けて、提

供された資料に基づいて墓誌銘を書いただけで、いわば墓誌銘に箔をつけるために名を貸したのである。士大夫の間ではしばしばそのようなことをした[ただし、蘇軾自身はそのような依頼は滅多に引き受けなかったようである]。この墓誌銘の執筆の時期は本文の冒頭にあるようにこれより9年後である。本文に「程夫人」とあるのが蘇軾の母である。

### 【訳文】

しほこう ていしほしめい  
司馬光:『程氏墓誌銘』

じへい じふくんとそじゆん  
治平三年[1066]年夏、蘇府君[蘇洵]が都で亡くなったので、私が弔問に行くと、遺族の蘇軾と蘇轍が泣きながら次のように言った。

「私達は父の棺を蜀の地に埋葬するために帰郷します。蜀人の習慣として、夫婦は墓を一つにし、内に二つの室を設けることになっています。かつて父が母を埋葬したとき、母の室に墓誌銘を刻みませんでした。この機会にあなたさまに託して墓誌銘を刻みたいと思うのです」

私は固辞したのだが、ついには引き受けることになり、このように答えた。

「程夫人の徳を残念ながら私は存じ上げません。どうかその概略をお教えください」

よって二人の子息は程夫人の事略を私に授けてくれた。

程夫人は程文応の娘で、十八歳で蘇府君に嫁いだ。蘇府君はこのとき極めて貧乏で、その一方で程の家は裕福だった。そこで蘇府君の家にきて程夫人がどのような振る舞いをするのか、一族の者はしげしげと見たのだが、程夫人には少しの落ち度もなく妻としての仕事を立派に努め、孝恭にして謹儉であったので、誰からも賢い女性であると認められた。

ある人が程夫人に言った。

「あなたの御両親は財産が乏しいわけではないのですから、援助を求めたならば、父母の愛で応じてくださいますでしょう。それなのに、苦しい暮らしに耐えて、どうしてあちらにひと言もおっしゃらない

のですか」

程夫人はこう答えた。

「おっしゃる通り、私から父母にお願いすれば、きっと聞いてくださらないことはありませんでしょう。でも、もしもどなたかが、我が夫に『妻子を養うために誰かにすがったらどうだい』と言ったりしたときに、我が夫はどのようにするでしょうか。私は夫と同じようにするだけです」

程夫人はついに実家に援助を求めなかった。

このとき蘇府君の祖母[もしくはその姉妹]がなお健在で、老いてますます厳格であった。家の者はその部屋の近くを通過して、祖母の声が入ると、何か叱られるのではないかと非常に恐れた。ただ程夫人だけは祖母の気持ちに適い、祖母はにこにここと話かけたのだった。

蘇府君は二十七歳になるまで勉強には見向きもなかった。ところが、ある日のこと、興奮した様子で、程夫人に言った。

「私は我が身を顧みて、いまならまだ学ぶことができるように思う。しかし、家業のためには働かなければならない。学べば家業は廢れる。どうしたらよいだろうか」

程夫人は答えた。

「私はずっと申し上げたいと思っていました。しかし、私からあなたさまを勉強に仕向けるということではきっとよろしくないと思っていました。あなたさまが自分のお心から勉強されるのであれば、家業はどうぞ私にお任せください」

程夫人は自ら経営に乗り出し、数年の内に家は裕福になった。蘇府君は思い通りに学問に専念し、ついに大学者として大成した。

程夫人は読書を好み、書物の要点を把握し、息子の軾や轍が幼い頃は、程夫人は二人を自分で教え、常にこのように言って戒めた。

「書物を読むときに、同輩のことを気にするようであってははいけません。書物を読むとは、己をひとかどの人間にするためののです」

さらに、程夫人はいつも古人の名言を引いて、二人を厳しく励ました。

「おまえたちが正しいことのために死ぬのであれば、私は少しも寂しいとは思いません」

二人は同じ年に科挙に合格し、さらに二人は(4年後に)同じ年に制科せいこにも合格した。宋朝が始まってから、制科せいこに第三等で合格したのは呉育と軾だけである。

軾が鋭い直言で人を驚かせるのは、程夫人の教えによるのであろう。程夫人は息子のことをよく知っていたと言うべきである。

程夫人は家財がようやく豊かになったときに、嘆息してこう言った。

「これは福と言うべきなのでしょう。そうではありますまい。これは我が子孫を愚かにするものです」財産を一族の困窮するものに分け与え、その生業を成り立たせ、結婚の仲立ちをした。地域の人々が危難に遇うと財産を与えて救済した。そのために程夫人が亡くなったときには家には一年分の蓄えもなかったのである。

程夫人は嘉祐二年[1057年]四月癸丑[7日]に郷里で亡くなり、その年の十一月庚子[22日]に墓地に葬られた。享年は四十八であった。軾が朝廷に用いられたことから武陽県君の称号ぶようけんくんを贈られた。

程夫人は六人の子を生み、長男けいせんの景先と三人の娘は早くに亡くなった。特に三女は程夫人によく似ていて、学問にも通じていたが、十九歳で嫁ぎ先で亡くなった。

ああ、婦人が従順でその親族を仲睦まじくさせ、家の内をきちんとさせる知恵があれば、それで十分に賢いとされるだろう。まして、程夫人はその夫と子を発奮させ、教え導き、三人とも学識をもって天下に重んじられるようになったのだから、その見識の高さはとても真似のできないものであったのだ。古の人は、国でも家でも、その興ると衰えるときに妻が関わらないことはないと言った。程夫人を見れば、古の人の言うことがますます信ずべきだと知れる。

その銘に曰く。

貧乏のときはその夫の名を汚さず、

裕福になってもその子孫に累を及ぼさず、  
学問に努めることが一家の名を顕すことであると知っていた。  
真直ぐに世に栄をなし、  
夫を励まし、子を教え、  
その光は大きかった。  
しかし、その寿命はその徳に見合わなかった。  
その余った福を子孫に施すということなのであろうか。

【補足】〔(1) この墓誌銘に、蘇軾の母は実家に援助を求めなかったと記してある。これは実際には援助を受けていたので、敢えて否定してみせたと推測させるものである。蘇軾の母が家を豊かにしたという記述もまたその裏に実家の援助があった推測させるものである。蘇軾の母の名誉のためには、墓誌銘の記述を素直に受け止めるべきなのだろう。(2) 母の訃報を聞いて蘇軾父子が都からどのルートで帰郷したのかはわかっていないが、非常に急いで帰ったと推測され、上の墓誌銘にあるように、蘇軾の母は亡くなって半年ほど後の10月22日に眉州武陽安鎮郷可竜里の墓所に葬られた。夫の蘇洵は妻の墓の前で次の祭文を読み上げた〕

### 【訳文】

そ じゆん さい ぼう さい ぶん  
蘇洵：『祭亡妻文』

ああ、君との好は百年と約束していた、  
その半ばで私を棄てて先に逝ってしまうとは——  
私は都に行き、遠からず帰ることになっていた、  
君がこうも早くに逝ってしまうとは——  
君は去って帰らない、

私は永く哀しみ続ける、  
反復して君を思うのなら、  
もしや帰りくのではなからうか……。

人は言う、  
死生の短い長いは思い通りにならない、  
誰もがそうなのだと、と。

それはわかっているも悲しまずにはいられない、  
生きてこれほどの災いはないのだから。

君には六人の子があった、  
いま誰がここにいるのか。  
ただ軾と轍だけだ。

ああ、君は二人を慈しみ育て、  
二人はすでに成人となり、すでに結婚した。

君は二人に学問を教え、  
世に何も聞こえるところがないままではないのを願っていた。  
昼となく夜となく、君が子等のために尽くしていたのを、  
ほかでもない私は知っていた。

私が子等を連れて東に旅立とうとしたとき、  
門を出るのをためらわずにはいられなかった。

いま出発して、もしも思うところが叶わなかったら、  
いつの時に帰ればよいのだろうか、と——

二人の息子は、私に言った。  
「どうしてくずくずしているのですか、

後に悔やむことなどがあるでしょうか」  
二人の息子は郷里を遠く離れ、寒さにも暑さにも耐え、  
一つの試験に合格して宮中での試験に挑み、  
堂々の文章を書いて、お歴々の方々を驚嘆させた。  
二人の息子が喜んだのは、  
官に就けるよりも何よりも、  
自分等の文章が世に称えられたのを、  
きっと母が喜ぶと思ったからだった。  
二人の息子は、母が長生きすることを願っていた、  
千里の彼方の故郷に帰ってみれば、  
家は無人になっていた。  
いくら泣いても母の姿を見ることはできないのだった。  
私は、君が平生手にしていたものを見るにつけ、  
しみじみと泣かずにはいられない。  
ああ、私は老いて一人になった。  
君が逝ってしまって、家の内の良き友がいなくなった。  
終日孤独であるばかりではない、  
過ちを為しても正してくれる者がいないのだ。  
昔、私が若かった頃、  
私は遊び呆けて勉強をしなかった。  
君は何も言わなかったけれど、  
心の内は穏やかではなかったのだろう。  
私がいっままでたってもふらふらしているのを、

君が心底憂いているのを知り、  
 私は慨嘆し、ついに気持ちを入れ替えた。  
 そこから、今日に至った。  
 ああ君は死に、再び君と時を同じくすることはできない。  
 安鎮あんちんの郷きょう、里りの名は可竜かりゅう、  
 武陽ぶよう県に属するところ、  
 州の北東の小高い丘、  
 そこに君の墳墓がある。  
 墳墓には二室を掘った、  
 いつしかそこで私は君と一緒にになる。  
 骨や肉は土に帰るが、魂はそうではない。  
 私達の旧い家は一切を改めずにおこう。  
 我が魂は帰るべきところに帰るであろう。

【解題】蘇軾そてつと蘇轍そたくの2人は足掛け3年の喪に服した。宋代そうだいの士大夫しだいふは服喪の期間を厳重に守ろうとした。服喪中であることを隠して官職に就いて、後にそれが知られて厳しく弾劾された者もいた。服喪中は何かと行動を慎み、その期間の蘇軾の作品はあまり存在しない。この項の表題に掲げたのは、執筆年代はわからないが、後になって母の思い出を記した短文である。題名にある「先夫人せんふじん」が母のことだ。

### 【訳文】

私が少年の頃、勉強部屋の前に竹柏なつきや桃の木があり、その左右にたくさんの草花があった。木にはいろいろな鳥がきて巣を作っていた。

母は生き物を殺すことを嫌い、子供にも使用人にも鳥を捕まえるのを許さなかった。何年かすると、鳥は低い枝にも巣をかけるようになり、その雛を上からのぞくこともできるようになった。

羽根が五色に輝<sup>どろ</sup>桐花鳳<sup>かほう</sup>も、毎日、四、五羽やってきて、そこらを飛び回るようになった。この鳥の羽毛は珍重され、なかなか見るのさえ難しかったのだが、我が家では人に馴れ、恐れることはなかった。近くの人が見に来て、これは珍しいと言いつつ合った。

これはほかでもなく、生き物に害を加えることのない母の誠の思いが、鳥にも信用されたからである。

土地の老人はこのように言った。

「鳥は人から遠く離れたところに巣を作ると、その雛は蛇や鼠<sup>ねずみ</sup>や狐<sup>きつね</sup>や狸<sup>り</sup>や鴟<sup>とび</sup>や鳶<sup>とび</sup>に食べられてしまう憂いがある。だから、人が殺さないかわかれば、むしろ自ら人に接近して、雛を危険から免れさせようとするのだ」

ということからすると、鳥が遠くに巣を作って人に近づこうとしないときは、人が蛇や鼠よりも悪さをすると鳥が考えていることになる。「苛政は虎よりも猛なり」という孔子の有名な言葉があるが、鳥の判断も全く同じで、思いやりのない人間のそばにいるよりは、自然の苛酷な環境下にあった方がまだよいと考えるのである。

## ■【01-2-018】記先夫人不発宿蔵

【解題】これも執筆年代はわからないが、後になって母の思い出を記した短文。

### 【訳文】

母は眉山<sup>びざん</sup>県の紗穀<sup>しゃこく</sup>行に住んでいた。ある日のこと、二人の女中が絹<sup>の</sup>の布を熨<sup>の</sup>して、足が地中に落ちてしまった。よく見ると、数尺の深さの穴があって、一つの甕<sup>かめ</sup>があった。甕は黒い木の板で覆われていた。母は土で穴を塞ぐように命じた。甕には何か入っていたのだろうか、それから一

年ほどの間は、人が咳をするような音がしていた。

何かしら隠してあったものがあると、普通の人はそれを出してみようとする。母の甥がこのことを聞いて、甕を開けてみようとした。私はたまたま別のところで暮らしていたので、このことを聞いて急いで家に行き、一丈余りも掘ってみたが、甕は見つからなかった。

その後、私は鳳翔<sup>ほうしょう</sup>で官職に就いたときのこと、雪が降り、古い柳の下にだけ、一尺四方ばかり雪の積もらないところがあった。雪がやんでから見ると、その地面は数寸ばかり盛り上がっていた。私はここは昔の人が丹葉<sup>たんや</sup>[仙人になる薬]を埋めたところではなかるうかと疑い、掘ってみようとした。すると、亡妻<sup>ぼうさい</sup>[王弗<sup>おうふつ</sup>]が言った。「先にお義母さまがおられましたときには、決して掘り出しはなさいませんでしたのに」と言ったので、私は恥じて止めた。

## ■【01-2-019】猪母仏

【解題】これも執筆年代はわからないが、服喪中に蘇軾がどのように過ごしていたのか、わずかながら窺い知れる文章である。

### 【訳文】

眉州<sup>び</sup>の青神県<sup>せいしん</sup>の道のかたわらに小さな仏屋<sup>ぶつおく</sup>[仏像を納めた小屋]があり、俗に「猪母仏<sup>ちよぼぶつ</sup>」と呼んでいる。

百年ほど前に、ここで牝の猪が倒れ伏して、泉に化したといわれている。泉には二匹の鯉がいて、「これは猪竜<sup>ちよりゅう</sup>[体は猪で首が竜の怪物]になるべきものだ」ともいわれている。蜀の人は、牝の猪が猪竜の母であると考え、泉のほとりに仏堂を立て、「猪母仏」と名付けたのである。泉の水は石から湧き出し、泉の深さは二尺にも及ばない。しかし、大日照りのときにも水はなくなる。二匹の鯉を見た者はほとんどいなかったのだが、私はある日、たまたま鯉を見た。そのことを妻の兄<sup>おうげん</sup>の王愿<sup>でんえん</sup>に告げた。王愿は深く疑い、私が誕を言っているのだと考えた。私は疑われたのが不

満で、王愿を泉に連れて行き、泉のほとりで祈った。

「私が誕でたをいっているのだから、魚はきっとまた現れるであろう」

そのようにいって、鯉はまた出てきたので、王愿は大いに驚き、再三謝って去って行った。

この場所では昔から霊異があるいわれていた。青神県しよぶんきゆうに朱文及という者がいた。父が病んだので医者と呼ばれに行こうとして、夜にこの近くを通った。すると、髪を束ねた女性おんながいて、琴を負い、手招きをして家の内へ入れようとした。朱文及は、父が病気なので、ここには留まれないと断った。ところが、女性に強く引き留められてしまった。そして、暁になろうとするときになって朱文及はそこを去り、数里も行かないところで、道のかたわらに賊のために殺されてしまった人を見た。まだ殺されたばかりで冷たくなっていなかった。もし女に引き留められていなかったならば、朱文及もきっと賊に襲われていたのだろう。

泉は石仏鎮せきぶつちんの南五里ばかり、青神県からは二十五里ばかりのところにある。

【補足】〔(1) 青神県せいしんは妻おうふつの王弗びざんの実家があり、蘇軾そしつは服喪中に眉山県びざんから時折そこを訪ねていたのだろう。道の途中で泉に鯉こいがいるのを見て、妻の兄おうげんの王愿に告げたのである。(2) 朱文及しゆぶんきゆうを引き留めたのはむろん遊女であったのだろう。神霊によって救われたという話として完結するには、後で朱文及が戻ってみたら、女に呼ばれた場所には人家などはまったくなくて、仏屋ぶつおくだけが存在したといったことが記されているべきであろうが、蘇軾は自ずとわかると思って省いたのだろう〕

## ■ 【01-2-020】 池魚自達

【解題】 上の話に関連して、郷里に伝わる怪奇譚を見ておこう。

### 【訳文】

眉州びの人の任達にんたつが私にこのように話した。

こどものときのこと、深い池に数百匹の魚を飼っている者がいた。池は石や瓦で囲ってあって、一周は一丈ほどで、四方に建物が並んでいた。およそ三十年余りの間に、魚は大きく育った。ある日のこと、よく晴れて、雷などは鳴っていなかった。池の中から突然大きな音が起り、激しい風雨であるかのような音だった。すると、魚が躍り上がり、竜巻が起り、魚は空へと昇ってゆき、どこに去ったのかわからなかった。

任達はこのようにいった。

「昔からいわれているのは、池の魚は神に守ってもらわないと竜に取られてしまう、と。きっと、そういうことで、竜に取られたのだらう」

私が考えるに、竜がくるときには必ず風雨を伴うものである。この魚は三十年余りも池に閉じ込められていたので、騰り抜きたいとの思いを増していったのだらう。その誠の心が長く衰えることがなかったので、ついに自らそれを達成したのだらう。それがきっと理に適っているのである。

【補足】〔(1) 任達<sup>にんたつ</sup>は、兄弟で科挙に合格した「大任<sup>だいにん</sup>」「小任<sup>しょうにん</sup>」〔→作品番号01-1-009〕の一族なのだらう。(2) 蘇軾<sup>そし</sup>の解釈は、いかにも宋代士大夫<sup>そうだいしだいふ</sup>の心意気を示すものである。学問に励んで、科挙に合格すれば、出自によらずに宰相にまでなれるというのは、中国史上、宋代になって初めて開かれた道であった。自分の意志を強く保ち続けるのなら、魚も天に昇るのである。(3) 郷里に帰った蘇洵<sup>そじゆん</sup>について記しておく。嘉祐<sup>かゆう</sup>2年〔1058年〕秋、帰郷後1カ月ほど経ったときに歐陽脩<sup>おうようしゆう</sup>に手紙を送り、老いたこの身で数千里の道を超えてまた都に行くことはもうないだらうと記している。その翌年の春か夏のころだらうか、梅堯臣<sup>ばいぎょうしん</sup>から出仕を促す詩が届いた。それを見ておこう]

ばいぎょうしん だいろうじんせんし  
梅堯臣：『題老人泉詩』

泉上有老人、(泉のほとりに老人がいる)

隱見不可常。(泉はいつもあるのではなく隠れたり現れたりする)

蘇子居其間、(蘇<sup>そ</sup>先生<sup>そ じゅん</sup>[蘇洵]がいると泉が現れ)

飲水樂未央。(先生は泉の水を飲んで楽しみが尽きることがない)

泉中若有魚、(泉に魚がいれば)

与子同徜徉。(先生は魚とともに気ままに歩み)

泉中苟無魚、(泉に魚がいなければ)

子特玩滄浪。(先生は波とともに遊ぶ)

歲月不知老、(年月が流れても先生は老いることがなく)

家有雛鳳凰。(先生の家には鳳凰の雛<sup>ほうおう</sup>[蘇軾兄弟]がいる)

百鳥戢羽翼、(他のあまたの鳥はその雛の前では翼をおさめ)

不敢呈文章。(あえてものを言うことがない)

去為仲尼嘆、(先生は泉のもとへと去って、世に用いられないことを嘆いていたのだが)

出為盛時翔。(いまこそ勢いよく飛翔すべきときである)

方今天子聖、(いまはまさに聖天子の時代)

無滯彼泉傍。(泉の傍らでぐずぐずしてなどいられないのだ)

【補足】[上の詩の届いた後、嘉祐3年 [1059年] 10月に雷簡夫<sup>らいかん ぷ</sup>から、様々な人々の運動が功を奏して蘇洵<sup>そ じゅん</sup>を学士院に入れるための試験を実施する運びとなったと知らせてきた。学士院のメンバーになれば、いきなり皇帝との距離が近くなる。試験を行うことは11月5日に正式に決定され、蘇洵を試験に呼ぶ皇帝からの指示が届いた。絶好の機会であるはずなのだが、蘇洵は思うところあって、老病を理由に辞退する手紙を書いた。合わせて国政の改革すべき10箇条をそこに書き添えた。その後で、梅堯<sup>ぼいぎょう</sup>臣<sup>しん</sup>に手紙を送り、50歳の衰病の身で名利のために都に行くのは人々の失笑を買うであろうし、かつて制科<sup>せい か</sup>を受けて不合格となったときの苦しみをまた味わうことになるかもしれないと思うだけで耐え難いので、皇帝の招きを辞退したと記している]

## ■ 【01-2-021】 上知府王竜図書

【解題】これは嘉祐<sup>かゆう</sup>4年〔1059年〕春ごろに成都知事<sup>せいと</sup>として赴任してきた王素<sup>おうそ</sup>に送った手紙。王素は、三代皇帝<sup>しんそう</sup>の真宗<sup>しんそう</sup>に仕えて名宰相と讃えられた王旦<sup>おうたん</sup>の末の子で、蘇軾よりも29歳年長である。高官の子弟には科挙によらずに官位が得られるという特典があつて、王素はそれによって官員になり、すでにいろいろな官職を歴任していた。王素は後にまた登場することになるので、手紙の一部分だけでも読んでおこう。なお、王素の名はすでに作品番号01-2-010にも出ていて、「成都知事の王素の推薦で…」と記されていたのは、まさにこの時期のことであつた。

### 【訳文】

あなた執事が来られてまだひと月にもなりません、蜀の士大夫は近頃<sup>しよく したいふ</sup>にない慶賀すべきことであると喜んでおります。町の庶民は君子の心の用い方などは知らないはずでありますのに、やはり喜びを広く伝え合つて留まる場所を知らません。たとえ米や布をもらったところで、そこまで喜びはしないものです。明公<sup>めいこう おうそ</sup>〔王素〕は何の術でこの喜びを与えたのか、私が言うまでもありませんでしょう。……〔以上のような人々の大きな期待に答えて、王素がみごとに成都を治めるのは難くないと、蘇軾はその根拠となる二つの理由を挙げる。第一は、父の王旦は18年にわたって宰相を務め、王素はその才能を受け継いで、すでに定州知事としての立派な実績があること。第二は、蜀の人々はこれまで厳しく統治されてきたので、少しでも重荷を軽くしてやりさえすれば十分に感謝するであろうこと。その一方で、統治には二つの困難があることを挙げる。第一に、国には兵〔軍隊〕を養つて民を守る責務があり、一方で、兵を養うには民に税を課さなければならないので、両者のバランスを取るのが難しいこと。第二に、蜀の人が「怯」〔意気地なくおびえる〕であるために、何かしら問題があつても、ものをいって我が身に返ってくるのではないかと恐れて黙ってしまうので、問題

点が見えてこないこと]……

伏して思うに、明公[王素]の世に秀てた才能をもってすれば、施して可ならざるものは何もないであります。統治がやさしいとして私が挙げた二点をもって急ぐのではなく、難しいとして挙げた二点を深く考えて徐々に行き実行して行くなれば、蜀の地ばかりでなく、広く天下は明公の恩沢を被ることになるであります。私は喪に服しており、貴人の門を訪れることは遠慮し、妄りにものを申し上げるべきではないのですが、内なる思いを抑えきれず、明公のおそばにお仕えする者に以上のようなことを申し上げる次第です。これまでに政事に関することなどを記した十五篇の文章を添えますので、御笑覧いただければこれにまさる幸いはありません。

【補足】〔(1) この手紙の冒頭には、齒の浮くような贅辞を並べている。名宰相の子であって、年長の王素おうそにはこれくらいは書いておかないと失礼に当たるのだろう。王素が本当にこの贅辞に値する人物であったかどうかはわからない。名家の出として驕慢なところもあったようである。(2) 逐語的な訳文は示さなかったが、なかほどしよくで蜀において、兵を養うことと民に税を課すことのバランスを取るのが難しい理由として、蜀では民の怨みから勃発した「甲午の大乱」こうごがあったことを挙げている。民の怨みとは何か。蜀の地が武力によって宋朝の支配下に組み入れられたとき、宋朝の統治方法は粗雑で暴力的で、蜀の地に蓄えられていた富はことごとく略奪されて宋の都に送られ、正規の税の他にも様々な税が課せられて蜀の民は激しく収奪されたのだった。特に、蜀の特産品の絹は、宋朝の厳しい管理下に置かれ、商人による自由な取引は禁止された〔蘇軾の先祖は絹を扱う商人であったと推測されているので、このときに大打撃を受けたであろう〕。淳化4年〔993年〕初め、王小波じゆん かという人物が、おうしよう は「貧富の差を均しくする」ということをスローガンとして掲げて決起すると、圧政に苦しんでいた各地の民衆が呼応し、たちまち大きな反乱に発展した。その年の終わりに、王小波は矢に当たって死んだのだが、李順り じゆんがその後を継ぎ、淳化5年〔994年、甲午の

歳]の初めに成都を占領した。李順は大蜀主と号して四方の攻略に乗り出したので、宋朝は大規模な討伐軍を送り込み、反乱はそれから半年ほどで鎮王された。蜀の民はその後も強圧的な政治に苦しめられ、結果として、蘇軾が手紙で指摘するように、蜀の人は「怯」[つまり裏を返せば面従腹背]となったのである。こうした蜀の民の苦難の歴史に配慮して統治することを蘇軾は王素に期待したのである。(3) 王素に会うために成都に行った蘇軾は僧の惟簡[宝月大師][→作品番号01-1-002]との交流を深めてもいる。(4) 王素に提出した15篇の文章がどのようなものであったのかわからないが、喪中の間に儒学の古典である『春秋』を研究して多数の小論文を書いていた。『春秋』は孔子が編んだ編年体の史書で、極めて簡潔な年表のようなもので、それだけでは何が書かれているのか理解が難しいのだが、孔子は一字一句に深い意味を込めて編集したと考えられていた。蘇軾はそうした意味を読み取ることに、喪中の時間をあてたのだった]

## ■【01-2-022】咏怪石

【解題】珍しい形状の石を詠んだ詩。嘉祐4年[1059年]の作とされるが、喪中には詩を作らなかったはずであるからそれは疑わしいとする説もある。後に見るように、蘇軾は無類の石好きであるから、ついつい詩を作ってしまったということはいえなくはないだろう。

### 【訳文】

家にごつごつと荒々しい姿の岩があり、  
軒先のまばらに生えた竹の間に据えてある。  
ほかの人は皆が喜んで見に来るのだから、

私だけは棄ててしまおうと思っていた。

何の使い道もないくせに、

朝から晩まで威張って立っているだけなのだ。

きぬた いしづら  
砧や礎にしようとしても割れてしまいうらうし、

と いし  
砥石や硯にしようとしてもざらざらで馴染まないだろう。

鳥を捕らえる投げ輪に付けるには重過ぎるし、

碑文を刻むには硬過ぎるだろう。

六つの用途のどれにも役立たないのだから、

無用の長物とされてしまうのは免れようがない。

ところが、この岩は本来靈妙怪奇な存在であったようで、

夢の中で私に会いにきた。

幽霊のように現れ出て、

肩をいからし股を開いて、何ともいかめしい格好であった。

ごろごろと岩が転がるような声を立て、

しばらくしてから言葉が聞き取れるようになった。

「わしは石の精だ。  
せい

君がわしを辱めたことに憤り、

一つ言ってやらねばと出てきたのだ。

天地がわしを生み、

わしの仲間は広くたくさん存在している。

君が言う六つの用途に適した石なら、

星や雹の数ほど山や谷にころがっておる。

割られたり砕かれたりして世間に使われたところで、

ちっぽけな用を果たすだけのことだ。  
 とて賢者であるとはいえないだろう。  
 わしのようなものは非常に少なく、  
 ときたま経典や史書に記されることがある。

『書経』<sup>しょきょう</sup>に記されているのは、  
 海岱<sup>かいたい</sup>にあつて雅さを賞賛された岩、  
 『春秋左氏伝』<sup>しゅんしゅうさしでん</sup>に記されているのは、  
 驕慢な君主を改心させるために白昼に語った岩。  
 あるいは驪山<sup>りざん</sup>にあつて秦国から攻め入る敵を拒み、  
 一万頭の牛で牽いても動かなかつた岩があつた。  
 あるいは揚州<sup>ようしゅう</sup>にあつて盧全<sup>ろぜん</sup>[唐代の詩人]を動かし、  
 己に代わつて立派な詩を作らせた岩があつた。

君がわしを得て無益ということはない。  
 雷が鳴ろうが、寒さが厳しかろうが、わしはびくともしない。  
 彫つても文字は刻めず、磨いても輝かない。  
 君にこの言葉を贈ろう――

君の節義をわしくらいに堅くしてみるのだ。  
 ちまちまと私を責めるのはもうやめるのだな」

そのように岩が言うのを聞いて私は愧じて謝ると、  
 その奇怪な姿はたちまち消えてしまった。  
 はっと目覚めて、坐り直してその語を思い、  
 この詩を作つて、机の横に書き記した。

【補足】〔1〕この詩は、喪が明けていよいよ実際に官界に出て行こうとする蘇軾の

決意を表したものであるのかもしれない。(2) 蘇洵<sup>そ じゆん</sup>は、息子達の服喪期間が終わると、上京の準備を始め、子とともに東に向かうと書き記した手紙を歐陽脩<sup>おうようしゆう</sup>に送った。2人の息子は科挙に合格していたから官職に就けるのは確実であったけれど、蘇洵もまた己の才能によって特別に官職を与えてもらえるとの確信を抱いていたのだろう。また、それまで胸の奥にしまい込んでいた娘の死についての思いを、『自尤』の詩 [→作品番号 01-1-049] に託して詠んだのもそのころであった。こうして、嘉祐4年 [1059年] 10月に眉山<sup>びざん</sup>県を発ち、本章の初めに見たような長江<sup>ちやうこう</sup>を船で下る旅が始まったのである]

## ■ 【01-2-023】 荊州十首

【解題】ここから旅の続きに戻る。江陵府<sup>こうりやう</sup> [荊州<sup>けい</sup>] に滞在していた蘇軾はそこで新年を迎え、25歳になった。江陵府にいる間に見聞きしたことを十首の詩にまとめたのがこの作品で、杜甫<sup>と ぼ</sup>の『秦州雜詩二十首<sup>しんしゅうざつし</sup>』を念頭に置いて作ったものと思われる。

### 【訳文】

#### 其の一

旅人<sup>さんきやう</sup>が三峡を出ると、

その先はどこまでも平らだ。

蜀<sup>しよく</sup>の川は山地を切断し、

楚<sup>そ</sup>の川は平野を切断する。

蜀から下って来た船は、

呉<sup>ご</sup>から上って来た船に囲まれる。

蜀の山から来た人間は平地の商売人にまどわされ、

砂を巻き上げる平地のつむじ風にもまどわされる。

荊州の町を囲む堂々とした城壁を見れば、

思わないわけにはいかない、

蜀と楚の間には長い興亡の歴史があったことを。

【補足】〔第一首では、江陵府〔荊州〕が交通の要衝で、戦略的に重要な場所であることを詠んでいる。山がちの蜀から長江を下ってくると、荊州から先はおおむね平野である。長江をライン川に置き換えると、蜀はオーストリアに、楚はドイツに、呉はオランダに相当するであろうか。この一連の詩では、蘇軾が蜀の人間であることを強く意識しているのが特徴的である〕

## 其の二

荊州から南を見やれば、

古戦場が多々あり、

英雄の猛き思いや、

忠臣の清き思いが、

いまでも感じ取れるかのようだ。

古く繁栄した町は消え去り、

かえって井戸を囲んだだけの小さな村が残り、

そこには昔ながらの姓を保つ人々が住んでいる。

古今に変わらぬ大地のありさまは目には明らかでも、

歴史の上がり下がり、

軽々しく論じるわけにはいかないのだろう。

其の三

<sup>そ</sup>楚の地は限りなく広く、

遠くぼんやりとどこまでも田畑が連なる。

そこに汗水垂らして働く人の姿を見ないのは、

植えたら植えっぱなしということなのだろうか。

己の怠け癖を何とかしようという様子がまるでないのは、

愚かというべきか、哀れというべきか。

これで凶作に見舞われたら、

年のめぐりが悪かったと、恨んですませるつもりなのだろうか。

【補足】<sup>そ</sup>楚の人たちに対してかなり批判的な見方を提示している。このような地域  
的偏見は蘇軾の後の詩にはほとんど見られなくなる]

其の四

<sup>けい</sup>荊州の町を囲む高い城壁の東の隅に、

<sup>ぼうさろう</sup>望沙楼の朱塗りの欄干がある。

かつて<sup>こうおう</sup>高王はここに隣国の使者を招き、

盛大な宴を催して接待に努め、

楼から見渡す大地をもって、その隣国に奉仕すると誓った。

いくつもの国に対して高王は同様の約束をしつつ、

いまにもどこかで<sup>のるし</sup>烽火が上がるのではないかと、

びくつきながら欄干から眺めていた。

いまは霞む彼方に屋根の先がぼんやり見えるだけであるのだが、

野にはなお戦に倒れた人々の骨がそのままに埋れているのだろう。

百年にわたって競い合った豪傑は誰もいなくなり、

いまとなつては魚と蝦えびが争つたようなことになつたのだ。

【補足】[宋の前の五代十国時代に、荊州には高氏こうが建てた小さな国があつた。大国の狭間で生き延びるために、高氏は徹底した弱腰外交で周囲の全ての勢力との揉め事を起こすまいとした]

### 其五

沙頭さとうの市いちはもやもやとした水煙の中。

往き来するの、どうにも騒がしくて下卑た人々ばかりで、

野の市は、鹿が群れて争うかのようなありさまだ。

ただ川を行く官船だけはゆったりと進んでいる。

旅の人の多くが占ってもらおうとするのだらう、

田舎の老人が大勢、亀を携えて、問われるのを待っている。

日が暮れて江かわの空が静まってゆくときに、

古いにしへの楚辞そじを唱えるような声は聞こえてこない。

【補足】[荊州の町から南東十五里にある沙頭さとうの市いちに行つてこの詩を詠んだ。最後の句にある楚辞とは、楚の偉大な先人である屈原くつげんや宋玉そうぎよくが作った韻文で、それを朗誦する人がいないことや、占いが盛んであることをもつて、楚の人が野卑であるとしているのだが、さすがに強引すぎる見方であらう]

### 其六

知事ちしの王夫子おうせんせいは、

山東さんとうから出た俊英である。

壮年のころは猛烈をもって聞こえ、

老人になっても雄豪と目されている。

どこに行ってもその地の名物を食らうことなどには関心がなく、

車を駆って実地に民を治めることに熱心である。

いま朝廷には立派な宰相がおられるから、

屈原が放逐されたときに鬱屈する思いを詠んだ『離騷』のような作品を、

知事殿が作ることはないのである。

【補足】[江陵府の知事の王兵部 [→作品番号 01-1-041] のことを詠んでいる。「名物を食らう」と訳したあたりは、同じ王姓の昔の人の故事を用いて、それがわかる人には含蓄に富んだ句として味わえるのだが、我々にとっては煩わしくもあるので、大意を取って訳した]

### 其の七

年末の荊州は風雪の日が多く、

そうでなくても旅人の心は落ち着かない。

町の人や村の人が嬉々としているのは、

昔から季節行事を重んじる土地柄で、

鬼やらいの日を待っているのだ。

いよいよその日になると、

竹を爆発させる音に、

子どもたちがわんさと集まってくる。

その賑わいのなかで、

私はしみじみと故郷の友人を想うのである。

## 其の八

江の水は深く、  
 底の窟に潜む魚は犀のように大きい。  
 赤い鱗は琥珀のように輝き、  
 頭の中にある老枕の骨は玻璃よりも美しい。  
 上等の客人があるとその魚は俎板に挙げられ  
 老枕は女性の髪に揺れる翠の釵となる。  
 料理されるにしても器物に作られるにしても、  
 どちらにしても切り刻まれてしまうのである。

【補足】[この詩の発想は『咏怪石』の詩〔作品番号01-2-022〕と類似している。いかにも有用そうなものは、つまらない役に使われてしまうだけだと詠んでいるのである]

## 其の九

雁は北の国から南の国に来る。  
 その頼りないありさまは旅人と似ているだろう。  
 自由に飛んでいた翼が折られてしまった雁を見れば、  
 涙で巾を濡らさずにはいられないだろう。  
 普通なら人が捕らえようとしても、  
 高く飛んで人には近づかないはずであるのだが……。  
 我が友がこの雁を持ってきて贈ってくれた。  
 三度嗅いで、

いかなる珍味であろうかと考えるのである。

【補足】<sup>けい</sup>「荊州の人々は、冬に飛来する雁を珍味として賞玩していたのだろう。知人から雁を贈られて、蘇軾は食指を動かすよりも、鳥を哀れむ心の方が先んじたようである。後に、蘇軾は厳密ではないけれども肉食主義者になるのだが、その端緒をここに見ることができるだろう」

### 其の十

<sup>けい</sup>荊州城の南門から始まる<sup>だいどう</sup>大道を馬で走り、

春の陽射しが注ぐ野に至ると、

秋の枯れ草を焼いた跡から、

風に誘われて緑が芽生えようとしている。

荊州から道は縦にも横にも北にも南にも通じ、

天下を自在に往来できるというのに、

かつてのこの王様はどうしてああまで弱々しかったのだろうか。

【補足】〔(1) 最後の句は、戦国辞時代の楚<sup>そ</sup>くにちの<sup>かいおう</sup>懐王のことを詠んでいるようである。懐王は当時大国であった楚国の国力を十分に活用しなかったために、結局は西から勃興してきた<sup>しん</sup>秦国の勢いに呑み込まれてしまった。(2) 最初にこの十首の詩は、杜甫の『<sup>とほ</sup>秦州<sup>しんしゅうざつし</sup>雑詩二十首』を念頭に置いて詠んだと推測されると記したが、杜甫の詩と比較するのは、いかに大才であっても25歳の蘇軾にとっては酷な話であろう。杜甫の詩は、思うところあって朝廷の職を辞して西に出て、秦州の小さな町に至って詠んだもので、叙景、叙情ともに緊迫感に満ちている。苦難に満ちた歳月を経た杜甫の詩境へと蘇軾が近づくのはまだまだ先であった〕

## ■ 【01-2-024】 渚宮

【**解説**】渚宮しよきゆうとは春秋時代しゆんじゆうの楚国その王が建てた宮殿で、その遺跡けいが荊州けいにあった。上の詩に見た懐王かいおうよりもさらに昔、楚国の最盛期のころのことである。当時、黄河こうがの中下流域は中華文明の先進地域で、諸侯が一定のルールに従って勢力争いを延々と繰り広げていた。一方で、長江流域ちやうこうは文明の後進地域と見なされていたのだが、南方の広大な土地を配下に置いた楚国が着々と実力を蓄え、独自の価値観で北方諸国に圧力をかけるまでに成長した。この詩の前半は、ややエキゾチックに楚国の繁栄ぶりを歌い、後半は、渚宮の近くの他の遺跡について詠んでいる。

【**訳文**】

古いにしへの楚その都みやこにあった渚宮しよきゆうもいまは寂しくその名残をとどめるだけ、

楚の地はいまも遥かに広がっているものの、

かつての楚の国ではない。

五代十国時代ごだいじゅうこくの王が建てた台閣でさえすでに草に埋もれてしまったのだから、

春秋時代しゆんじゆうの遠い昔を問うすべはもはやない。

かつて楚王が獵から帰ってきたときに、

おどろに太鼓が打たれ、

猛々しい兵士が喜び勇んで船を操っていた。

釣り上げられた魚や亀は数知れず、

千石せんせきの大きな鼎かむぼで蛟螭みずちまでも煮たのだった。

このとき楚の都の人々は宮殿を造るために、

古いにしへの名匠もかくやと思わせる絶妙の工夫を凝らし、

高さ百尺の高楼が湖水に照り映え、

上には燕国や趙国から連れて来られた美女が並び、

楚王は意気揚々と風に臨み、

宋玉に命じて賦を作らせたのだった。

楚の栄光は永くは続かず、

西から秦の軍団が来て、

宮殿の宝物は持ち去られてしまい、

その跡地には草が生えるだけとなった。

千年前の壮観はもはや蘇るはずもなく、

いま見るのは小さな片鱗だけである。

池は干上がり、野原に小さな楼閣があるだけ、

深い竹林は狐や狸のすみかとなっている。

渚宮の近くには、後漢の時代に馬融が建てた絳帳台があった。

その姿はいまはないけれど、

台閣の下を流れていた水はいまも清らかなさざ波を浮かべている。

馬融は学問を教えながらも、

緑の窓と朱い扉を閉ざした奥深い部屋のなかに、

大勢の女性を置いて音楽を演奏させていた。

声色を愛するそのような腐れ儒者は、

孔子や周公について議論してはならない。

泉が砂に埋もれて半ば涸れてしまったその先に草堂があり、

窓の紙は破れたままで風が風思と鳴っている。

ここは陳公[宋の三代皇帝に仕えた陳堯咨]のゆかりの建物で、

その事績はまだ遠く隔たっていないのだが、

人の世は百年の間に幾度も変わってしまい、  
 何もかもが廢墟となってしまうのではないかとの恐れを抱く。  
 今日私がたどった跡をまた訪ねようとする者がいたなら、  
 草の中にある湘東王しょうとうおう〔南朝時代の梁の元帝りょう げんてい〕が建てた碑が目印となるのだろうか。

## ■ 【01-2-025】 荊門惠泉

【解題】 蘇軾は1月5日に江陵府こうりょう〔荊州けい〕を發ち、陸路で北に進んで都を目指した。  
 数十キロほど行った荊門軍けいもんの惠泉けいせんに立ち寄ってこの詩を詠んだ。

### 【訳文】

泉の源は高いところにある。  
 石の脈に従って走り下り、  
 白い水を乱れ飛ばすかと思えば、  
 蒼い崖に隠れ、それを裂き破る。  
 ぐるぐると廻って曲がった沼となるときは、  
 清らかに澄んで底までも見え、  
 流れ注いで長い谷川となるときは、  
 速く走って蛙も流してしまう。  
 初めは一碗にも満たなかった水が、  
 次第に絹の反物を流すような大きくなるのである。  
 伝え聞くところでは、  
 この山の神物しんぶつ〔竜〕は怠け者であったので、  
 ここに瀆たふされて、雷雨を起させなくされてしまい、

濃艶さうざんと冷たい碧い水を吐いただけとなったのだった。

こうして、山の前に住む人々は、

千古の昔から稲田や麦畑に水を灌そそげようになつたのである。

【補足】〔(1) 泉のもたらず恵みは竜が怠け者だったたまものであるというのがこの詩の眼目であろう。(2) この詩に続いて『次韻答荊門張都官維見和惠泉詩』〔荊門の張都官維が惠泉の詩に和せ見れしに次韻して答える〕という詩がある。荊門軍の役人である張維という人が蘇軾の惠泉の詩に和したので、それに次韻して答えたのである。「詩に和す」とは、元来はもとの詩と同じテーマで詩を詠むことを意味し、韻も違えば、詩形が違っても構わなかった。一方で、「次韻」とは、もとの詩と同じ形式で同じ韻をそっくりそのまま用いて詩を作ることを意味し、両者は同じではない。ところが、唐の半ばごろからは「和す」といいつつ実は「次韻」するようにもなり、蘇軾の場合には「和す」と「次韻」はほぼ同義である。「次韻」という行為はすこぶる社交的なもので、同じ韻を用いるという制約を課して楽しむ知的なゲームで、その性格上、優れた作品が生まれることはほぼ期待できない。蘇軾の惠泉の次韻の詩もかなり生硬で興趣に欠けるのでここでは訳さない。後に蘇軾は「次韻の達人」となり、制約があつてこそ一段と力を発揮し、そこから幾つもの傑作が生まれるようになる〕

## ■ 【01-2-026】 涇陽早発

【解題】涇陽を早朝りょうに発ち、馬上で詠んだ詩。

### 【訳文】

富貴なるものがもともとから定まっているのではないとしたら、

栄えたり衰えたりするのはその人自身によるということになるうか。

だとすると、功名心が身の内でやかましく騒ぐのが当然で、私に限ってそのようなことはないなどとは言ってられない。それでちんまり縮こまっていられなくて、こうしてそろりそろりと旅に出てきた。それでも西に故郷を想うことがある。我が田園が荒れるのは覚悟の上だ。外に出てきて何をするのかというと、あくせく富を稼ぐ気はない。天下に何かしら足りないものを補うのだ。それができなければ、怠け者で愚か者だったということになる。人生は意気を重んじる。出処進退にためらいがあってはならない。春を迎えたいま、故郷の水辺では蓮が葉を広げ始めているだろう。湖をおおいつくすまでに蓮を育てあげてきた先人の営みに、何かしら敵うようなことが私にできるのだろうか。

## ■【01-2-027】夜行観星

【解題】早朝の出発は星を上を仰ぎ見ることもあった。

### 【訳文】

どこまでも高く涯のない天空は、夜の厳かな雰囲気に満たされている。

無数の星が正しくその位置におさまり、  
大きな星は射るような光を放ち、  
小さな星は闇から湧き出てくるかのようだ。  
星とはそもそも何ものなのか。  
天界と人界とは干渉し合うものなのか。  
世の人々は、星に一つひとつ名を付け、  
あれは箕みの形、あれは柄杓ひしやくの形と、  
無理に見立てようとする。  
箕も柄杓も人の道具で、  
天にとっては無用であるのだから、  
星は自分からそのように名乗りはしない。  
遠くから何かに似ていると想像するのではなく、  
近くに迫って星を見たらどうことになるだろうか。  
考えてもまるで掴みどころがなく、  
溜め息をつくしかない。

【補足】〔蘇軾は古い中国の文人の代表のように思われているが、もしも違う時代に生まれていたら、すぐれた科学者もしくは技術者になっていたかもしれない。この詩はそうした想像へと誘う一つ例で、この想像をより強めてくれるものを多数見ることになるだろう〕

## ■ 【01-2-028】 漢水

【解題】北上してきた蘇軾は、北から流れ下る大きな河川、漢水かんすいに出会い、この詩を詠んだ。漢水は蜀しよくの地から東向きに出て、このあたりで向きを転じ、南南東に下って

ちようこう  
長江に合する。

### 【訳文】

竿を捨ててからのこのひと月ほどの旅は、

ずっと砂ぼこりに悩まされ通しだった。

じようよう どうとう  
襄陽の手前で滔々と流れる大河に出合い、

その清らかさにさっぱりと身を洗われる気分になる。

この心持ちは故郷の蜀江のほどりに立つのに似る。

それもそのはずで、聞けばこの川は、

蜀の地から我らの旅とは反対まわりで流れ出てきた漢水なのだ。

蜀江はなかに鯨も棲もうかというくらいに水量が豊かで、

漢水もまた広々として、軽々しく渡ってみるようなことはできない。

遙か二千年の昔に、このあたりにも周の文王の教化が及び、

遊女も礼儀正しさをわきまえるようになったと聞く。

漢水の水の音はそれから変わりしなないのだろうけれど、

世の変転とともに、古のよき風はすたれ、

川風が寒々しさを帯びて吹き過ぎてゆく。

私は文王の時代を偲び、

蜀から流れてきた川に向かって、

我が身なりをきちんと整えるのである。

【補足】 [中ほどに詠まれている周の文王は儒家が崇める聖天子である。殷の時代には襄陽は都から見て遠い辺縁の地で、文王のころからようやく文明圏に組み入れられるようになった [むろんそれは為政者側の視点による]。蘇軾は広義の故郷である蜀

の地から流れてきた漢水かんすいと出会い、また文王の教化が及んだ地、すなわち中華文明の歴史的な中心地〔そこは「中原ちゅうげん」と呼ばれる〕に近づいたことから、二重の感慨を抱いてこの詩を詠んだのだろう〕

## ■ 【01-2-029】 襄陽古楽府

【**解題**】じょうよう襄陽はこのあたりの大きな都市で、戦略的に重要な場所である。蘇軾はしばらく襄陽に滞在して幾つかの詩を詠んだ。これは古くから伝わる詩賦のスタイルであるがふ楽府に似せた詩。三首連作の第一首だけを訳す。

### 【訳文】

#### やようらい 野鷹来

野の鷹よ、来るがよい、

ばんざん じょうよう  
万山〔襄陽の西にある山〕の下に。

山が荒れ、食べるものがなく、飢えに苦しむ鷹よ、

飛んで来るがよい。

来たら美しい糸で繋いでやろう。

北の原には老いて真っ白な兔がいて、

毎年、子を養って秋には菽まめを食らってしまう。

鷹を使ってこの兔を撃ってやるのだ。

しかし、兔は老練で鷹の力は弱い。

野の鷹よ、来るがよい、

町の東に高い台が聳えている。

台には皮の小袖こうし こかんを来た公子〔後漢の終わりの劉表りゅうひょうのこと〕がいて、

万里向こうの東を望んで、遙かな思いにふけている。

思いは遙かで、

鷹はどこにいるのか。

ああ、公子よ帰るがよい、

呼べば来るような鷹は凡庸なのだ。

天は曇り、月は黒く、夜に狐が吠える。

【補足】〔(1) 蘇軾のこの作品に限らず、「楽府」と称するものはおおむねその地に伝わる故事を踏まえて作られる。この詩は、後漢の終わりの劉表のことを詠んでいる。襄陽には劉表が築いた景升台があり、劉表はその台に昇って『野鷹来』の曲を歌い、鷹を呼び寄せようとした。鷹はすなわち天下の俊英で、劉表は優れた人物を己のもとに集めて天下を制覇しようと考えていた。劉表は一時期は曹操のライバルと目されたのだが、決断力に欠け、天下に雄飛する機会を逃してしまった。蘇軾のこの詩は、劉表は凡庸な鷹しか集められなかったので、老練な兎〔曹操〕を撃つことができなかったと歌っているのだろう。史実としては、劉表のもとにはまことの鷹である劉備が身を寄せたのだが、劉表は劉備の大才を活かすことができなかった。(2) 蘇軾の『襄陽古楽府』の第二首は三国時代の孟達が歌った『上堵吟』を、第三首は南朝の宋の時代の劉道産が歌った『襄陽楽』を、それぞれ踏まえた作品で、歴史に関する予備知識が十分ないと読み味わうことができないので、ここでは割愛する〕

## ■ 【01-2-030】 岷山

【解説】 襄陽の町の南に岷山という山があり、襄陽を訪れた文人で登らない者はいないほどに有名な山で、蘇軾も山頂に立ってこの詩を詠んだ。三国時代の終わりに羊祜は岷山に登り、「宇宙ができてからこの山はあり、無数の人がこの山に登って遠くを

見た。その人たちはいまはどこにもいない。そして、後に来る人もまた見ることはできない」と嘆いた。それ以来、峴山は悠久の時間の流れに思い巡らす場所となったのである。

### 【訳文】

遠く南からきた我らの前に、  
ぼんやりと春の塵に包まれる山があった。  
登ってみると、山頂の幅は百歩にも満たないけれど、  
眼下には、広々とした大地をひと呑みにする。  
たちまちもの悲しさに襲われるのは、  
千年変わらぬ感慨がここにあるからなのだろうか。  
私のこの憂いを後に誰が知るのか。  
私はいまを生きているのに、  
未来を想ってここに苦しんでいる。  
山の上には堂々とした不変ひのきの檜の巨木があり、  
年々緑を取り換える柳を見下ろしている。  
大才と小才はもともと異なっているのか。  
永久性と一体化することは可能なのだろうか。  
旅人が山の上にいる時間などは、  
星の光が魚籠びくの底に達する一瞬のきらめきにも及ばない。  
現時点では、賢と愚はまだ分かれていないようであっても、  
後からくる人にはすでに明明白白となっているのであろう。  
未来へと思いを馳せると苦しみばかりが生じる。

## ■ 【01-2-031】 万山

【解題】襄陽<sup>じょうよう</sup>の町の西十一里<sup>ほんざん</sup>に万山という山があり、なぜか蘇軾は行かなかったの  
で、弟から山の様子を聞いて、この詩を作った。

## 【訳文】

西に行き、いくつかの山を越える。

北に出て、下に漢水<sup>かんすい</sup>を望む。

漢水はここでは蹙<sup>ちぢま</sup>って潭<sup>ふち</sup>になっていて、

山の裾を巡り回ってゆく。

永く壊れたままの禅寺があり、

古い敷き瓦だけがつやつや光っている。

下に王粲<sup>おうさん</sup> [後漢末の文人] が住んでいた名残の井戸<sup>ごかん</sup>があり、

深く食い込んだ井戸繩を指で触れることができる。

頭<sup>こうべ</sup>を回らせて西北を望むと、

亀の背中のようなこんもりとした山があり、

無数の桑が美しく繁っている。

そこが隆中<sup>りゅうちゆう</sup>であるという。

すなわち、世に出る前の諸葛孔明<sup>しょかつこうめい</sup>が寓居していたところである。

山の際から明るい月が出ると、

川洲が長く延びるありさまが山の上からも見え、

平らな沙のかたわらを、

耳飾りを抱くようにして緑の水が流れてゆく。

これほどまでに美しい山や川が近くにありながら、  
そこに到らないのは怠け者だと取じなければならない。  
弟に尋ね、地面にあれこれ描く面倒をかけたものの、  
結局、十分にはわからないのだった。

## ■ 【01-2-032】 隆中

【解題】 上の詩に詠まれていた隆中<sup>りゅうちゆう</sup>を訪ね、この詩を詠んだ。隆中には、諸葛孔明<sup>しょかつこうめい</sup>の旧宅<sup>りゅうび</sup>があった。劉備<sup>りゅうび</sup>がいわゆる「三顧<sup>さんこ</sup>の礼<sup>れい</sup>」で諸葛孔明を軍師として迎えたところである。

### 【訳文】

諸葛孔明<sup>しょかつこうめい</sup>が西の蜀<sup>しよく</sup>にきて以来、  
諸葛孔明への蜀人の愛は千年変わることがない。  
今朝、諸葛孔明の故郷にきて、  
蜀を故郷とする私は悲しみに耐えられない。  
この山がちの何の変哲もない土地から、  
天子の軍団を指揮する人が出ようとは、  
当時の人々は思いもしなかつただろう。  
世に出る前の諸葛孔明<sup>が りゅう</sup>を臥竜と呼んだ人がいた。  
竜がわたかまっていたときには、  
ここの山水も秀でて見えたのだろうか。  
竜がここから去ってしまうと、  
棲んでいた淵も消えてしまったのだろうか。

せめて竜が尻尾を引き摺った跡だけでも見たいとの願いは、  
おなしく叶わず、はらりと涙を落したのである。

### ■ 【01-2-033】 竹葉酒

【**解題**】<sup>じょうよう</sup>襄陽には「<sup>ちくようしゅん</sup>竹葉春」という名の美酒があった。

#### 【訳文】

古くから<sup>そ</sup>楚の人は<sup>かんすい</sup>漢水を汲んで、  
<sup>ぎじょう</sup>宜城の町[<sup>じょうよう</sup>襄陽の南九十五里にある]で酒を<sup>かも</sup>醸してきた。  
春風が吹くと酒が熟し、  
漢水に似て清らかな酒になる。  
その酒を造った人々はもはやいなくなり、  
その墓も平らになってしまったであろうが、  
<sup>ちくようしゅ</sup>竹葉酒の名は残り、  
千古の情を留めているのである。

### ■ 【01-2-034】 鯿魚

【**解題**】<sup>じょうよう</sup>襄陽の名物に「<sup>へんぎよ</sup>鯿魚」という魚がある。「<sup>しゅんみんあかつき</sup>春眠<sup>おぼ</sup>暁を覚えず」の詩で知られる<sup>とうだい</sup>唐代の<sup>もうこうねん</sup>孟浩然是襄陽の人で、鯿魚を詠んだ詩があり、そのことから襄陽の鯿魚はよく知られていた。

#### 【訳文】

朝日が川の水を照らすとき、

水に遊ぶ魚は玉のように美しく見える。

へんぎょ うなじ  
鰻魚は項を縮めたような姿から「縮項鰻」とも呼ばれるのだが、

項を縮めないで餌を貪り食らうので、

つまるところは煮られてしまうのだ。

とほ  
杜甫は、遠く離れた地で孟浩然もうこうねんの死を聞くと、

襄陽の人はもはや孟浩然を想うこともなく、

漫然と鰻魚を釣っているのだらうと、

悲しみの詩を詠んだ。

私もまた鰻魚を前にして箸を置き、

孟浩然と杜甫に思いを馳せて涙をこぼすのである。

## ■ 【01-2-035】 食雉

【解題】「雉を食べる」という題の詩。

### 【訳文】

雄の雉は長い尾を曳いて悠然と歩き、

いきなり日に向かって斜めに飛び上がり、

空中でくずほぐれつの格闘をし、

彩り鮮やかな羽が散る花のように落ちる。

勝って勇んで高らかに鳴く雉も、

投げ網に捕まってはもう嘆いても無駄で、

二羽が百銭で売られ、

時季によってはまことに結構な味わいである。

鶏あひるやら鶯あひるやらと一緒にされて、

煮たり焼いたりされて、

蹴爪あひるだけがつまらなく残される。

雉はまぐりは冬になると海に入って蟹はまぐりに化し、

蟹はまぐりは気を吐いて海上に楼閣はまぐりを現わし[いわゆる蟹気楼のこと]、

その楼閣はまぐりで休もうとする鴉はまぐりは海に落ちてしまう。

そのようなこともできないままに雉はまぐりは食われてしまうのだ。

【補足】[終わりの部分は、雉はまぐりが蟹はまぐりに化すという不思議な伝承を踏まえている]

## ■ 【01-2-036】新渠詩

【解題】襄陽じょうようからは向きを北東に転じ、ほぼ直線コースで都を目指した。途中の唐州とうで、趙尚寛ちようしょうかん知事が数年前に改修した用水路しんきょ [新渠]を見て、蘇軾はこの詩を詠んだ。短い序文がある。

### 【訳文】

#### 序文

庚子こうし [嘉祐五年] 正月かゆう、私は唐州とうを過よぎった。知事の趙尚寛ちようしょうかんは近ごろ、三つの陂つづみを修復し、「召渠しやうきょ」を開き、遠くからも人を招き寄せて唐州に住まわせて農耕に従事させようとしている。私は旅人であるから、食べ物や什器しんきょを用意して、四方から来る者を知事とともに迎え入れることができない。それで、『新渠の詩』五章を作しんきょって、道行く人しんきょに告こころげ、知事の意を伝えることにした。

一

新渠しんきょの水は、舒舒ゆるゆると流れくる。

野に溢れ、あまねく四方にゆきわたる。

この水路は神業かみわざのようにしてできあがったので、

民はまだそれがあるの知らない

誰がこれを作ったのかというと、

この邦くにの趙知事ちようである。

## 二

新渠の左右に新たな農地がある。

後から後から水が来て、

自ら赴くかのようにそれぞれに注がれて行く。

雲のように稲穂が広がり、

山のように米が積まれるであろう。

かくて唐州とうの人は初めて米の味を満喫するのだ。

## 三

新渠の民になろうと、

遠く淮州わいからも潭州たんからも、

妻や母を連れて押し寄せる。

中には急いで走ってこるぶ者さえもいる。

陛下は趙知事に命じて、

新たな民を慰撫することを優先し、

朝廷の仕事に戻ることなく、

七年の間ここに留ませたのである。

## 四

知事は新たにきた民に言う。

「見よ、ここに広大な土地がある。

好きな場所をおのおの選び取るがよい。

自分で耕し、自分で得たものは自分で食べてよい。

いずれ土地は諸君らのものになる。

もといた村に帰ってこのことを吹聴し、

大勢の人々をここに連れくるがよい」

## 五

知事はこのようにも言う。

「唐州に家を築くのだ、

堂々とした頑丈な家を。

唐州の民として生きるなら、

十分に食べられるだろう。

唐州の民として死ぬなら、

子孫がたくさんのお供え物をして祀ってくれるだろう。

すべては天子の御命令による、

諸君らには何ら心配はない」

## ■ 【01-2-037】 双鳧観

【しょう解題】 しょう葉県にある道教の寺院、そうふくわん双鳧観を訪ねての詩。ここには漢の時代に県知事かんで

あったとされる王喬おうきょうが祀られていた。

### 【訳文】

王喬は仙人だったという。

たまには人の世でものぞいてみようと思立ったのか、

するにことかいて漢朝かんちょうの役人になり、

毎月きちんと都に上って皇帝に行政報告をすることまでもこなした。

皇帝は、王喬が馬に乗ってくる様子がないのを不審に思い、

王喬の現れる日に、ものかげからこっそり観察した。

すると、南方から二羽の鳧かりが宮殿に向かって空を飛んできたかと思うと、

たちまち王喬が宮殿に姿を現したのだった。

そこで、網を用意させ、

次に鳧が飛んできたときに、ぱっと広げさせた。

網には二つの靴がひっかかり、

それから王喬はしばらく姿を見せなくなった。

王喬がもしも本当に仙人であるのなら、

そんなどしを踏むはずがない。

人々にあっと言わせるための洒落だったのか。

そもそも、仙人がこの世にのこのこ出てきて、

役人になるというのがおかしい話だ。

われわれは現実の世の縛りのなかでしか生きられない。

こんなふうにおちよられたのではたまったものでない。

つまり、王喬の話はそもそもひどいいかさまで、

笑って聞き流せばよいだけなのだ。

## ■ 【01-2-038】 潁大夫廟

【解題】 この詩には、蘇軾自身の注で、「潁大夫とは潁孝叔で、その廟が汝州の潁橋鎮にある」と記されている。潁孝叔は、『春秋左氏伝』に記載がある人物で、鄭の莊公が母と仲たがいしてもう二度と会わないと誓ったときに、莊公の心を巧みに和らげて母子の再会を実現させた。

### 【訳文】

人の情を無理やり変えるのは難しい。

できるのは、人の本性にわずかに感じさせることだけだ。

世の人はとかく是非を争い、苦言を並べ立て、

何としてでも揺り動かそうとする。

潁大夫の言葉はまことに柔和で、

感情を高ぶらせていた莊公も、

心を痛めて自から考えを改めたのだった。

潁大夫の墓の脇の祠はいまは荒れてしまい、

莊公が母と再会を果たしたという隧道も名残の穴があるだけになっている。

潁大夫から千年の後に茅焦が出て、

始皇帝と母との関係を修復したのではあるが、

裸になって井戸に飛び込むさまを見せつつ始皇帝を諫めたのであって、

微言ということを知らず、

いたずらに勇敢だったただけなのだ。

【**解説**】 [(1) この詩の冒頭で蘇軾は、「人情難強回、天性可微感」[人情は強いては回し難く、天性が微に感ず可きのみ]と歌っている。しかし、後の蘇軾はどちらかという、その句に続いて、「世人争曲直、苦語費搖撼」[世人は曲直を争い、苦語して揺り撼すに費す]と歌っている方に近かったのかもしれない。(2) このあたりの数篇の詩には、都が近づくにつれて、蘇軾は官員としての己のあり方について思索を巡らせつつあったことが反映されているのだろう]

## ■ 【01-2-039】 昆陽城賦

【**解説**】 葉県の北に昆陽の故城があり、千年余り昔の更始元年 [23年] にそこで有名な合戦があった。当時、漢朝から皇位を奪った王莽に対して反旗を翻す者が続々と各地で立ち上がり、劉秀 [後の光武帝] もその一人として、昆陽城を奪い取る戦いに加わっていた。昆陽城が陥落したと聞いた王莽は、反乱の連鎖を食い止める重大な局面であると判断し、百万と号する大軍を昆陽城に送った。反乱軍の將軍連中は恐れをなし、会戦を避けて昆陽城に籠り、さらには軍団を解散してそれぞれの土地に帰ってしまおうと考えた。劉秀は独り戦うべきだと主張し、八千ばかりの兵を率いて昆陽城を出て大軍に挑み、圧倒的な大勝利を得た。蘇軾はその古戦場に立ってこの賦を作った。

### 【訳文】

遙か遠くまで淡くかすむ平野の先、  
たちまち一つの塊のような古の城が現れる。  
風が沙を蒼く吹き上げて走るなか、  
かのときの樓櫓はどこにあったのだろうか。

城の門はいまも四方に向かって開かれ、  
道は昔から変わらずに通じている。  
野にいるあの農夫、  
背中を丸めて菜の手入れをしているあの者は、  
果たして知っているのだろうか、  
かの昆陽こんようの戦いを。  
一瞬にして百万の敵を壊滅させて、  
千年に一度の快挙をなしたかの戦いを。  
想うに、(王莽おうもうが出した)王尋おうじん、王邑おういの軍団は、  
雲を駆り、海を擁する勢いの大軍勢だった。  
猛士が無数の戦車を走らせ、  
虎や豹までも入り混じって大地を踏み潰すばかりであった。  
天下を挙げての一戦で、再びの戦いはもうなかった。  
迎える諸将は降伏を願っても許されず、  
顔色を変え、(王莽に逆らって反乱を起こしたことを)悔いたのだが、  
(劉秀りゅうしゅうは)千騎を率いて独り城を出た。  
劉秀が敵前に現れ、鋒を最初に交える前には、  
王尋、王邑は大いに笑って眺めていた。  
しかし、たちまち陣太鼓も武器も棄てて走り去ることになり、  
大混乱のなかで倒れ死んだ者は、果たして何人いたのか、  
そこに雑兵もいれば高位の者も混じていた。  
王莽は狂ったように天子の名を盗み取ったのだが、  
踵を巡らすようにたちまち敗れた。

(王莽が)町の無頼漢の全てを寄せ集めたところで、  
豪傑は得られるものではなく、  
(王莽に)媚びて瑞祥を献じる者が群れをなして集まろうとも、  
たちどころに死に就くのは何ら怪しむに足りないのだった。  
ただ残念だったのは<sup>げんゆう</sup>嚴尤で、  
劉秀を侮ってはならないと見抜くだけの才能がありながらも、  
敗戦を免れることができなかった。  
嚴尤として必ず負けるとは思っていなかったので、  
独り身を保つために逃げ惑わなければならなかった。  
古い城を過って古戦場を弔い、  
この賦を作って、士が<sup>ひと</sup>永く<sup>こころ</sup>慨嘆する志を増そうとするものである。

【補足】 [この賦を書いた蘇軾の真筆が現存するようである]

## ■ 【01-2-040】 許州西湖

【解題】 <sup>きよ</sup>許州で、<sup>とう</sup>先の<sup>しんきよ</sup>唐州の新渠とは対照的な事業の痕を見てこの詩を詠んだ。

### 【解題】

春の雨が軽やかに降り注がれて、  
からりと晴れ上がると、  
<sup>きよ</sup>許州の<sup>せいこ</sup>西湖はこのほか美しさに映える。  
さざ波を立ててここに流れこんでくる水は、  
古い城郭の角で、  
昨夜、その響きを耳にしていたものだ。

かつてこの地の知事は春の遊びの場を作ろうと、  
 千人の男の腕を使って沼地をさらった。  
 民衆が土を掘り出して担いで運んだありさまは、  
 蟻の大群がうごめくかのようにであったという。  
 いま、桃の花が咲こうかという時分になっても、  
 寒さが残っているのが恨めしく思われるのだが、  
 いくつかの梅の花がまだ落ちずに品のよい姿を保っている。  
 いずれ春の野遊びをする人々がここに集まり、  
 酔って杯を持ったまま道に伏せ、  
 助け起こしてもまた倒れるというようなことになるのだろう。  
 湖のほとりに建つ楼閣は立派で美しく、  
 沼を穿って池を作った知事は、  
 その楼閣で民衆とともに春の風光を愛でたという。  
 町のお歴々は知事とともに喜んだであろうが、  
 労働に駆り出された農民の痛みは知らずにいたのだろうか。  
 このあたりでは七年もの間、十分な稔りがなく、  
 村は長く寂しげであったという。  
 遠く旅してきた私は、  
 湖の岸に立ってしばし思いをふけるのだった。

【補足】〔(1) 許州きよの西湖せいこの風光を賛美する詩かと思って読んでゆくと、実はそれを作った知事を痛烈に批判する詩なのである。(2) 許州では范仲淹はんちゆうえんの次男の范純仁ばんじゆんじんに会っていて [→作品番号 01-2-003]、地方行政官としての心得などについて教わったのかもしれない〕

## ■ 【01-2-041】 阮籍嘯台

【解題】 都の南九十里の尉氏うつしという町に、阮籍げんせきが琴を弾きつつ嘯うそぶいていたという嘯台しやうたいがあった。阮籍は晋の時代のいわゆる「竹林の七賢人」の一人で、頭脳明晰で世を改めたいとの志もあったが、当時は文化を担う士しにとって苦難の時代で、ものを言う士はほぼ生命を全うすることができなかった。阮籍はひたすら酒を飲んで世間の目を晦まし、真情は象徴的な詩に託し、かろうじて自我を保って生き抜いたのだった。

### 【訳文】

阮籍げんせきは達人にして狂人だった。  
世を逃れ、言葉を発しなかった。  
高い志は万物の上に出て、  
世俗の論に関わらなかった。  
胸の内に意気が充満すると、  
独り高台に登り、  
身もだえし、  
息とともにそれを吐き出した。  
阮籍の激越な思いは、  
大地を揺り動かさんばかりであった。  
酔っては昏々と眠り、醒めては嘯うそぶいた。  
乱世に生きながら己を貫いたことにおいて、  
阮籍に比べられる者がほかに誰かいただろうか。

【補足】 [(1) 冒頭の「阮生古狂達」[阮生は古いにしへの狂達きやうたつ] の句は、阮籍の本質をみご

とに言い表している。「狂」も「達」もその意味は深い。(2) 己の考えをはっきりと主張してそれに従って堂々と行動した范仲淹はんちゆうえんは宋代そうだいの士大夫しだいふの手本であったが、それとは全く対照的な阮籍も蘇軾は己を導く偉大な先人であると考えていたようである]

## ■【01-2-042】朱亥墓

【**解題**】尉氏うつしには戦国時代しゅがいの朱亥しゅがいのだとされる墓とがあり、そこは俗に「屠兒原」と呼ばれていた。朱亥は賢者しゅがいであったが、世間から隠れて家畜を解体する仕事をしていいた。趙国ちようが秦国しんの大軍に攻め込まれたとき、信陵君しんりようくんは趙国を救おうとして朱亥に全てを託した。朱亥はひとりで晋鄙しんびという將軍に会いに行った。晋鄙は大軍を擁しながら、秦国と趙国の争いの行く末を見守って動かずにいた。朱亥は晋鄙の前に通されると、いきなり撃って殺し、大軍を奪って指揮し、秦国軍を退けたのだった。

### 【訳文】

昔々の朱亥の雄豪ぶりは誰も及ぶ者がいない。

いまその故国に来てみると、

大きな塚は「屠兒原」と称され、朱亥の名はない。

朱亥は普段から公卿も大臣も軽んじ、

千金の宝も棄てて見向きもなかった。

このあたりの人はややこしい議論を好まないで、

昔から伝わるままに「屠兒」としているだけなのだろう。

『春秋』を編んだ孔子は、

朱亥と似たようなことをして人を殺した齊豹せいひょうは不義を為したとして、

ただ「盗」とのみ記して、その名を史書に残さなかった。

朱亥は己の名を伝えない世俗の人を恨んではならないだろう。

朱亥は幸いにも孔子には遭わなかったので、

司馬遷しばせんがその名を史書に書き記してくれたのだから。

【補足】孔子は『春秋』を編んだときに、大義を明らかにするために一文字もゆるがせにしなかったとされる。暗殺は不義であるから、それを為した者の姓名は後世に伝える価値はないとして、「盗とう」とのみ書いたのだった。一方で、『史記』を編んだ司馬遷しばせんは任侠の者を好む傾向しゆがいが強く、朱亥の事績を詳しく書き記した。蘇軾は、『春秋』の一文字ずつに孔子が籠めた深い意味を読み解く論文を服喪中に多数書いていて、それは儒者としての表の顔であるのだが、内心は司馬遷と似たところがある。この詩にはその両面が写し出されているようである]

■ 【01-2-043】 大雪独留尉氏有客入駅呼与飲至醉詰旦客南去竟不知其誰

【解題】何かの事情があったのだろう、蘇軾うっしが尉氏の町に一人で留まっていると、大雪になり、ある旅人と出会った。

【訳文】

どこもかしこも雪がいっぱい積もり出し、

古びた宿場はひっそりとして人影がない。

そこに北から一人の旅人がやってきた。

降り続く雪のために、払っても払っても追いつかないのだろう、

笠にうず高く雪を載せて、その人はやってきた。

馬から降りて、宿へと入ってきたその顔を見ると、

寒さのせいでこわばり、青を通りこして黒いくらいである。

私は旅人を招き寄せ、  
宿の者に言い付けて、  
温めた酒をすくりに持ってこさせた。  
旅人は酒を手にしたものの、  
体が凍えすぎてしまったのだろう、  
飲み下すこともなかなかかなわないようである。  
どこの誰であると互いに言い出すこともないままに、  
二人で酒を酌み交わし始めた。  
私は杯に軽く注いでちびちびやるのだが、  
旅人は体が温まってくるとともに調子が出てきたのだろう、  
いつしか樽をさかさまにして呑み尽すまでになった。  
大雪のために宿は昼間のうちから門を閉ざし、  
二人は大いに語り合って、  
夜が更けるのも知らずにいた。  
翌朝、びしりと馬に鞭を当てると、  
旅人はたちまち走り去った。  
とうとう最後まで二人は名乗り合うことがなかった。

【訳文】[時は2月の初めで、昔の暦では春の半ばである。その時期に果たしてこのような大雪が降ったのだろうか。季節が食い違うので、この詩は都への旅ではなくて別のときに詠んだものであるとする説もあるが、訳者は蘇軾が幻想に託して思いを詠んだ詩であると解したい。都までもうわずかで、都に着けばそれからは官員としての人生が始まる。もしもそれとは異なる人生を選べるとしたら、いまが最後のチャンスなのかもしれないと、もう一人の自分を旅人に投影して詠んだのではないだろうか。

父の蘇洵<sup>そじゆん</sup>は長く放浪の旅を続け、それによって強靱な人格が形作られた。蘇軾も父のような放浪の旅に憧れていたのかもしれない。故郷を発って数カ月の旅がいよいよ終わってしまうときに、何かしら焦燥感のようなものに駆られてこの詩を詠んだということもありうるだろう。なお、蘇軾にはもう一つの人生を空想するような詩が時折あり、すでに作品番号 01-1-012 でその一例を見ている]

## ■ 【01-2-044】 与楊濟甫

【**解説**】 嘉祐<sup>かゆう</sup>5年 [1060年] 2月中旬に蘇軾<sup>そく</sup>は宋<sup>そう</sup>の都、東京開封府<sup>とうけいかいほうふ</sup> [汴京<sup>べんけい</sup>] に到着した。これはそれから1カ月ほど後に故郷<sup>ようせいほ</sup>の楊濟甫に送った手紙。楊濟甫の詳しいことはわからないが、蘇軾とは少年時代からの友で、その交情は最晩年まで続き、楊濟甫に宛てた10通の手紙が残っている。そのような純然たる私信も蘇軾が書いたものなら珍重されて後世に伝えられ、蘇軾の多様な側面を知る大切な資料となっている。ただし、手紙は独特の文体で書かれ、訳者にはそれを読みこなすだけの能力がないので、理解可能な箇所だけを選んで、大意が通じる程度にごまかして訳すことしかできない。

### 【訳文】

お別れてからたちまち半年となるなかで、遠く離れるにつれて、貴君を思うことがますます強くなります。このごろの日々はいかがお過ごしでしょうか。皆さま御健勝のことと存じます。家を離れて<sup>けい</sup>荊州に至る間に何度かお手紙を差し上げましたが届いていますでしょうか。

先月の半ばに、一行は恙なく都に到着しましたところに、十二月に書いてくださったお手紙が届き、はなはだ心が慰められました。いまは、西岡<sup>せいこう</sup>にある小さな家を借りて住んでいます。これからどのようになってしまうのかまったくわかりません。春のよい季節でありながらも、お会いできるわけではありま

せん。くれぐれも御自重されますように。

## 第1章 原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

### ■ 【01-1-001】 郭綸

河西猛士無人識、日暮津亭閱過船。  
路人但覺驄馬瘦、不知鉄槊大如椽。  
因言西方久不戰、截髮願作万騎先。  
我当憑軾与寓目、看君飛矢射蛮貊。

### ■ 【01-1-002】 初發嘉州

朝發鼓闐闐、西風獵画旃。  
故鄉飄已遠、往意浩無邊。  
錦水細不見、蛮江清可憐。  
奔騰過仏脚、曠蕩造平川。  
野市有禪客、釣台尋暮烟。  
相期定先到、久立水潺潺。

### ■ 【01-1-003】 憊為王氏書樓

樹影幽翠滿山谷、樓觀突兀起江浜。  
云是昔人藏書處、磊落万卷今生塵。  
江辺日出紅霧散、綺窓画閣青氛氲。  
山猿悲嘯谷泉響、野鳥嚶戛巖花春。  
借問主人今何在、被甲遠戍長苦辛。

先登搏戰事斬級、区区何者為三墳。  
書生古亦有戰陣、葛巾羽扇揮三軍。  
古人不見悲世俗、回首蒼山空白雲。

■ 【01-1-004】 過宜賓見夷中乱山

江寒晴不知、遠見山上日。  
朦朧含高峰、晃蕩射峭壁。  
橫雲忽飄散、翠樹紛歷歷。  
行人挹孤光、飛鳥投遠碧。  
蛮荒誰復愛、穠秀安可適。  
豈無避世士、高隱鍊精魄。  
誰能從之游、路有豺虎迹。

■ 【01-1-005】 夜泊牛口

日落江霧生、繫舟宿牛口。  
居民偶相聚、三四依古柳。  
負薪出深谷、見客喜且售。  
煮蔬為夜餐、安識肉与酒。  
朔風吹茅屋、破壁見星斗。  
兒女自唧噥、亦足樂且久。  
人生本無事、苦為世味誘。  
富貴耀吾前、貧賤独難守。  
誰知深山子、甘与麋鹿友。

置身落蛮荒、生意不自陋。  
今予独何者、汲汲強奔走。

■ 【01-1-006】 牛口見月

掩窓寂已睡、月脚垂孤光。  
披衣起周覽、飛露灑我裳。  
山川同一色、浩若涉大荒。  
幽懷耿不寢、四顧独彷徨。  
忽憶丙申年、京邑大雨霧。  
蔡河中夜決、橫浸国南方。  
車馬無復見、紛紛操楫郎。  
新秋忽已晴、九陌尚汪洋。  
竜津觀夜市、燈火亦煌煌。  
新月皎如昼、疎星弄寒芒。  
不知京国喧、是謂江湖鄉。  
今來牛口渚、見月重淒涼。  
卻思旧遊處、滿陌沙塵黃。

■ 【01-1-007】 戎州

乱山圍古郡、市易帶群蛮。  
瘦嶺春耕少、孤城夜漏閑。  
往時邊有警、征馬去無還。  
自頃方從化、年來亦款關。

頗能貪漢布、但未脱金環。

何足争強弱、吾民尽玉顏。

■ 【01-1-008】 舟中聽大人彈琴

彈琴江浦夜漏永、歛衽竊聽独激昂。

風松瀑布已清絕、更愛玉佩声琅璫。

自從鄭衛乱雅樂、古器殘欠世已忘。

千年寥落独琴在、有如老仙不死閱興亡。

世人不容独反古、強以新曲求鏗鏘。

微音淡弄忽变轉、数声浮脆如笙簧。

無情枯木今尚爾、何況古意墮渺茫。

江空月出人響絕、夜闌更請彈文王。

■ 【01-1-009】 泊南牛口期任遵聖長官到晚不及見復來

江上有微徑、深榛烟雨埋。

崎嶇欲取別、不見又重来。

下馬未及語、固已慰長懷。

江湖涉浩渺、安得与之偕。

■ 【01-1-010】 過安樂山聞山上木葉有文如道士篆符云此山乃張道陵所寓二首

其一

天師化去知何在、玉印相伝世共珍。

故国子孫今尚死、滿山秋葉豈能神。

其二

真人已不死、外慕墮空虛。

猶余好名意、滿樹写天書。

■ 【01-1-011】 渝州寄王道矩

曾聞五月到渝州、水拍長亭砌下流。

惟有夢魂長繚繞、共論唐史更綢繆。

舟經故国歲時改、霜落寒江波浪收。

歸夢不成冬夜永、厭聞船上報更籌。

■ 【01-1-012】 江上看山

船上看山如走馬、倏忽過去數百群。

前山槎牙忽變態、後嶺雜沓如驚奔。

仰看微徑斜繚繞、上有行人高縹緲。

舟中舉手欲與言、孤帆南去如飛鳥。

■ 【01-1-013】 涪州得山胡

終日鎖筠籠、回頭惜翠茸。

誰知聲嘒嘒、亦自意重重。

夜宿煙生浦、朝鳴日上峰。

故巢何足戀、鷹隼豈能容。

■ 【01-1-014】 留題仙都觀

山前江水流浩浩、山上蒼蒼松柏老。  
舟中行客去紛紛、古今換易如秋草。  
空山樓觀何崢嶸、真人王遠陰長生。  
飛符御氣朝百靈、悟道不復誦黃庭。  
竜車虎駕來下迎、去如旋風搏紫清。  
真人厭世不回顧、世間生死如朝暮。  
學仙度世豈無人、餐霞絕粒長辛苦。  
安得獨從逍遙君、冷然乘風駕浮雲、超世無有我獨存。

■ 【01-1-015】 仙都山鹿

日月何促促、塵世苦局束。  
仙子去無蹤、故山遺白鹿。  
仙人已去鹿無家、孤棲悵望層城霞。  
至今聞有遊洞客、夜來江市叫平沙。  
長松千樹風蕭瑟、仙宮去人無咫尺。  
夜鳴白鹿安在哉、滿山秋草無行跡。

■ 【01-1-016】 屈原塔

楚人悲屈原、千歲意未歇。  
精魂飄何處、父老空哽咽。  
至今滄江上、投飯救饑渴。  
遺風成競渡、哀叫楚山裂。  
屈原古壯士、就死意甚烈。

世俗安得知、眷眷不忍決。  
南賓旧独楚、山上有遺塔。  
忘是奉仙人、恐子就淪滅。  
此事雖無憑、此意固已切。  
古人誰不死、何必較考折。  
名声實無窮、富貴亦暫熱。  
大夫知此理、所以持死節。

■ 【01-1-017】 望夫台

山頭孤石遠亭亭、江轉船回石似屏。  
可憐千古長如昨、船去船来自不停。  
浩浩長江赴滄海、紛紛過客似浮萍。  
誰能坐待山月出、照見寒影高伶俜。

■ 【01-1-018】 巖顏碑

先主反劉璋、兵意頗不義。  
孔明古豪傑、何乃為此事。  
劉璋固庸主、誰為死不二。  
巖子独何賢、談笑傲礎几。  
国亡君已執、嗟子死誰為。  
何人刻山石、使我空涕淚。  
吁嗟斷頭將、千古為病悻。

■ 【01-1-019】 過木樨觀

石壁高千尺、微蹤遠欲無。  
飛簷如劍寺、古柏似仙都。  
許子嘗高遁、行舟悔不迂。  
斬蛟聞猛烈、提劍想崎嶇。  
寂寞棺猶在、修崇世已愚。  
隱居人不識、化去俗爭吁。  
洞府煙霞遠、人間爪髮枯。  
飄飄乘倒景、誰復顧遺軀。

■ 【01-1-020】 八陣磧

平沙何茫茫、髣髴見石藴。  
縱橫滿江上、歲歲沙水齧。  
孔明死已久、誰復弁行列。  
神兵非学到、自古不留訣。  
至人已心悟、後世徒妄說。  
自從漢道衰、蜂起盡姦傑。  
英雄不相下、禍難久連結。  
驅民市無烟、戰野江流血。  
万人賭一擲、殺盡如沃雪。  
不為久遠計、草草常無法。  
孔明最後起、意欲掃群孽。  
崎嶇事節制、隱忍久不決。

志大遂成迂、歲月去如瞥。  
六師紛未整、一旦英氣折。  
唯余八陣圖、千古壯夔峽。

■ 【01-1-021】 諸葛塩井

五行水本醜、安沢江与井。  
如何不相入、此意復誰省。  
人心固難足、物理偶相逞。  
猶嫌取未多、井上無閑綆。

■ 【01-1-022】 白帝廟

朔風催入峽、慘慘去何之。  
共指蒼山路、來朝白帝祠。  
荒城秋草滿、古樹野藤垂。  
浩蕩荆江遠、淒涼蜀客悲。  
遲回問風俗、涕泗憫興衰。  
故国依然在、遺民豈復知。  
一方稱警蹕、万乘擁旌旗。  
遠略初吞漢、雄心豈在夔。  
崎嶇來野廟、閑默愧當時。  
破甑蒸山麥、長歌唱竹枝。  
荆邯真壯士、吳柱本經師。  
失計雖無及、凶王固已奇。

猶余帝王号、皎皎在門楣。

## ■ 【01-1-023】 灩澦堆賦

序

世以瞿唐峡口灩澦堆為天下之至險、凡覆舟者、皆歸咎於此石。以余觀之、蓋有功於斯人者。夫蜀江会百水而至於夔、彌漫浩汗、橫放於大野、而峡之大小、曾不及其十一。苟先無以齟齬於其間、則江之遠遠、奔騰迅快、盡銳於瞿塘之口、則其險悍可畏、當不啻於今耳。因為之賦、以待好事者試觀而思之。

賦

天下之至信者、唯水而已。

江河之大与海之深、而可以意揣、唯其不自為形、而因物以賦形、是故千变万化、而有必然之理。

掀騰勃怒、万夫不敢前兮、宛然聽命、惟聖人之所使。

予泊舟乎瞿唐之口、而觀乎灩澦之崔嵬、然後知其所以開峡而不去者、固有以也。

蜀江遠來兮、浩漫漫之平沙。

行千里而未嘗齟齬兮、其意驕逞而不可摧。

忽峡口之逼窄兮、納万頃於一杯。

方其未知有峡也、而戰乎灩澦之下、喧豕震掉、尽力以与石鬥、勃乎若万騎之西來。

忽孤城之當道、鉤援臨冲、畢至於其下兮、城堅而不可取。

矢盡劍折兮、迤邐循城而東去。

於是滔滔汨汨、相与入峡、安行而不敢怒。

嗟夫、物固有以安而生變兮、亦有以用危而求安。

得吾說而推之兮、亦足以知物理之固然。

■ 【01-1-024】 入峽

自昔懷幽賞、今茲得縱探。  
長江連楚蜀、万派瀉東南。  
合水來如電、黔波綠似藍。  
余流細不數、遠勢競相參。  
入峽初無路、連山忽似龕。  
縈紆收浩渺、蹙縮作淵潭。  
風過如呼吸、雲生似吐含。  
墜崖鳴窸窣、垂蔓綠毵毵。  
冷翠多崖竹、孤生有石楠。  
飛泉飄亂雪、怪石走驚驂。  
絕澗知深淺、樵童忽兩三。  
人煙偶逢郭、沙岸可乘籃。  
野戍荒州鼎、邦君古子男。  
放衙鳴晚鼓、留客薦霜柑。  
聞道黃精草、叢生綠玉簪。  
尽忘充食飲、不見有彭聃。  
氣候冬猶暖、星河夜半涵。  
遺民悲昶衍、旧俗接魚蠶。  
版屋漫無瓦、巖居窄似庵。  
伐薪常冒嶮、得米不盈甌。  
嘆息生何陋、劬勞不自慚。

葉舟輕遠泝、大浪固嘗諳。  
矍鑠空相視、嘔啞莫与談。  
蛮荒安可駐、幽邃信難尃。  
独愛孤棲鶻、高超百尺嵐。  
橫飛忘自得、遠颺似無貪。  
振翮遊霄漢、無心顧雀鷁。  
塵勞世方病、局促我何堪。  
尽解林泉好、多為富貴酣。  
試看飛鳥樂、高遁此心甘。

■ 【01-1-025】 巫山

瞿塘迤邐尽、巫峡崢嶸起。  
連峰稍可怪、石色變蒼翠。  
天工運神巧、漸欲作奇偉。  
塊軋勢方深、結構意未遂。  
旁觀不暇瞬、步步造幽邃。  
蒼崖忽相逼、絕壁凜可悸。  
仰觀八九頂、俊爽凌顛氣。  
晃蕩天宇高、崩騰江水沸。  
孤超兀不讓、直拔勇無畏。  
攀緣見神宇、憇坐就石位。  
巉巖隔江波、一一問廟吏。  
遙觀神女石、綽約誠有以。

俯首見斜鬢、拖霞弄脩帔。  
人心隨物變、遠覺含深意。  
野老笑吾旁、少年嘗屢至。  
去隨猿猱上、反以繩索試。  
石筍倚孤峰、突兀殊不類。  
世人喜神怪、論說驚幼穉。  
楚賦亦虛傳、神女安有是。  
次問掃壇竹、云此今尚爾。  
翠葉紛下垂、婆娑綠鳳尾。  
風來自偃仰、若為神物使。  
絕頂有三碑、詰曲古篆字。  
老人那解讀、偶見不能記。  
窮探到峰背、採斫黃楊子。  
黃楊生石上、堅瘦紋如綺。  
貪心去不顧、澗谷千尋縷。  
山高虎狼絕、深入坦無忌。  
洪濛草樹密、葱蒨雲霞膩。  
石竇有洪泉、甘滑如流髓。  
終朝自盥漱、冷冽清心胃。  
浣衣掛樹梢、磨斧就石鼻。  
徘徊雲日晚、歸意念城市。  
不到今十年、衰老筋力憊。  
當時伐殘木、牙蘗已如臂。

忽聞老人説、終日為嘆喟。

神仙固有之、難在忘勢利。

貧賤爾何愛、棄去如脱履。

嗟爾苦無還、絶糧応不死

■ 【01-1-026】 巫山廟上下数十里、有烏鳶無數、取食於行舟之上、舟人神之、故亦不敢害

群飛來去噪行人、得食無憂便可馴。

江上飢烏無足怪、野鷹何事亦頻頻。

■ 【01-1-027】 過巴東県不泊、聞頗有萊公遺跡

萊公昔未遇、寂寞在巴東。

聞道山中樹、猶余手種松。

江山養豪俊、礼数困英雄。

執版迎官長、趨塵拜下風。

当年誰刺史、応未識三公。

■ 【01-1-028】 屈原廟賦

浮扁舟以適楚兮、過屈原之遺宮。

覽江上之重山兮、曰惟子之故郷。

伊昔放逐兮、渡江濤而南遷。

去家千里兮、生無所歸而死無以為墳。

悲夫、人固有一死兮、処死之為難。

徘徊江上欲去而未決兮、俯千仞之驚湍。

賦懷沙以自傷兮、嗟子獨何以為心。

忽終章之慘烈兮、逆將去此而沈吟。

吾豈不能高舉而遠遊兮、又豈不能退默而深居、獨嗷嗷其怨慕兮、恐君臣之愈疏。

生既不能力爭而強諫兮、死猶冀其感發而改行。

苟宗國之顛覆兮、吾亦獨何愛於久生。

托江神以告冤兮、馮夷教之以上訴。

歷九閩而見帝兮、悲傷而不能救。

懷瑾佩蘭而無所歸兮、獨瑩瑩乎中浦。

峽山高兮崔嵬、故居廢兮行人哀。

子孫散兮安在、況復見兮高台。

自子之逝今千載兮、世愈狹而難存。

賢者畏譏而改度兮、隨俗變化斫方以為圓。

黽勉於亂世而不能去兮、又或為之臣佐。

變丹青於玉瑩兮、彼乃謂子為非智。

惟高節之不可以企及兮、宜夫人之不吾與。

違國去俗死而不顧兮、豈不足以免於後世。

嗚呼、君子之道、豈必全兮。

全身遠害、亦或然兮。

嗟子區區、獨為其難兮。

雖不適中、要以為賢兮。

夫我何悲、子所安兮。

■ 【01-1-029】 昭君村

昭君本楚人、艷色照江水  
楚人不敢娶、謂是漢妃子。  
誰知去鄉国、万里為胡鬼。  
人言生女作門楣、昭君当時憂色衰。  
古來人事盡如此、反覆縱橫安可知。

■ 【01-1-030】 新灘

扁舟轉山曲、未至已先驚。  
白浪橫江起、槎牙似雪城。  
番蛮從高來、一一投澗坑。  
大魚不能上、暴鬣灘下橫。  
小魚散復合、灑灑如遭烹。  
鷓鴣不敢下、飛過兩翅輕。  
白鷺誇瘦捷、插脚還欹傾。  
区区舟上人、薄技安敢呈。  
只忘灘頭廟、賴此牛酒盈。

■ 【01-1-031】 新灘阻風

北風吹寒江、來自兩山口。  
初聞似搖扇、漸覺平沙走。  
飛雲滿巖谷、舞電穿窓牖。  
灘下三日留、識盡灘前叟。

孤舟倦鶻軋、短纜困牽揉。  
嘗聞不終朝、今此独何久。  
只应留遠人、此意固亦厚。  
吾今幸無事、閉戸為飲酒。

■ 【01-1-032】 黄牛廟

江邊石壁高無路、上有黄牛不服箱。  
廟前行客拜且舞、擊鼓吹簫屠白羊。  
山下耕牛苦磽确、兩角磨崖四蹄湿。  
青芻半束長苦饑、仰看黄牛安可及。

■ 【01-1-033】 蝦蟇培

蟄背似覆盂、蟄頤如偃月。  
謂是月中蟄、開口吐月液。  
根源來甚遠、百尺蒼崖裂。  
當時竜破山、此水随竜出。  
入江江水濁、猶作深碧色。  
稟受苦潔清、独与凡水隔。  
豈惟煮茶好、釀酒应無敵

■ 【01-1-034】 出峽

入峽喜巉巖、出峽愛平曠。  
吾心淡無累、遇境即安暢。

東西徑千里、勝處頗屢訪。  
 幽尋遠無厭、高絕每先上。  
 前詩尚遺略、不錄久恐忘。  
 憶從巫廟回、中路寒泉漲。  
 汲歸真可愛、翠碧光滿盎。  
 忽驚巫峽尾、巖腹有穿壙。  
 仰見天蒼蒼、石室開南向。  
 宣尼古廟宇、叢木作幃帳。  
 鉄楯橫半空、俯瞰不計丈。  
 古人誰架構、下有不測浪。  
 石竇見天困、瓦棺悲古葬。  
 新灘阻風雪、村落去携杖。  
 亦到鼃馬溪、茅屋沽村釀。  
 玉虛悔不至、實為舟人誑。  
 聞道石最奇、寤寐見怪狀。  
 峽山富奇偉、得一知幾喪。  
 苦恨不知名、歷歷但想像。  
 今朝脫重險、楚水渺平蕩。  
 魚多客庖足、風順行意王。  
 追思偶成篇、聊助舟人唱。

■ 【01-1-035】 遊三游洞

凍雨霏霏半成雪、

遊人屨凍蒼苔滑。

不辭携被巖底眠、

洞口雲深夜無月。

■【01-1-036】遊洞之日、有亭吏乞詩。既為留三絕句於洞之石壁。明日至峽州、吏又至、意若未足、乃復以此詩授之。

一徑繞山翠、縈紆去似蛇。

忽驚溪水急、爭看洞門呀。

滑磴攀秋蔓、飛橋踏古槎。

三扉迎北吹、一穴向西斜。

嘆息煙雲去、追思歲月遐。

唐人昔未到、古俗此為家。

洞暖無風雪、山深富鹿豝。

相逢衣盡草、環坐髻忘髭。

竈突依巖黑、尊壘就石窪。

洪荒無伝記、想像在羲媧。

此事今安有、遺蹤我独嗟。

山翁勸留句、強為写槎牙。

■【01-1-037】寄題清溪寺

口舌安足恃、韓非死說難。

自知不可用、鬼谷乃真姦。

遺書今未亡、小数不足觀。

秦儀固新学、見利不知患。  
嗟時無桓文、使彼二子顛。  
死敗無足怪、夫子固使然。  
君看巧更窮、不若愚自安。  
遺宮若有神、頷首然吾言。

■ 【01-1-038】 留題峽州甘泉寺

輕舟橫江來、弔古悲純孝。  
逶迤尋遠迹、婉孌見遺貌。  
清泉不可挹、涸盡空石窖。  
古人飄何之、唯有風竹鬧。  
行行翫村落、戶戶懸網罩。  
民風坦和平、開戶夜無鈔。  
叢林富笋茹、平野絕虎豹。  
嗟哉此樂鄉、無乃姜子教。

■ 【01-1-039】 夷陵縣歐陽永叔至喜堂

夷陵雖小邑、自古控荆吳。  
形勝今無用、英雄久已無。  
誰知有文伯、遠謫自王都。  
人去年年改、堂傾歲歲扶。  
追思猶咎呂、感嘆亦憐朱。  
〈(時朱太守為公築此堂。)>

旧種孤楠老、新霜一橘枯。  
清篇留峽洞、醉墨写邦囿。  
故老問行客、長官今白鬚。  
著書多念慮、許国減歡娛。  
寄語公知否、還須数倒壺。

■ 【01-1-040】 南行前集敘

■ 【01-1-041】 上王兵部書

■ 【01-2-001】 眉州遠景樓記

■ 【01-2-002】 衆妙堂記

■ 【01-2-003】 范文正公文集叙

■ 【01-2-004】 史經臣兄弟

■ 【01-2-005】 却鼠刀銘

野人有刀、不愛遺余。  
長不滿尺、劍鉞之余。  
文如連環、上下相繆。  
錯之則見、或漫如無。

昔所從得、戒以自隨。  
畜之無害、暴鼠是除。  
有穴於垣、侵堂及室。  
跳床撼幕、終夕窶窶。  
叱訶不去、啖嚙棗栗。  
掀杯舐缶、去不遺粒。  
不擇道路、仰行躡壁。  
家為兩門、窶則旁出。  
輕趨捷猾、忽不可執。  
吾刀入門、是去無跡。  
又有甚者、聚為怪妖。  
昼出群鬥、相視睚眦。  
舞於端門、与主雜居。  
猫見不噬、又乳於家。  
狃於永氏、謂世皆然。  
亟磨吾刀、盤水致前。  
炊未及熟、肅然無蹤。  
物豈有是、以為不誠。  
試之弥旬、凜然以驚。  
夫猫鷲禽、昼巡夜伺。  
拳腰弭耳、目不及顧。  
須搖乎穴、走赴如霧。  
碎首屠腸、終不能去。

是独何為、宛然尺刀。

匣而不用、無有爪牙。

彼孰為畏、相率以逃。

嗚呼嗟夫、吾苟有之。

不言而諭、是亦何勞。

■ 【01-2-006】 記里舍聯句

■ 【01-2-007】 天石硯銘

■ 【01-2-008】 子由幼達

■ 【01-2-009】 正統論

■ 【01-2-010】 書章惇詩

■ 【01-2-011】 謝秋賦試官啓

■ 【01-2-012】 刑賞忠厚之至論

■ 【01-2-013】 謝歐陽內翰書

■ 【01-2-014】 謝范舍人書

■ 【01-2-015】 上韓太尉書

■ 【01-2-016】 上梅直講書

■ 【01-2-017】 記先夫人不殘烏鴉

■ 【01-2-018】 記先夫人不發宿藏

■ 【01-2-019】 猪母仙

■ 【01-2-020】 池魚自達

■ 【01-2-021】 上知府王竜図書

■ 【01-2-022】 咏怪石

家有粗險石、植之疏竹軒。

人皆喜尋玩、吾独思棄捐。

以其無所用、曉夕空嶄然。

砧礎則甲斲、砥硯乃枯頑。

於繖不可滌、以碑不可鐫。

凡此六用無一取、令人爭免長物觀。

誰知茲石本靈怪、忽從夢中至吾前。

初来若奇鬼、肩股何孱顏。

漸聞●隆声、久乃弁其言。[●は石+宮]

云我石之精、憤子辱我欲一宣。

天地之生我、族類広且蕃。

子向所称用者六、星羅電布盈溪山。

傷殘破碎為世役、雖有小用烏足賢。

如我之徒亦甚寡、往往掛名經史間。

居海岱者充禹貢、雅与鉛松相差肩。

処魏榆者白昼語、意欲警懼驕君悛。

或在驪山拒強秦、万牛喘汗力莫牽。

或從揚州感廬老、代我問答多雄篇。

子今我得豈無益、震霆凜霜我不遷。

雕不加文磨不瑩、子盍節概如我堅。

以是贈子豈不偉、何必責我区区焉。

吾聞石言愧且謝、醜狀歛去不可攀。

駭然覺坐想其語、勉書此詩席之端。

## ■ 【01-2-023】 荊州十首

其一

游人出三峡、楚地尽平川。

北客隨南賈、吳檣間蜀船。

江侵平野断、風卷白沙旋。

欲問興亡意、重城自古堅。

其二

南方旧戦国、惨淡意猶存。  
慷慨因劉表、淒涼為屈原。  
廢城猶帶井、古姓聚成村。  
亦解觀形勝、昇平不敢論。

其三

楚地闊無辺、蒼茫万頃連。  
耕牛未嘗汗、投種去如捐。  
農事誰当勸、民愚亦可憐。  
平生事遊惰、那得怨凶年。

其四

朱檻城東角、高王此望沙。  
江山非一國、烽火畏三巴。  
戰骨淪秋草、危樓倚斷霞。  
百年豪傑盡、擾擾見魚蝦。

其五

沙頭煙漠漠、来往厭喧卑。  
野市分饗闌、官船過渡遲。  
遊人多問卜、僮叟盡携龜。

日暮江天静、無人唱楚辞。

其六

太守王夫子、山東老俊髦。  
壯年聞猛烈、白首見雄豪。  
食雁君忘厭、驅車我正勞。  
中書有安石、慎勿賦離騷。

其七

殘臘多風雪、荆人重歲時。  
客心何草草、裏巷自嬉嬉。  
爆竹驚鄰鬼、驅儼逐小兒。  
故人忘念我、相望各天涯。

其八

江水深成窟、潜魚大似犀。  
赤鱗如琥珀、老枕勝玻璃。  
上客拳雕俎、佳人搖翠篔。  
登庖更作器、何以免屠割。

其九

北雁來南國、依依似旅人。  
縱橫遭折翼、感側為沾巾。

平日誰能把挹、高飛不可馴。  
故人持贈我、三嗅若為珍。

其の十

柳門京国道、驅馬及春陽。  
野火烧枯草、東風動綠芒。  
北行運許鄧、南去極衡湘。  
楚境橫天下、懷王信弱王。

■ 【01-2-024】 渚宮

渚宮寂寞依古郢、楚地茫茫非故基。  
二王台閣已鹵莽、何況遠問縱橫時。  
楚王獵罷擊靈鼓、猛士操舟張水嬉。  
釣魚不復數魚鱉、大鼎千石烹蛟螭。  
當時郢人架宮殿、意思絕妙般与俚。  
飛樓百尺照湖水、上有燕趙千峨眉。  
臨風揚揚意自得、長使宋玉作楚詞。  
秦兵西來取鐘簾、故宮禾黍秋離離。  
千年壯觀不可復、今之存者蓋已卑。  
池空野迴樓閣小、惟有深竹藏狐狸。  
台中絳帳誰復見、台下野水浮清漪。  
綠窓朱戶春昼閉、想見深屋彈朱絃。  
腐儒亦解愛声色、何用白首談孔姬。

沙泉半涸草堂在、破窓無紙風颯颯。  
陳公蹤跡最未遠、七瑞寥落今何之。  
百年人事知幾變、直恐荒廢成空陂。  
誰能為我訪遺跡、草中宥有湘東碑。

■ 【01-2-025】 荆門惠泉

泉源從高來、走下隨石脈。  
紛紛白沫乱、隱隱蒼崖坼。  
縈回成曲沼、清澈見肝膈。  
衆瀉為長溪、奔駛蕩蛙蠃。  
初開不容椀、漸去已如帛。  
伝聞此山中、神物懶遭謫。  
不能致雷雨、灑灑吐寒碧。  
遂令山前人、千古灌稻麥。

■ 【01-2-026】 涇陽早發

富貴本無定、世人自榮枯。  
囂囂好名心、嗟我豈獨無。  
不能便退縮、但使進少徐。  
我行念西國、已分田園蕪。  
南來竟何事、碌碌隨商車。  
自進苟無補、乃是懶且愚。  
人生重意氣、出處夫豈徒。

永懷江陽叟、種藕春滿湖。

■ 【01-2-027】 夜行觀星

天高夜氣嚴、列宿森就位。  
大星光相射、小星鬧若沸。  
天人不相干、嗟彼本何事。  
世俗強指摘、一一立名字。  
南箕与北斗、乃是家人器。  
天亦豈有之、無乃遂自謂。  
迫觀知何如、遠想偶有以。  
茫茫不可曉、使我長歎喟。

■ 【01-2-028】 漢水

捨棹忽逾月、沙塵困遠行。  
襄陽逢漢水、偶似蜀江清。  
蜀江固浩蕩、中有蛟与鯨。  
漢水亦云広、欲涉安敢輕。  
文王化南国、遊女儼如卿。  
洲中浣沙子、環珮鏘鏘鳴。  
古風隨世變、寒水空泠泠。  
過之不敢慢、佇立整冠纓。

■ 【01-2-029】 襄陽古樂府

## 野鷹来

野鷹来、万山下、荒山無食鷹苦饑、飛來為爾繫彩糸。

北原有兔老且白、年年養子秋食菽。

我欲擊之不可得、年深兔老鷹力弱。

野鷹来、城東有台高崔巍。

台中公子著皮袖、東望万里心悠哉。

心悠哉、鷹何在。

嗟爾公子歸無勞、使鷹可呼亦凡曹、天陰月黑狐夜嘯。

## ■ 【01-2-030】 峴山

遠客來自南、游塵昏峴首。

過関無百步、曠蕩吞楚藪。

登高忽惆悵、千載意有偶。

所憂誰復知、嗟我生苦後。

团团山上檜、歲歲関榆柳。

大才固已殊、安得同永久。

可憐山前客、倏忽星過●。 [●は四の下に留]

賢愚未及分、来者当自剖。

## ■ 【01-2-031】 万山

西行度連山、北出臨漢水。

漢水蹙成潭、旋轉山之趾。

禪房久已壞、古甃含清泚。

下有仲宣欄、綆刻深容指。  
回頭望西北、隱隱龜背起。  
伝云古隆中、万樹桑柘美。  
月烟轉山曲、山上見洲尾。  
綠水帶平沙、盤盤如抱珥。  
山川近且秀、不到懶成恥。  
問之安能詳、画地費簪篸。

■ 【01-2-032】 隆中

諸葛來西國、千年愛未衰。  
今朝游故里、蜀客不勝悲。  
誰言襄陽野、生此万乘師。  
山中有遺貌、矯矯竜之姿。  
竜蟠山水秀、竜去淵潭移。  
空余蜿蜒迹、使我寒涕垂。

■ 【01-2-033】 竹葉酒

楚人汲漢水、釀酒古宜城。  
春風吹酒熟、猶似漢江清。  
耆舊何人在、丘墳已已平。  
惟余竹葉在、留此千古情。

■ 【01-2-034】 鱸魚

曉日照江水、遊魚似玉瓶。  
誰言解縮項、貪餌每遭烹。  
杜老当年意、臨流憶孟生。  
吾今又悲子、輟筋涕縱橫。

■ 【01-2-035】 食雉

雄雉曳修尾、驚飛向日斜。  
空中紛格鬪、彩羽落如花。  
喧呼勇不顧、投網誰復嗟。  
百錢得一雙、新味時所佳。  
烹煎雜雞鶩、爪距漫槎牙。  
誰知化為蜃、海上落飛鴉。

■ 【01-2-036】 新渠詩

叙

庚子正月、予過唐州。太守趙侯、始復三陂、疏召渠、招懷遠人、散耕於唐。予方為旅人、不得親執壺漿簞食、以與侯勸逆四方之來者、獨為新渠詩五章、以告於道路、致侯之意。其詞曰。

一

新渠之水、其來舒舒。  
溢流於野、至於通衢。  
渠成如神、民始不知。

問誰為之、邦君趙侯。

二

新渠之田、在渠左右。

渠來奕奕、如赴如湊。

如雲斯積、如屋斯溜。

嗟唐之人、始識杭稔。

三

新渠之民、自淮及潭。

挈其婦姑、或走而顛。

王命趙侯、宥我新民。

無与王事、以訖七年。

四

侯調新民、爾既來止。

其歸爾邑、告爾隣里。

良田千万、爾挾爾取。

爾耕爾食、遂為爾有。

五

築室於唐、孔碩且堅。

生為唐民、飽粥與饘。

死葬於唐、祭有雉豚。

天子有命、我惟爾安。

■ 【01-2-037】 雙鳧觀

王喬古仙子、時出觀人寰。

常為漢郎吏、厭世去無還。

雙鳧偶為戲、聊以驚世頑。

不然神仙迹、羅網安能攀。

紛紛塵埃中、銅印紆青綸。

安知無隱者、竊笑彼愚姦。

■ 【01-2-038】 穎大夫廟

人情難強回、天性可微感。

世人爭曲直、苦語費搖撼。

大夫言何柔、暴主意自慘。

荒祠旁孤塚、古隧有殘坎。

千年惟茅焦、世亦貴其膽。

不解此微言、脫衣徒勇敢。

■ 【01-2-039】 昆陽城賦

淡平野之靄靄、忽孤城之如塊。

風吹沙以蒼莽、悵樓櫓之安在。

橫門豁以四達、故道宛其未改。

彼野人之何知、方偃樓而畦菜。  
嗟夫、昆陽之戰、屠百万於斯須、曠千古而一快。  
想尋邑之來陣、兀若驅雲而擁海。  
猛士扶輪以蒙茸、虎豹雜沓而橫潰。  
罄天下於一戰、謂此舉之不再。  
方其乞降而未獲、固已變色而驚悔。  
忽千騎之獨出、犯初鋒於未艾。  
始憑軾而大笑、旋棄鼓而投械。  
紛紛籍籍死於溝壑者、不知其幾何人、或金章而玉佩。  
彼狂童之僭竊、蓋已旋踵而將敗。  
豈豪傑之能得、盡市井之無賴。  
貢符獻瑞一朝而成群兮、紛就死之何怪。  
獨悲傷於嚴生、懷長才而自浼。  
豈不知其必喪、獨徘徊其安待。  
過故城而一吊、增志士之永慨。

■ 【01-2-040】許州西湖

西湖小雨晴、灑灑春渠長。  
來從古城角、夜半轉新響。  
使君欲春游、浚沼役千掌。  
紛紜具畚鍤、鬧若蟻運壤。  
夭桃弄春色、生意寒猶快。  
唯有落殘梅、標格若矜爽。

游人全已集、挈榼三且兩。  
醉客臥道傍、扶起尚偃仰。  
池台信宏麗、貴與民同賞。  
但恐城市歎、不知田野愴。  
潁川七不登、野氣長蒼莽。  
誰知万里客、湖上独長想。

■ 【01-2-041】 阮籍嘯台

阮生古狂達、遁世默無言。  
猶余胸中氣、長嘯独軒軒。  
高情遺万物、不与世俗論。  
登臨偶自写、激越蕩乾坤。  
醒為嘯所發、飲為醉所昏。  
誰能与之較、乱世足自存。

■ 【01-2-042】 朱亥墓

(俗謂屠兒原)

昔日朱公子、雄豪不可追。  
今來遊故国、大冢屈称兒。  
平日輕公相、千金棄若遺。  
梁人不好事、名字寄當時。  
魯史盜齊豹、求名誰復知。  
慎無怨世俗、猶不遭仲尼。

■ 【01-2-043】 大雪独留尉氏有客入馭呼与飲至醉詰旦客南去竟不知其誰

古馭無人雪滿庭、有客冒雪来自北。

紛紛笠上已盈寸、下馬登堂面蒼黑。

苦寒有酒不能飲、見之何必問相識。

我酌徐徐不滿觥、看客倒尽不留湿。

千門昼閉行路絕、相与笑語不知夕。

醉中不復問姓名、上馬忽去橫短策。

■ 【01-2-044】 与楊濟甫